

龍野市

小犬丸遺跡 II

県道竜野相生線道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1989年3月

兵庫県教育委員会

小犬丸遺跡 II 正誤表

頁	行	誤	正
6		第4図 周辺の遺跡	第4図 周辺の遺跡 (1:25000 龍野 ・二木・精干・相生)
7	5	晩期の遺跡は方吹遺跡、	晩期の遺跡は片吹遺跡、
11	11	山面で柱穴や土坑を検出した。	山面で柱穴や土坑を検出した。
12	3	土坑の中央部には	土坑の中央部には
20	15	区の湿地体のはば中央で	区の湿地帯のはば中央で
21	26	井戸破棄に伴って	井戸廃棄に伴って
57	5	この他、細辺ではあるが	この他、細片ではあるが
60	2	平瓦および磚である。	平瓦および博である。
66	19	□部の乙の戸の三十人	□部の乙公の戸の三十人
79	16	表3に示した通りである。	表2に示した通りである。
101		第70図 105	第70図 102
104	21	掘立柱建物か想定さ	掘立柱建物が想定さ
109	3	これをみと、	これをみると、
115	2	当地區に破棄されていた	当地區に廃棄されていた
115	6	出土は利用を示しているし、	出土は水の利用を示しているし、
115	8	日高町・姫谷・川岸・出石町砂入	日高町・姫谷・川岸、出石町砂入
118		第79図	
119	13	(吉本1986)	(昭和61年3月12日付 神戸新聞)
120	11	では弥生時代から	で弥生時代から
120	17	道路は断続使用されており、	道路は継続使用されており、
120		(第80図) 道路状遺構 集石遺構	道路状遺構 集石遺構
121	17	跡が布勢駅家である可能性が	跡が布勢群家である可能性が
122	9	断続性のある資料としては	継続性のある資料としては

龍野市

小犬丸遺跡 II

県道竜野相生線道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1989年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、県道竜野・相生線道路改良事業に先立ち、兵庫県竜野土木事務所の依頼を受け、兵庫県教育委員会が昭和59・60年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した調査報告は小犬丸遺跡のほか、津原古墳・小畠遺跡があるが、主要報告である小犬丸遺跡の名を採って書名とした。またすでに県道姫路・上郡線関係の調査報告として兵庫県教育委員会が刊行している『小犬丸遺跡Ⅰ』に続く報告として『小犬丸遺跡Ⅱ』とした。
3. 本書では、第V系の座標を使用し、方位については真北で示した。なお、真北(T. N.)は座標北(G. N.)に対してN $0^{\circ}6' E$ 、磁北(M. N.)はN $6^{\circ}38' W$ である。
4. 本書に示したレベルは東京湾平均海水準(T. P.)基準である。
5. 本書に使用した実測図は調査員と補助員とで作成したもので、遺構写真は調査員が撮影し、遺物写真は森昭氏に撮影委託したものである。
6. 本報告のなかでの各種分析について、木簡の解説は奈良国立文化財研究所鬼頭清明、綾村宏・寺崎保広の各氏に、木製品の樹種同定は木質古文化財調査会島地謙氏に、木製品の年輪年代測定は奈良国立文化財研究所光谷拓実氏に、自然遺物(歯)の鑑定は奈良国立文化財研究所松井章氏に、火山灰の分析は群馬大学新井房夫氏にそれぞれお願ひした。
7. 本文の執筆分担は第3章第2節井戸および第3節の土師器・陶磁器の項を山上雅弘が、第3章第3節の稜杭および第6章第1節の稜杭の項を小川真理子が、その他を山下史朗が分担した。
8. 本書の作成には調査員と補助員とがあたり山下が編集した。

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 小犬丸遺跡と既往の調査	1
第2節 調査に至る経過	2
第3節 発掘調査の経過	3
第4節 整理作業	4
第2章 遺跡とその周辺	5
第3章 小犬丸遺跡の調査	9
第1節 確認調査	9
1. A地区	9
2. B地区	11
3. C地区	12
第2節 遺構	15
第3節 出土遺物	25
1. 土器	25
2. 墨書き土器	58
3. 瓦	60
4. 木簡	66
5. 木製品	68
6. 自然遺物	78
7. 石製品	78
第4節 小犬丸遺跡出土木器の樹種	79
第5節 年輪年代測定法による小犬丸遺跡出土木製品の年代推定について	89
第4章 津原1号墳の調査	93
第1節 遺構	93
第2節 出土遺物	96
第3節 中世墓	98
第5章 小畠遺跡の調査	100
第1節 確認調査	100
第2節 小畠十郎殿谷遺跡の調査	104
第6章 遺構と遺物の検討	107
第1節 出土遺物の検討	107
第2節 遺構の検討	118
第7章 おわりに	121

挿図目次

第1図 小犬丸遺跡の位置	1	第31図 須恵器 瓢(2)・横瓶	42
第2図 県道竜野相生線と調査地区	2	第32図 須恵器 壺・横瓶・甌	43
第3図 拝西平野の地形と遺跡の立地	5	第33図 須恵器 砥	43
第4図 周辺の主要遺跡	6	第34図 土師器 杯A	45
第5図 小犬丸遺跡調査地位置図	9	第35図 土師器 杯B・楕・蓋・皿・高杯	47
第6図 小犬丸地区の調査区	10	第36図 土師器 瓢(1)	49
第7図 A地区の土層	11	第37図 土師器 瓢(2)	50
第8図 C地区の土層	13	第38図 土師器 瓢(3)	51
第9図 C地区出土遺物	14	第39図 土師器 瓢(4)・鉢	53
第10図 A1区土層図	16	第40図 土師器 鍋	54
第11図 A1区全体図	17	第41図 製塩土器	55
第12図 S F 0 1 断ち割り断面図	19	第42図 陶磁器	56
第13図 井戸1(S E 0 1)	20	第43図 弥生土器・土師器	57
第14図 井戸1出土遺物	21	第44図 軒丸瓦・軒平瓦	61
第15図 集石遺構(S X 0 1)	22	第45図 平瓦(1)	63
第16図 S X 0 3 下層出土の須恵器	23	第46図 平瓦(2)	64
第17図 B1区火葬遺構(S X 0 3)	24	第47図 丸瓦	65
第18図 須恵器 杯A(1)	26	第48図 木簡	67
第19図 須恵器 杯A(2)	27	第49図 鳥形木製品	69
第20図 須恵器 杯B(1)	29	第50図 馬形	70
第21図 須恵器 杯B(2)	30	第51図 斎串	71
第22図 須恵器 蓋	32	第52図 曲物	72
第23図 須恵器 椀	33	第53図 接物	73
第24図 須恵器 穂橈	34	第54図 下駄・糸巻・杓子・木錐・不明木製品	74
第25図 須恵器 皿	35	第55図 田下駄・刀形・船形	76
第26図 須恵器 高杯	36	第56図 石帶	78
第27図 須恵器 壺(1)	37	第57図 木製品切辺顯微鏡写真(1)	85
第28図 須恵器 壺(2)	38	第58図 木製品切辺顯微鏡写真(2)	87
第29図 須恵器 壺(3)・鉢	39	第59図 曲物底板の年輪変動パーソングラフ(上)と 曆年標準パーソングラフ(下)	91
第30図 須恵器 瓢(1)	41		

第60図	木皿と曲物底板	91
第61図	B 3 区(津原1号墳)地形測量図	93
第62図	墳丘土層断面図	94
第63図	横穴式石室	95
第64図	石室床面遺物出土状態	96
第65図	古墳出土須恵器	97
第66図	中世土器出土状態	98
第67図	古墳出土の中世土器	99
第68図	小畠地区の調査区	100
第69図	N 地区グリッド配置図	101
第70図	N 地区の土層	101
第71図	N 地区出土の遺物	102
第72図	K 地区の地形と調査区	103
第73図	掘立柱建物跡	105
第74図	K 地区出土の土器	106
第75図	須恵器の法量	109
第76図	土師器の法量	110
第77図	土師器甕・鍋の口径分布	111
第78図	平瓦叩き目の各種	114
第79図	A 地区周辺の微地形	118
第80図	遺跡の変遷	120
第81図	播磨国の古代官道と駅家	122
第82図	古代の揖保川流域	123

表 目 次

表 1	主要遺跡一覧表	7
表 2	小丸遺跡出土木製品の樹種	83
表 3	木製品2点の年代測定結果一覧表	89
表 4	土器出土層位一覧表	92
表 5	小丸遺跡出土品の構成	108
表 6	稜楕分類表	112
表 7	小丸遺跡出土瓦の構成	115

図 版 目 次

図版一	上 西方上空からみた小丸遺跡 下 東方からみた小丸遺跡	
図版二	上 南方上空からみた小丸遺跡 下 調査地全景	
図版三	上 小丸遺跡遠景(南西から) 下 小丸遺跡全景(西から)	
図版四	上 A 1 区の全景(下が北) 下 A 1 区の道路状遺構	
図版五	上 A 1 区井戸 1 検出状況 下 井戸 1	
図版六	上 井戸 1 断ち割り 下 井戸 1 遺物出土状態	
図版七	上 集石遺構 下 上層遺構	
図版八	上 土層断面 下 B 1 区火葬遺構	

図版九	須恵器 杯A	図版二十五 墨書き土器 1
図版十	須恵器 杯A・蓋	図版二十六 墨書き土器 2
図版十一	須恵器 杯B	図版二十七 墨書き土器 3
図版十二	須恵器 杯B・椀・蓋・稜椀	図版二十八 墨書き土器 4
図版十三	上 須恵器 稲椀 下 須恵器 椭・鉢	図版二十九 墨書き土器実測図 1
図版十四	井戸 1 出土土器・須恵器皿	図版三十 墨書き土器実測図 2
図版十五	須恵器 壺・蓋・鉢・高杯・横瓶	図版三十一 墨書き土器実測図 3
図版十六	須恵器 壺・甕	図版三十二 墨書き土器実測図 4
図版十七	上 須恵器 高杯 下 須恵器 陶甕	図版三十三 墨書き土器実測図 5
図版十八	上 須恵器 壺 下 須恵器 壺	図版三十四 墨書き土器実測図 6
図版十九	上 須恵器 壺 下 須恵器 甕	図版三十五 墨書き土器実測図 7
図版二十	土師器 杯・椀	図版三十六 墨書き土器実測図 8
図版二十一	土師器 皿・蓋・鍋・鉢・甕	図版三十七 墨書き土器実測図 9
図版二十二	土師器 鍋・甕	図版三十八 軒丸瓦・軒平瓦・堵
図版二十三	上 土師器 甕 下 土師器 鍋	図版三十九 上 平瓦 下 平瓦叩き目各種
図版二十四	上 製塙土器 下 弥生土器・土師器	図版四十 丸瓦・石帶・馬の歛・櫛

図版四十一 木簡

図版四十二 鳥形木製品

図版四十三 上 馬形

下 竜串

図版四十四 上 曲物

下 曲物

図版四十五 上 皿

下 田下駄（大足）

図版四十六 上 下駄・不明木製品

下 木錐

図版四十七 糸巻・刀形・船形・不明木製品

図版四十八 上 遠殿脇敷布地全景

下 弥生土器

図版四十九 上 須恵器

下 土師器・瓦

図版五十 上 津原1号墳墳丘土層断面

下 全景

図版五十一 上 橫穴式石室

下 中世土器検出状態

図版五十二 出土遺物 須恵器

図版五十三 出土遺物 須恵器・中世土器

図版五十四 上 小畠十郎殿谷遺跡全景

下 握立柱建物跡

図版五十五 上 №100条里坪境

下 №99AT火山灰検出状況

第1章 はじめに

第1節 小犬丸遺跡と既住の調査

小犬丸遺跡は兵庫県龍野市揖西町小犬丸字大道ノ上に所在する遺跡である。この小犬丸地区はウルスベ・小犬丸・東村の三つの村からなり、当該地は通称東村に当たる。

小犬丸遺跡は早くから古瓦の出土する所として知られ、その出土瓦の形式から奈良時代に瀕する寺院跡と考えられていた。このことは昭和17年に出版された『播磨上代寺院址の研究』には小犬丸庵寺として詳しい報告がなされている。この中で、鎌谷木三次氏が古代山陽道との関係を指摘されていることは注目される。

昭和35年になって今里幾次氏により、古瓦出土地の中には古代山陽道に伴う駅家跡が該当する可能性が指摘され(今里1960)、さらに昭和43年には高橋美久二氏は、瓦の形式から古瓦出土地の中から9箇所の駅家推定地を抽出して、小犬丸遺跡が延喜式にみえる布勢驛家であることが始めて提示されたのである(高橋1968)。この説はその綿密な考察によって多くの研究者に認められ今日に到っている。また、木下良・吉本昌弘氏らは空中写真・地形図等の判読から、直線的に伸びる幅約20m程の条里の余剰帶を発見し、これが古代山陽道の道代であることを指摘した(木下1976、吉本1985)ことも高橋氏の説を裏付けることになった。

しかしこの段階では、実際の発掘調査等によりその内容が確かめられたり、駅家跡を証明する物的証拠は発見されておらず、また全国的にみても駅家遺跡の実態が解明された例がないため、小犬丸遺跡が駅家跡であるということについては何ら確証は得られていないかったのが実状である。

ところが、昭和57年度になって当地を走る県道姫路・上郡線の道路拡幅改良工事の話が持ち上がり、その工事区域が駅家推定地の中央を横切ることから、兵庫県教育委員会では確認調査を実施した。この結果、東西100m以上の区域にわたって古瓦の出土を見たため、翌昭和58年度に当該工事区域を全面調査することになった。この調査の結果、東西80mにおよぶ範囲で溝と築地に囲まれた



第1図 小犬丸遺跡の位置

瓦葺建物群が、その東方でも掘立柱建物群や井戸などが検出され予想以上の成果を上げた。ここに至って、駅家は主要部分が瓦葺建物群により構成されているという考え方方に裏付けが与えられたわけであるが、この段階でも小犬丸遺跡が布勢驛家であると断定できる決定的な証拠は得られていないのである。

第2節 調査に至る経過

県道竜野・相生線の道路改良計画が兵庫県教育委員会に持ち込まれたのは、まだ小犬丸遺跡を発掘調査中の昭和58年度末のことであった。この工事計画は、兵庫県が進めている、21世紀の西播磨地区の核となる先端技術の研究生産基地である西播磨テクノポリス（小犬丸遺跡の北西約12km、揖保郡新宮町・赤穂郡上郡町・佐用郡三日月町にまたがる山間部）と、将来の山陽地方の大動脈とするべく急ピッチで工事の進められている山陽自動車道龍野西インター・チェンジ及び国道2号線とを結ぶ基幹道路として、県道竜野・相生線の付け替え工事として実施されるものである。



第2図 県道竜野・相生線と調査地区

県教委では、昭和59年3月に予定路線内の分布調査を実施して、遺物の散布が認められる地域及び古墳状の隆起が認められる地点について確認調査が必要であることを示した。

確認調査の対象地は、小犬丸遺跡の中心から東へ200m、県道姫路・上郡線と竜野・相生線との分岐点であるA地区から、現竜野・相生線に交わるN地区までの2kmに渡るもので、調査は南のN地区から順に北方へ進めていくことになった。しかし、県教委では当該年度の全地域の調査は不可能で、竜野土木事務所及び龍野市教育委員会と協議した結果、A～C地区（小犬丸地区）及びJ～N地区（小畠地区）の確認調査を県教委が、D～I地区（北沢地区）の調査を市教委がそれぞれ分担して実施することになった。

第3節 発掘調査の経過

第1次確認調査 小畠地区（J～N地区）

調査担当 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 主任 小川良太・技術職員 山下史朗
昭和59年8月27日～10月3日に実施。K地区で平安時代末の掘立柱建物跡を、N地区で地表下2.2mで厚さ20cmの始良・丹沢火山灰層（A.T.）を検出、他地区では顕著な遺構・遺物は認められなかった。（『兵庫県埋蔵文化財調査年報』（以下「年報」と略）昭和59年度。小畠遺跡の項参照）

第2次確認調査 北沢地区（D～I地区）

昭和60年1月5日～昭和60年3月20日、龍野市教育委員会が実施。G地区で縄文～平安時代に至る遺跡を発見、北沢遺跡として調査団を編成して全面調査を行う（昭和60年2月25日～昭和60年4月10日）。（『年報』昭和59年度 長尾・北沢地区遺跡、北沢遺跡の項参照）

第3次確認調査 小丸地区（A地区）

調査担当 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 主任 西口和彦・技術職員 山田清朝
昭和60年3月20日～3月29日県教委実施。奈良～平安時代の多量の土器と柱穴を検出。小丸遺跡との関連が考えられる。（『年報』昭和59年度 小丸遺跡の項参照）

第4次確認調査 小丸地区（C地区）

調査担当 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 主査 小川良太・技術職員 山下史朗
昭和60年5月14日～5月23日県教委実施。A地区残りの南半部で水田土壤検出。B地区では火葬遺構と古墳状隆起を検出。（『年報』昭和60年度 小丸遺跡の項参照）

第5次確認調査 小丸地区（C地区）

調査担当 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 技術職員 山下史朗・山上雅弘
昭和61年3月6日～3月13日、A地区全面調査と併行して実施。弥生時代の石包丁が採集された小丸遠殿脇散布地として知られる。調査結果は、地形改変がひどく、削平されてしまっていて、一部弥生時代中期～平安時代後期の土器の出土をみたのみである。

全面調査 小丸地区（A・B地区）

調査担当 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 技術職員 山下史朗・山上雅弘
昭和61年1月16日～3月15日に実施。

第4節 整理作業

整理作業は昭和61年度と昭和63年度に実施した。

昭和61年度

出土遺物の水洗、ネーミング、接合、復元、実測、写真撮影を実施する。

整理作業担当 兵庫県教育委員会

社会教育・文化財課	主査	小川 良太	補助員	岡村真理子
技術職員	山下 史朗			小川真理子
	山田 清朝			八木 和子
	山上 雅弘			新浜 良子
			伴 悅子	
			橋 美香子	
			木村 敏子	

昭和63年度

遺物実測図、遺構実測図のトレース、レイアウトを実施し、発掘調査報告書を刊行する。

整理作業担当 兵庫県教育委員会

社会教育・文化財課	主査	小川 良太	補助員	小川真理子
技術職員	山下 史朗			八木 和子
				新浜 良子
				石野 照代

現地調査及び整理作業にあたっては以下の方々に御教示・御指導をいただいた。御芳名を記して感謝の意を表したい。

秋枝芳 足利健亮 綾村宏 新井房夫 市村高規 今里幾次 岡崎正雄 鬼頭清明 島地謙
志水豊章 高井悌三郎 高橋学 高橋美久二 田中真吾 田中琢 種庭淳介 寺崎保広
別府洋二 前田保夫 松井章 光谷拓実 森内秀造 山中敏史 吉本昌弘

(敬称略・五十音順)

引用文献

今里幾次 1960 「播磨国分寺式瓦の研究」播磨郷土文化協会

高橋美久二 1968 「播磨国の古代駅家」『F H G』11

木下 良 1976 「空中写真に認められる想定駅路」『びぞん』64

吉本昌弘 1985 「播磨国の山陽道古代駅路」『歴史と神戸』128

第2章 遺跡とその周辺

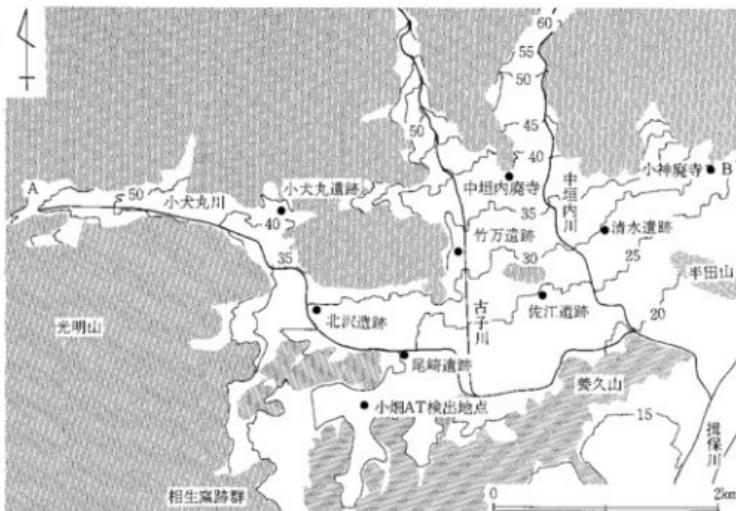
遺跡の位置

小犬丸遺跡の所在する龍野市揖西町は、北は吉備高原東端の山塊、南は龍子・養久山丘陵に挟まれた低地に位置し、北半部は揖保川の支流である中垣内・古子・小犬丸川により形成された扇状地形が連続する緩斜面地で、南半部は揖保川本流・支流のいずれからも埋め残された後背湿地となっている。

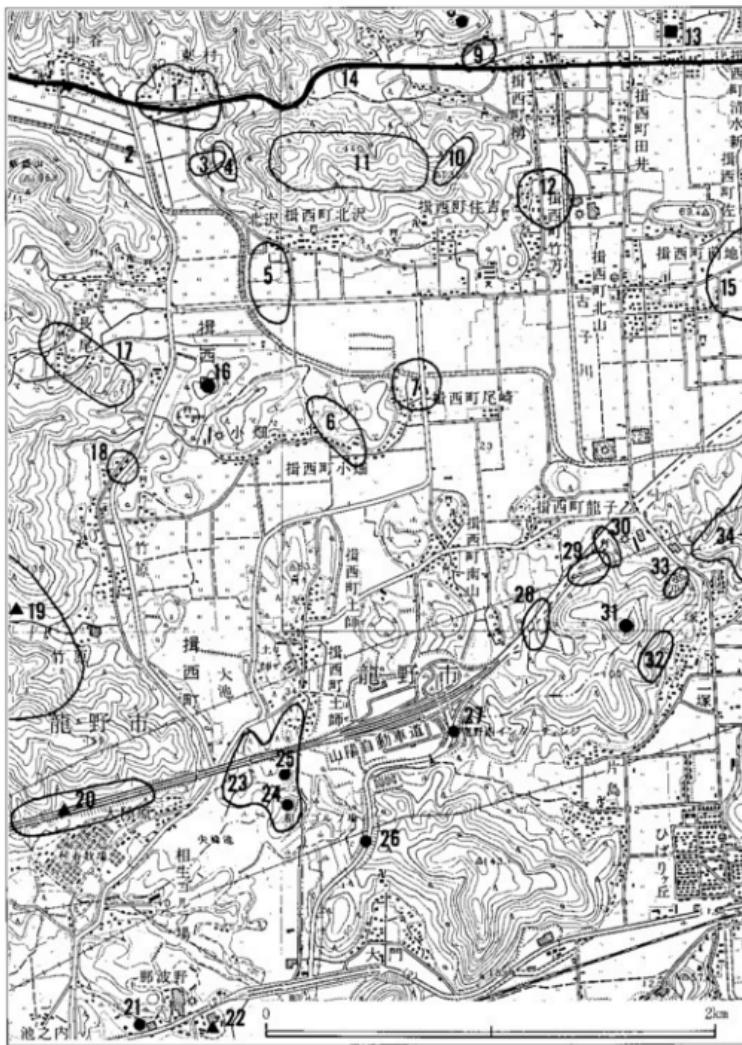
低地と北方の山地とは、東西に直線的に延びる急な崖により区画されるか、または、南部の丘陵との間に東西方向に直線的な谷を形成しているが、この崖が姫路・上郡断層で、後者が断層線谷である(第3図A-B間)。これを利用したルートは、古代山陽道に始まり、現在では県道姫路上郡線が一直線に走るなど重要な交通路となっている。この急崖を削った土砂は南方の低地に向かって扇状地や崖錐を形成しており、小犬丸遺跡はこれらのうちのひとつである崖錐上に立地する。

周辺の遺跡

小犬丸遺跡の所在する龍野市揖西町周辺には多数の遺跡が知られている。これらの遺跡を



第3図 揖西平野の地形と遺跡の立地



第4図 周辺の主要道路

その立地上の特徴から見ていきたい。

龍野市では旧石器時代や縄文時代前半期の遺跡は皿池・奥地遺跡などに散見できるが、今のところまとまった分布・立地は認められていない。これは埋没深度が比較的深いためで、たまたま浅い地点で遺跡が発見されているだけで、今後、この時期の遺跡はさらに発見例が増えるであろう。一方、縄文時代後・晚期の遺跡は方吹遺跡・北沢遺跡などで遺構を伴って発見されており、この時期になると、現在の地形環境により近づいたことがわかる。

弥生時代も中期になると、扇状地末端部に集中してかなりの規模の遺跡が知られている。扇端部の水脈にそって立地する尾崎・竹万・佐江などの遺跡がこれにあたり、おそらくこのころには揖西平野南部の湿地帯を中心に水田耕作が盛んになってきたものと思われる。また、龍子・養久丘陵には龍子向イ山・養久乙城山遺跡など弥生時代中期後半の遺跡が存在していて、その性格が研究上の争点になっている。

西播磨地方は、弥生時代終末期の墳丘墓群の集中する地域として知られているが、特に揖西地域は養久山墳墓群など著名な遺跡が多い。いずれも平地を望む比高差数十～百メートル前後の丘陵上に立地している。

また、揖保川流域は最古級の古墳の分布するところとして著名である。養久山1号墳をはじめ、姫路市丁瓢塚古墳・新宮町吉島古墳・御津町權現山51号墳などが地域集団に対応するかのように分布している。

後期古墳では、揖保郡最後の前方後円墳とされる西宮山古墳が丘陵上に築かれた後、数基から数十基単位の横穴式石室をもつ群集墳が丘陵斜面を中心に行き渡る。最近の調査例では、姫路市大市の西脇古墳群では100基をこえる群集墳が7世紀前半代を中心に築かれ

表1 主要遺跡一覧表

1. 小犬丸遺跡	12. 竹万遺跡	23. 土師古墳群
2. 小犬丸散布地	13. 中垣内庵寺	24. 宿称塚古墳
3. 小犬丸遠殿散布地	14. 古代山陽道推定路線	25. ニワトリ塚古墳
4. 津原古墳群	15. 佐江遺跡	26. 笹田古墳
5. 北沢遺跡	16. 長尾タイ山古墳群	27. 片島古墳群
6. 小畠遺跡	17. 長尾古墳群	28. 龍子長山古墳群
7. 尾崎遺跡	18. 竹原遺跡	29. 龍子向イ山古墳群
8. 東光寺古墳	19. 竹原窯址群	30. 龍子向イ山遺跡
9. 新宮遺跡	20. 大陣原窯址群	31. 龍子三ツ塚古墳
10. 池ノ谷墳墓群	21. 那波野古墳	32. 二塚古墳群
11. 北沢古墳群	22. 丸山窯址群	33. 烏坂古墳群
		34. 養久山古墳群

ていることが明らかとなっており、当地の特殊性を示すものとして注目されている。

寺院・官衙関係遺跡では、古代山陽道沿いに多数の寺院官衙関係遺跡が分布している。白鳳期にさかのほる小神庵寺をはじめ、西脇・中井・中垣内など塔心礎を有し寺院跡と考えられている遺跡や、小丸遺跡や向山遺跡など駅家跡に比定される遺跡がそれである。なかでも、小神庵寺の所在する地域は揖保郡衙推定地にも隣接し、古代における揖保郡の中心地であるといつても過言ではない。

小丸遺跡の南西に位置する光明山の周辺には多数の窯跡が分布している。相生窯址群と呼ばれるこれらの窯跡は、いくつかの支群に分かれるが、最古の窯は相生市丸山窯址群で5世紀にさかのほるもののが知られている。この相生窯址群が最も盛行するのは平安時代になってからで、龍野市域でも竹原周辺に窯跡の分布がみられ、平安時代後期を中心に操業していた模様である。これらの窯跡の製品は揖西地方の諸遺跡のみならず、広範に分布していることが明らかになりつつある。

参考文献

兵庫県教育委員会『小丸遺跡 I』1987

- 〃 『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和57年度—』 1985
- 〃 『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和58年度—』 1986
- 〃 『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和59年度—』 1987
- 〃 『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和60年度—』 1988
- 〃 『龍子長山1号墳』 1984
- 〃 『龍子向イ山』 1987
- 〃 『山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 I 篠田古墳』 1982
- 〃 『宝林寺北遺跡』 1987
- 〃 『相生市・録ヶ丘窯址群』 1986
- 〃 『義久乙城山』 1988

龍野市教育委員会『尾崎遺跡』1977

- 〃 『鳥坂古墳群』 1984

揖保川町教育委員会『鳥坂5号墳』1985

- 〃 『義久山墳墓群』 1985
- 〃 『義久・谷遺跡』 1985

高橋 学「揖保川流域の地形環境」兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』1985

- 〃 「地理的環境」兵庫県教育委員会『宝林寺北遺跡』1987

田中真吾「龍野市付近の地形」「龍野市史」第1巻 1978

松本正信・今里幾次「考古学からみた龍野」「龍野市史」第1巻 1978

森内秀造「相生の古代窯業」「相生市史」第1巻 1984

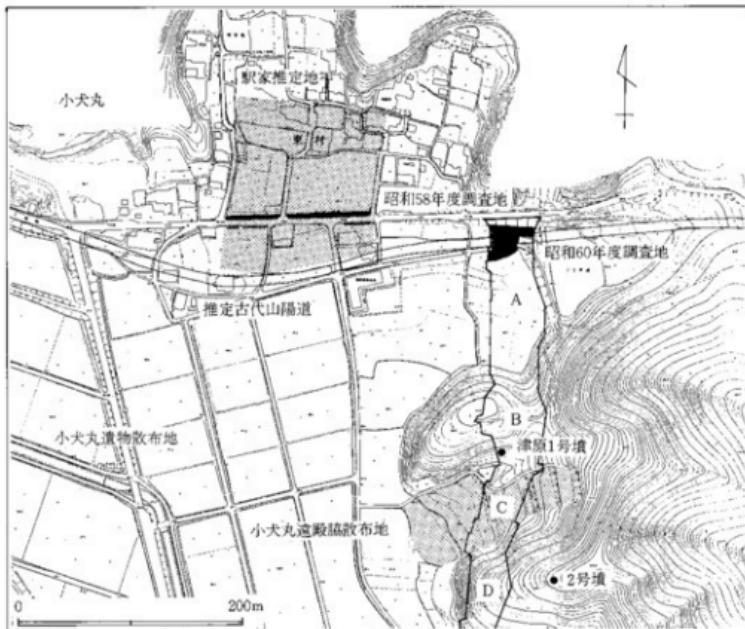
第3章 小犬丸遺跡の調査

第1節 確認調査

1. A地区

調査対象地の最も北側、県道姫路・上郡線との分岐点から南方の尾根までの間の谷間地区である。大道ノ上及び遠殿脇の字名が残る。布勢驛家に推定される小犬丸遺跡の中心からわずか200m東に位置し、古代山陽道の通過地点でもあるため調査には特に注意をはらった。

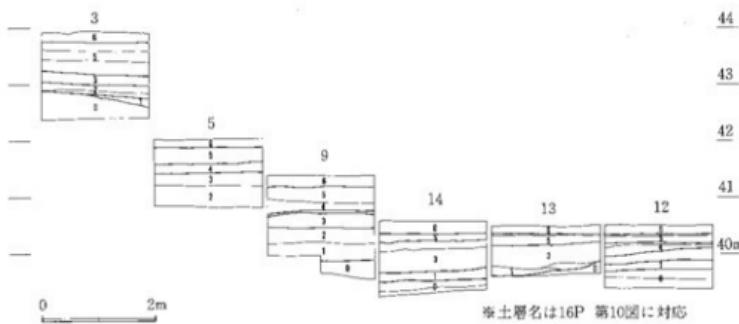
調査は幅40m、長さ130mの対象地に20箇所のグリッドをあけ、土層の観察、遺構・遺物の検出をはかった。この結果、特にNo.1～6で奈良～平安時代の土器・瓦と柱穴等の遺構が検出され、またNo.11では弥生土器の出土をみた。これにより、当地区は大きく二つの地区に分



第5図 小犬丸遺跡調査地位置図



第6図 小犬丸地区的調査区



第7図 A地区の土層

けられることがわかった。第6図をもとに説明しておこう。A地区は、現在では単純な谷間にみえるが、実はNo10～14にかけての谷の本流部分と、No18以南、No20以北にかけては地山が浅く、もともとは南東から北西方向に伸びる尾根を水田開発により削ったもので、したがってこの旧尾根と南の尾根との間に小さな谷が存在する。No11ではこの谷間に厚さ15～30cmの黒い水田土壤が認められ、層中からは弥生時代中期後半の土器片が出土した。このため21トレンチ、さらにはA2調査区を設けてその括りと土層の確認をはかった。この結果、水田土壤はかなり限定された範囲にしか括がらず、畦畔も認められなかった。

一方、谷の本流にあたるNo10～14については、地表下0.9mに黒色の土壤層が認められ、北方の尾根斜面に向かって徐々に浅くなっている。この黒色土壤の上部に灰色のシルト層が厚く堆積し、特にNo5・6では多量の土器類が出土した。また、No1・2では地表下1mの地表面で柱穴や土杭を検出した。いずれも出土遺物は奈良～平安時代前半のもので、墨書き器類等も含んでおり、布勢驛家との関係が考えられた。したがってNo1～6の範囲について全面調査の対象範囲とした(A1区)。

2. B地区

B地区は丘陵尾根にある。字名は津原である。調査地は丘陵上であるため、地形を判断しながら6箇所のトレンチを設定した(No22～27)。この結果、遺構の認められた3箇所について全面調査を実施した。

B 1 区 尾根北斜面に、現状で直径 6 m 程度の円形の窪みが認められたため、ほぼ中央部に幅 1 m のトレンチを入れた。その結果、この窪みは明らかに固い地山の岩盤を人工的に掘削したもので、土坑の中央部には人頭大の石を 11 個、長方形にかためた石組みが認められ、炭層の堆積が認められた。また、掘削された土は下方斜面に搔き出されたように堆積していた。この遺構については小犬丸遺跡の一部として第 3 章第 2 節で詳述する。

B 2 区 尾根の鞍部に設けた 24 トレンチで集石遺構状のものが認められたため、調査区を拡大して B 2 区としたが、遺構・遺物ともに検出できなかった。

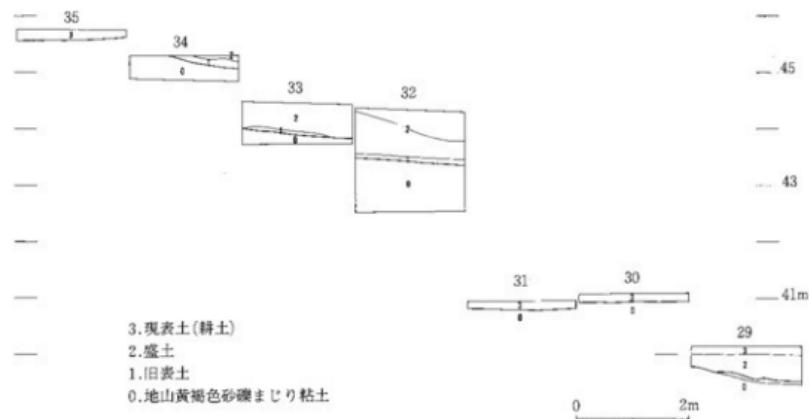
B 3 区 尾根の南斜面裾に、直径 8 m、高さ 2 m 程度の墳丘状の盛り上がりが認められたため、東西に長い幅 0.5 m のトレンチを設定した。この結果、人頭大の石に混じって中世の須恵器片が出土したために全面調査の対象とした。

調査の結果、この盛り上がりは横穴式石室を主体部とするもので、後に中世墓として利用されていたことが判明した。

分布調査時に南尾根の調査区外で横穴式石室墳を発見したために、地名を取って当古墳を津原 1 号墳、南尾根の古墳を同 2 号墳と呼称することとした。これについては第 4 章に詳述する。

3. C 地区

C 地区は尾根に挟まれた谷斜面で小字を遠殿脇という。じつは、この谷奥で以前に弥生時代の石斧が表採されており、小犬丸遠殿脇散布地として知られていた。調査は 8 菌所のグリッドを設定して行ったが、No.28 を除いて遺構・遺物ともに検出できなかった。これは、第 6 図に見るよう谷上半部が著しい人工的改変を受けているためで、第 7 図の土層図でも判るように削平された部分が大きいのである。遺物が認められたために可能な限り拡張した No.28 では、幅およそ 3 m、深さ 1.7 m の谷地形を検出したが、谷を埋めるシルト中に土器を含むのみで、調査区内への遺構の拡がりは考えにくいものであった。しかし、この出土遺物は、弥生時代中期から平安時代末期にわたっており、遺跡がかなり長期にわたって継続していたことを示すものである。この谷は水の供給源として利用されていた模様である。また、地形等を考慮にいれると、遺跡は西方、すなわち谷の下方にかなり拡がっていて、遺存状態も良好であるものと思われる。



第8図 C地区の土層

C地区出土の遺物

すべてNo.28の谷中の埋土から出土したものである。前述のとおり、弥生時代中期から平安時代末にいたるもので、遺物出土総量はコンテナ2箱であったが、遺存状態は悪く細片がほとんどで、図示できるものは少ない。

弥生土器（1～5）

弥生時代中期後半のものである。高杯（1）、器台（2）、壺（3～5）が出土しており、2の器台脚部や5の壺口縁部にみると凹線文盛行段階のもので、年代幅はほとんど持たない単一時期のものである。

須恵器（7～10・12）

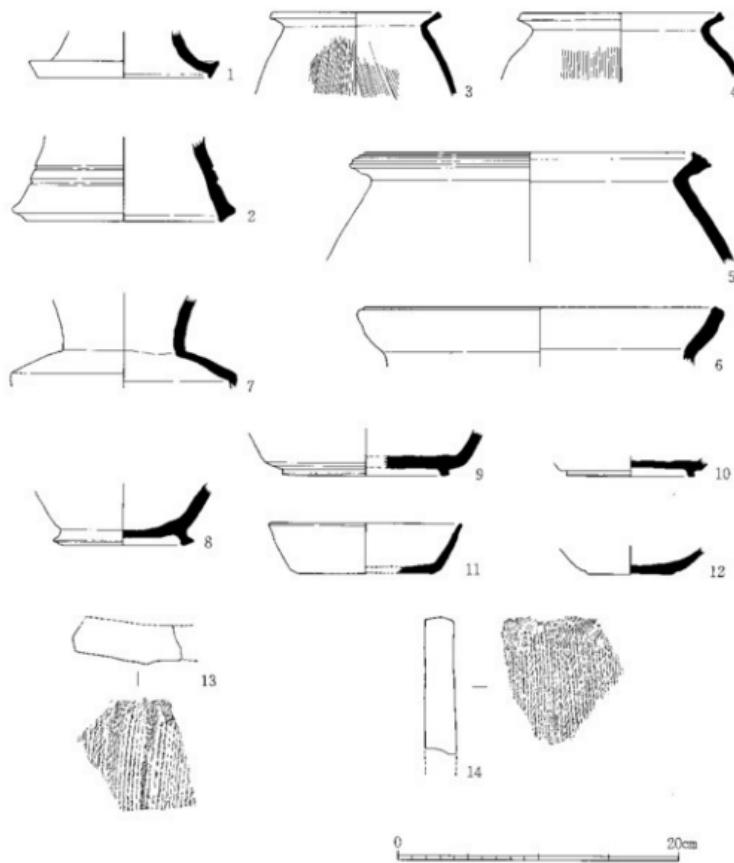
奈良時代のもの（7～10）と平安時代後半のもの（12）がある。量的には出土遺物のはほとんどを占めている。

壺（7・8）は肩部の稜は明瞭で、底部の高台もしっかりしている。9の杯は大型のもので、高台はやや内側に付く。

12の碗は底部糸切で高台をなさず、12世紀代に位置づけられよう。

土師器（6・11）

6の壺は口径26.4cmと大型のもので、分厚い口縁端部をナデで窪める。肩のあまり張らないタイプのものであろう。11の杯は口縁部は薄く単純に納め、外面はナデで仕上げる。口径



第9図 C地区（遺殿脇散布地）出土遺物

13.8cm、器高3.6cm。

瓦（13・14）

小片であるが、数点出土している。すべて平瓦片で、凸面の整形は綱印きによっている。厚みは2.2~2.8cm程度である。

第2節 遺構

1. 立地

A 1区は北方の山地から派生した尾根斜面が谷に向かってなだれ込む地点に位置する。現状では東方の琴坂峠から現県道が尾根斜面下方よりを大きく削り、また一部盛土によりながら東西方向に通過している。その南方の谷間一帯が現水田地帯で、山裾部では階段状の田面を形成している。ちょうど調査区の中央を通る農道が実は元の県道で、西方から小犬丸遺跡の本体の立地する扇状地を大きく迂回するように通過し、調査地の東で琴坂池の堤防上を南へ取り、南側の斜面を通りて琴坂峠に至る。

調査地点は、ちょうど尾根斜面と谷部の湿地帯との境界部に位置しており、ほぼ旧県道を境に、北は比較的地山面が浅く、南は深く湿地性の堆積物に覆われている状態である。

2. 土層

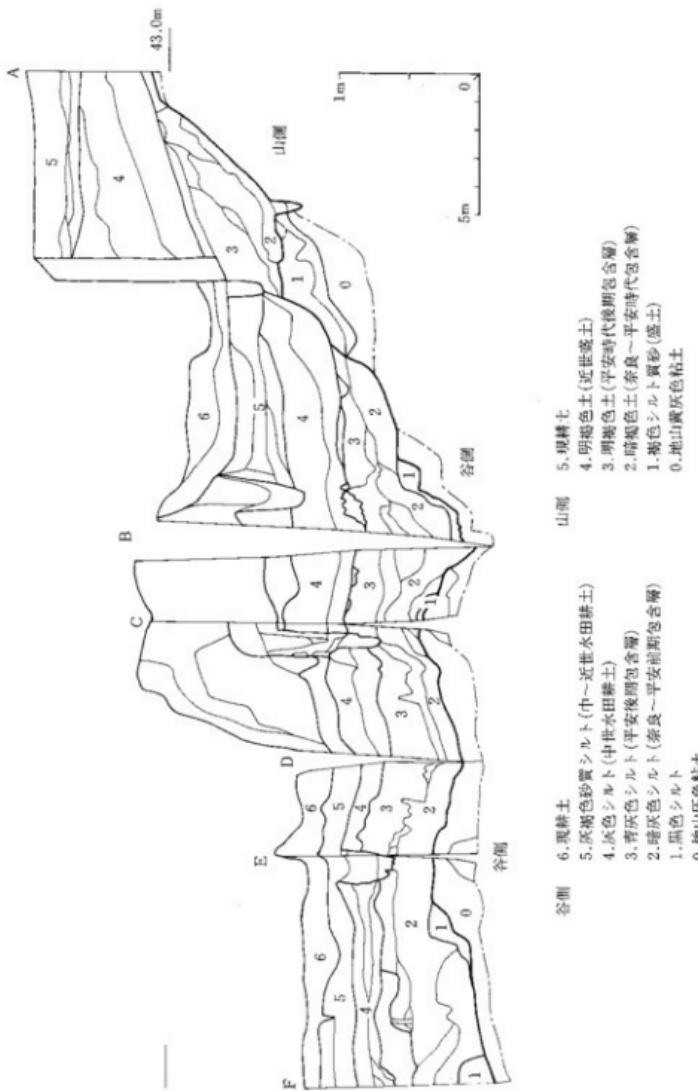
調査地の立地は先に述べたとおり北から南に向かって大きく傾斜している。したがって最も山よりの地点と最も谷よりの地点とでは層位関係は全く異なっている。そこで、ここでは調査地の南北の縦断面を取り上げて、山側と谷側とにわけてそれぞれの層位関係を把握しておくこととする。この場合調査区西側の壁面が最も説明に適しているので、第10図A～F間に基準にしておく。

山側

- 0層：基盤層。灰黄色の粘土を基調とする、いわゆる地山。
- 1層：褐色の砂、あるいはシルト質砂。道路の盛土である。
- 2層：暗褐色土。奈良～平安時代前期の遺物包含層である。
- 3層：明褐色土。平安時代後期の遺物包含層である。
- 4層：明褐色土。近世の水田開発の際の盛土である。
- 5層：現耕土。

谷側

- 0層：山側0層と同じ基盤層。
- 1層：黒色のシルト層。植物遺体を多く含んでいる。弥生中期土器の包含層もある。
- 2層：暗灰色のシルト層。この層が奈良～平安時代前期の遺物包含層である。
- 3層：青灰色のシルト層。平安時代後期の遺物包含層である。
- 4層：灰白色の砂層。洪水層である。
- 5層：中世以後の水田耕土層である。
- 6層：現耕土。



第10図 A1区土層図

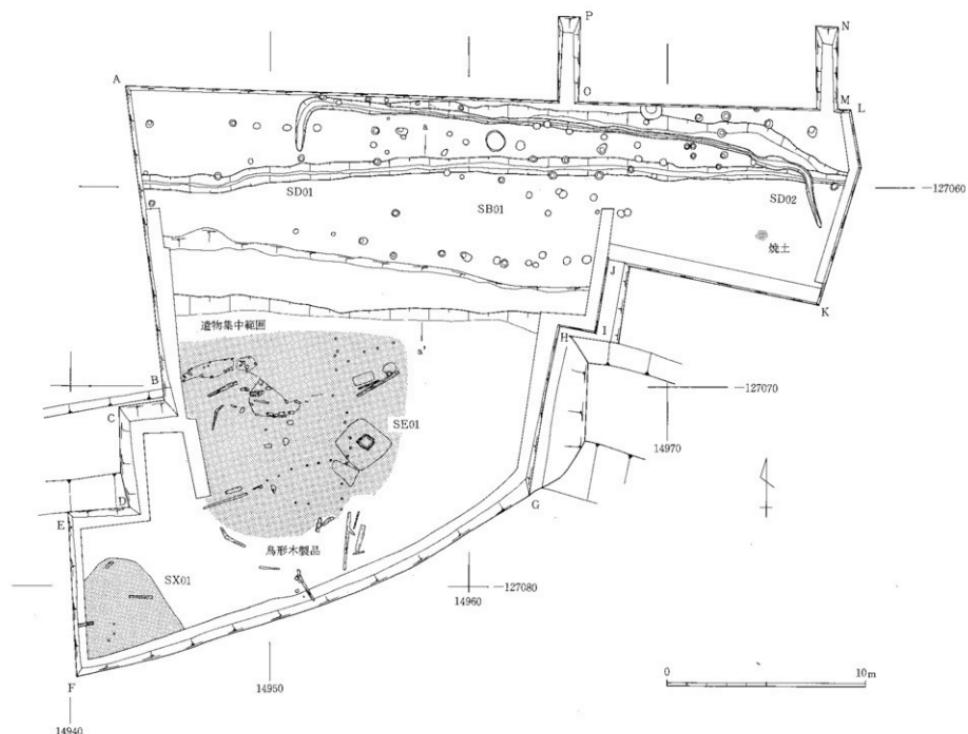


図11 A1区全体図

3. 造構

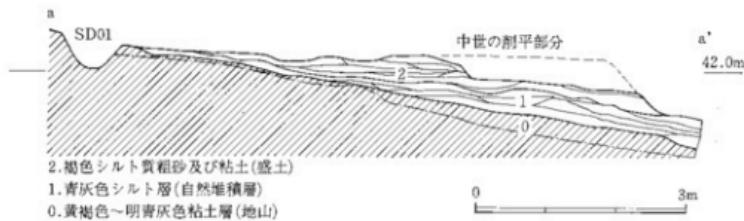
A 1 区で検出した造構は、道路状造構（SF 0 1）、溝（SD 0 1・0 2・0 3）、掘立柱建物跡（SB 0 1）、井戸（SE 0 1）、集石造構（SX 0 1）、水田造構（SX 0 2）、である。またB 1 区で検出した火葬造構（SX 0 3）もここで扱っておく。

道路状造構（SF 0 1）

調査区の北よりの斜面地で、地表下 1 m で地山を掘り込んだ、幅 80 cm、深さ 35 cm 程の溝が検出された。（SD 0 1）。この溝はほぼ東西に一直線に伸び、調査区外に続く。溝からの出土遺物は細片のため年代は明らかにできないが、後述する掘立柱建物跡の柱穴や溝 2（SD 0 2）に切られており、相対的な年代は最も古いものである。

この溝の南側に並行して幅 5 ~ 7 m の平坦面が検出された。立ち割りの結果、山側は地山を削り、谷側には盛土をしていることが判明し、溝 1 と相関関係を持った平坦面であることがわかった。この平坦面は、後世の水田開発により一部削平されているものの、調査区の東西 35 m にわたってほぼ一定の幅で続いている。

これらの溝と平坦面の性格について断定はできないが、①斜面地に溝を掘り、盛土をして細長い平坦面を造りだしていること。②この平坦面に建物を伴わないこと。③道路を通すとすれば、尾根斜面と谷間の湿地との間で最も条件のよい場所であること。④調査地東方に道路の痕跡状の細長い地形が認められること。以上の要件により道路である可能性が高いことを指摘しておきたい。



第12図 SF01断ち割り断面図

溝2（S D 0 2）と掘立柱建物跡

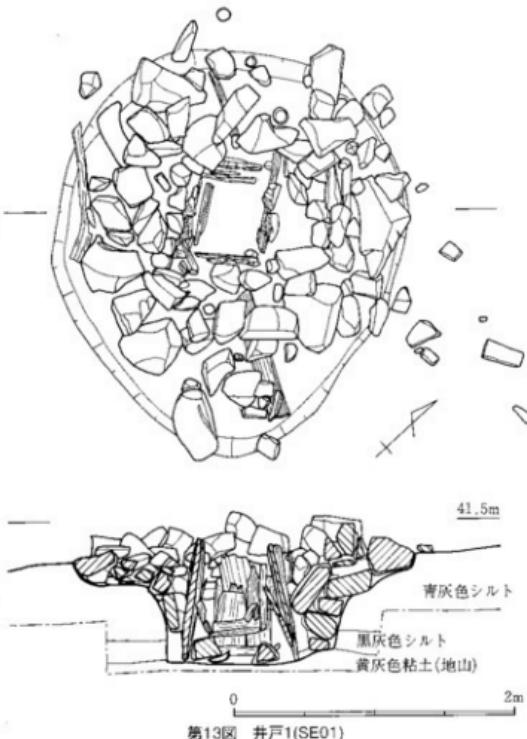
溝2は溝1と一部が重なり、走向が異なる溝である。溝1をきっているため年代は下るものである。溝は斜面をカットして段を造り、その下場に沿って掘削されている。全長は約30mのうち25mほどが直線的に延び、両端で鍵形に曲がっている。幅はおよそ40cm、深さは10cm前後である。

この溝2の周辺には径35cm程度の柱穴群が検出されていて、掘立柱建物が立っていたことがわかる。確実に復元できるものはないのだが、これらの柱穴群の中で溝2と方向・位置関係が一致するものがある（建物1）、溝2はこの建物の雨落溝であったものと思われる。また、柱穴には溝2を切るものがあり、建物1とは別の、年代の新しい建物が存在していた模様である。なお、これらの建物に伴うものと思われる焼土面が2箇所で認められた。

井戸（SE 0 1）

上方は石組み、下方は木組みの井戸である。A区の湿地体のほぼ中央で検出された。ここは東北方向から流れている小さな谷の上に当たっており、調査中も水が湧々と湧き出していた。井戸は黒褐色土層を基盤として淡緑色粘質土層まで掘られていた。検出した面から上にも石組みはあったと思われるが後世の水田等の開発のため破壊されたものと思われる。木組みは全体が残っていた。掘り方の最大径は検出面にあり、2.9m、隣辺は2.58mである。残存部の深さは0.9mである。

検出状況は、石組みは



第13図 井戸1(SE01)

グリ石も含めて井戸内部方向に崩れており、特に北東方向が大きく損壊していた。このため、下部に構築された木組みにも大きく影響を及ぼし、横方向の棟が脱落したり、木組みの側板が内側に押され大きく変形していた。また、石組みは人頭大の石を積んでいたが、崩れのために石の構築状況などを復元することは出来なかった。

木組みの構造を復元すると、構築時は1辺65cmの平面方形

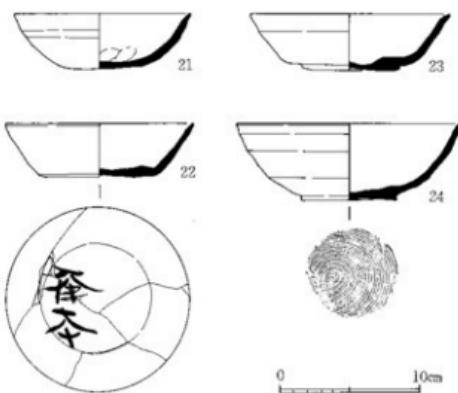
に組み、掘方との隙間を人頭大の石によってもたせていた。4隅には支柱をたて横棟を上下2本通して支えていた。横棟は支柱に柄を開けて差し込んで持たせたものと考えられる。隅の支柱は建築材の転用と思われ不要な場所にも柄を開けていた。これに側板を外側からもたせかけて掘り方を埋め、木組み全体を持たせていた。側板は幅10cm~20cm、厚さ5cm前後のもので1辺に4枚ないし5枚程度使用し木組み全体を覆っていた。

木組みは、深さ88cm程残存していた。掘り方は粘質土の中に掘り込んでいたが、最下層は砂礫層に達していた。谷地形の水が流れる層はこの砂礫層の直上を流れしており、井戸はこの水を飲み上げるように構築されていた。

井戸内部には、井戸側に組まれていた石や木組みの横棟の部材が転落していた。埋め土は灰色の粘質土である。

井戸は2回に渡って祭祀が行われていた。井戸の最下層で1回と、それより上、約0.5m程埋まった段階で1回である。井戸破棄に伴って行われたのであろう。それぞれの面で土器が2個体ずつ検出された。上層では23・24、下層では21・22である。上層の土器は、何方も口縁部を上にして置かれ、そして24が井戸の北西隅に、23が南東隅の対角に置かれていた。23は、口径14.3cm、器高4.0cmである。底部窓切りで内面にロクロ痕跡を良く残すものである。24は口径16.1cm、器高5.5cmである。底部糸切り底の椀である。

下層の祭祀面は、21が口縁を上にして南西隅に、22が伏せた状態で井戸側東辺の中程に接して検出された。21は土師器で口径13.2cm、器高4.0cmである。内面と外面の3分の1が横ナデで調整するが、他は未調整である。22は須恵器で口径13.5cm、器高3.8cmである。底部は窓削



第14図 井戸1出土遺物 (21・22: 下層、22・24: 上層)
(21: 土師器、22~24: 須恵器)

り調整を施すもので、全体は横撫で調整されている。底部に墨書で「律令」と呪いと思われる言葉が書かれている。

祭祀面を最下層と、上層の2面検出したが、下層は土器からすると9世紀中頃～後半、上層は10世紀後半～11世紀初頭と考えられ、1世紀間の隔たりがある。構築した当初の使用時には、下層まで使用していた井戸を、10世紀後半～11世紀初頭以後は、水位その他の理由から、0.5m埋めて、さらに1世紀以上使用したと考えられる。そして、11世紀前後の最終廃棄時に更に祭祀が行われて完全に埋められたと思われる。



第15図 集石遺構(SX01)

集石遺構 (SX 01)

調査区南西隅の地表下0.8mで拳大から人頭大くらいの角ばった石の集積が認められた。集積の範囲は調査区内では北西から南東方向にかけてほぼ一直線に拡がるが、南部・西部については調査範囲外のため不明である。集石は一重に拡がっているもので、全体に西方から東方に向かって傾斜しているが、意図的に石を敷いたものかどうかはわからない。集積内には、石とともに加工木や多量の土器類が出土した。集石部から西方には幅20cm、厚さ10cm長さ2mの角材を裏寄せ、幅の広い面の全体に浅いV字状の溝を掘り、ほぼ同形で厚さが5cmの板状の加工木で蓋をした木桶が埋められていた。

水田遺構 (SX 02)

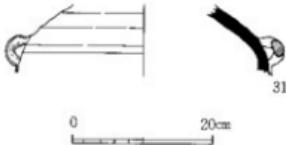
調査区南半ばで、井戸1や集石遺構が埋没したのち水田耕作が行われたようである。径3cmほどの丸木の杭が70cm間隔に打ち込まれている。おそらくは水田畦畔の土留めのために打ちれたものであろう。水田面と思われる層では、一部が洪水砂で薄く覆われている。水田土壤から出土している遺物の年代や、下層の井戸1の年代から判断すると、この水田は11世紀代のものと考えてよからう。

火葬遺構 (SX 03)

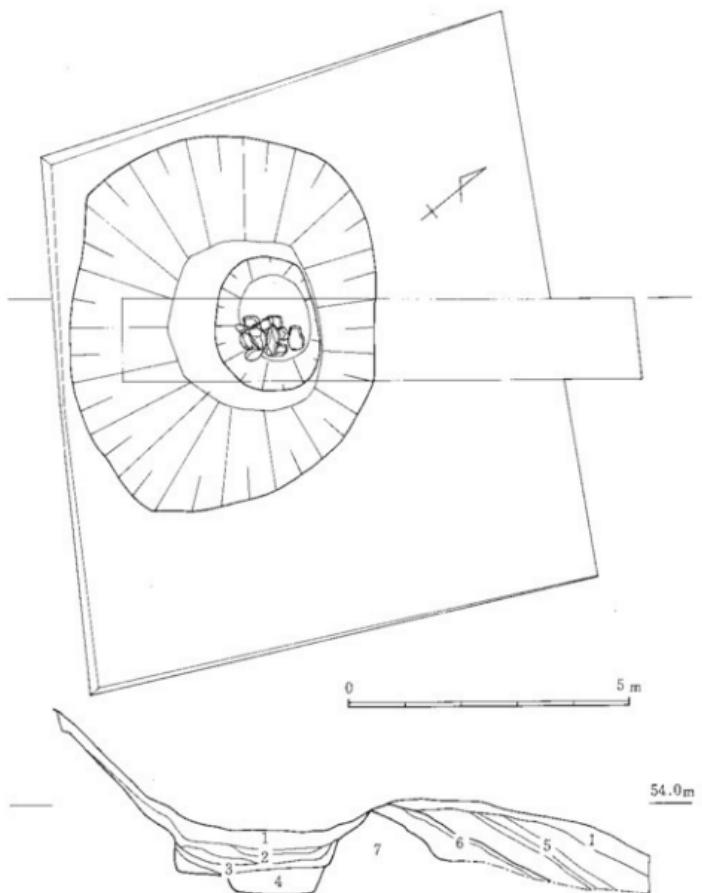
A1区と谷を挟んで南側に対置する丘陵の北斜面に位置する。斜面地に6.5×5.5mの大きさで平面橢円形の穴を掘り、山側で深さ2.6mの地点で一旦3×2.6mの大きさの平坦な底を造り、さらに、2.4×1.8m、深さ40cmの土壙を下に掘り込む。掘られた土は斜面下方へ搔き出され、層をなして堆積している。下層の土壤は炭まじりの土で埋まっていて、第16図の須恵器壺の破片が一点出土した。下層の土坑が埋まった後、上面に入頭大の石を11個、1.1×0.8mの範囲に敷き詰めている。石の周辺には炭や焼土が拡がっている。

遺構の性格については、断定できないが、背後の山中に近年まで火葬場があり、丘陵頂には墓地までが営まれているところから、火葬遺構である可能性を指摘しておきたい。遺構の年代については、出土した土器片からは古代末～中世初頭の年代が考えられようが、遺構の年代をそのまま示すかどうかは即断しがたい。今後の類例の增加を待って判断する必要があるだろう。

出土した土器片は、須恵器の壺の肩部で、丁寧にナデ仕上げされ、肩部に環状の把手がつく。



第16図 SX03 下層出土の須恵器



- | | |
|---------------|-------------|
| 1. 表土 | 5. 灰褐色～赤褐色土 |
| 2. 灰～黃褐色土 | 6. 暗褐色旧表土 |
| 3. 黑褐色灰まじり土 | 7. 地山岩壁 |
| 4. 灰褐色土(下層土坑) | |

第17図 B1区火葬遺構(SX03)

第3節 出土遺物

今回の大丸遺跡の調査地では、遺構に伴う遺物はほとんどなく、大部分は包含層から出土したものである。

出土した遺物には、土器・瓦・石製品・木製品がある。以下に順をおって述べていくが、本節では遺物の説明を中心に記述を進め、総括的な評価は第6章検討で行うこととする。

1. 土器

出土した土器には須恵器・土師器・陶磁器・弥生土器がある。その割合は須恵器・土師器がそれぞれ半数近くを占め、陶磁器・弥生土器が若干混じる程度である。また、須恵器・土師器には墨書き土器を多数含んでいる。

須恵器

最も器種構成が豊かである。年代的には、奈良時代後半から平安時代前半のものを中心とし、古墳時代後期から平安時代末までのものが出土している。

ここで示した器種名については、「平城宮発掘調査報告VII」1976によっている。

杯A (101~171)

総点数で153点以上が出土しており、その須恵器の中に占める割合は31.1%と食膳具の中では最も量が多い。

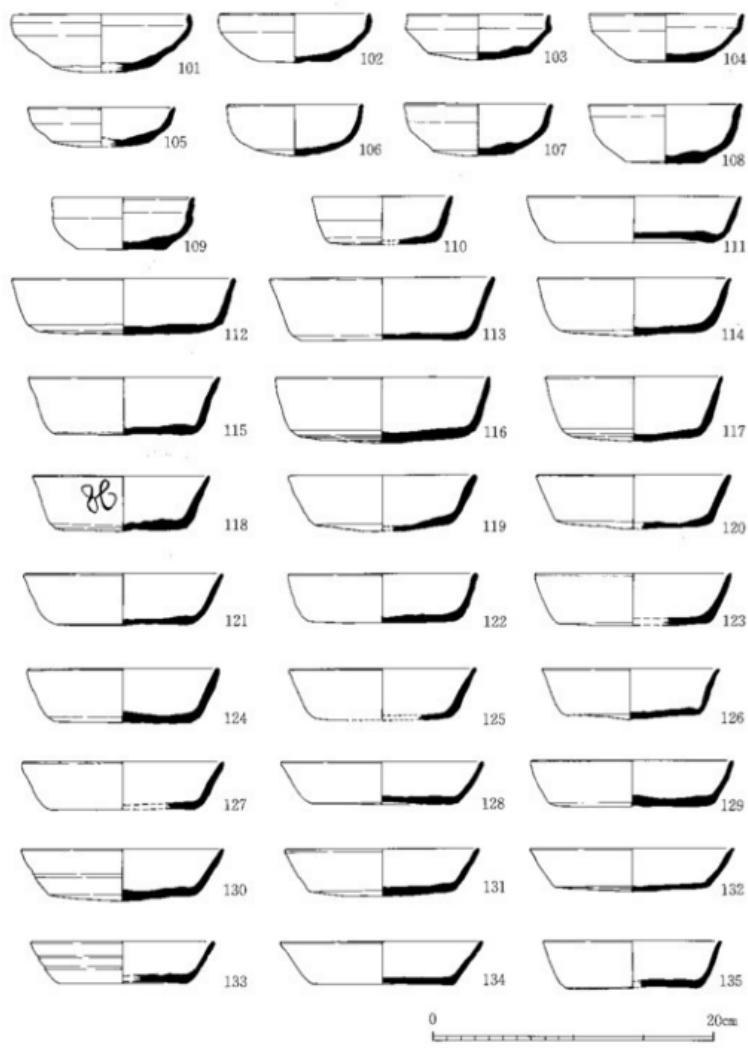
a類 全体を通して見ると、かなりの年代幅が見られるが、101~109は中でもやや他の継続性がなく、古く位置付けられよう。口径12.8cmの101と9.8~11.1cmの102~109とに区分できるが、底部を比較的丁寧にロクロ削りし全体を円く仕上げる106を除くと、他はややつぶれた底部と口縁部を強いためにより屈曲させている点で共通性がある。ただし後者については、蓋との区別が難しく、ここではすべて杯Aとして扱った。

b類 111~114は奈良時代以降のものでは最も古い年代の与えられるもので、口径13.9~16.2cmと大きく底部にも丁寧なロクロ削りが施されている。底部と体部との境界に面取りをするのが特徴である。

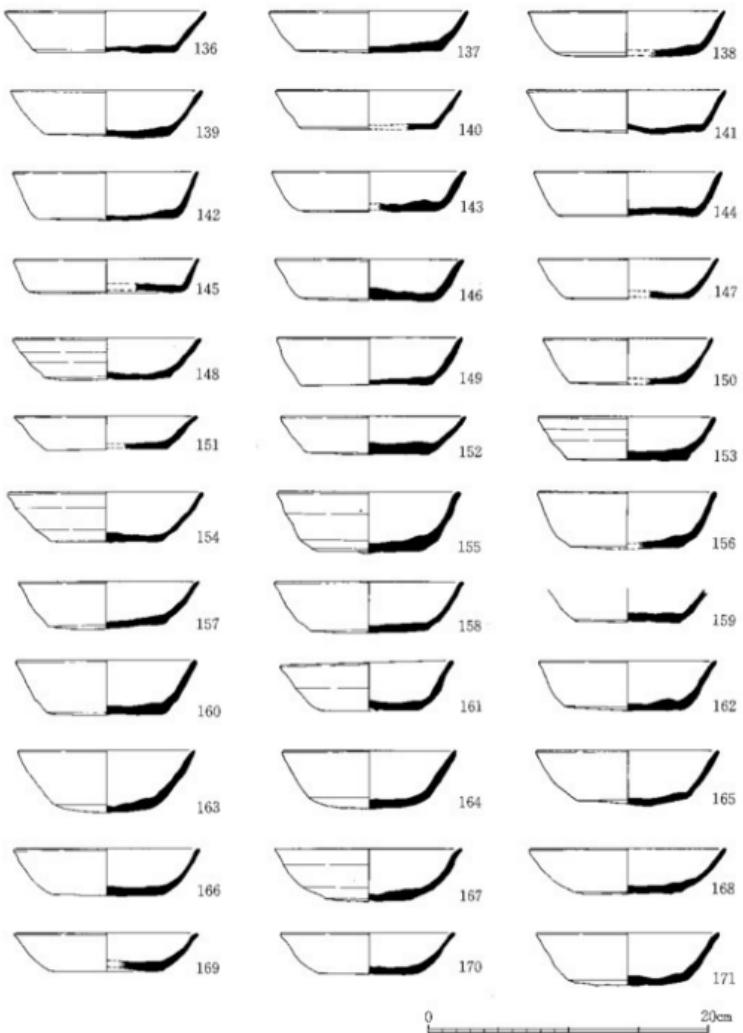
c類 115~118は口径12.8~15.5cmの小型品で、比較的作りは丁寧である。底部をロクロ削りするものが多い。これらは、大丸遺跡のすぐ南方の龍野市竹原3号窯の形式に近い。

d類 127~135は口径12.8~14.6cm、器高3.0~4.6cmと法量の縮小する段階のもの。特に器高の減少が著しく、器高が画一化している。底部と口縁部との境が明瞭に屈曲する。

e類 136~141は口径13.3~14.3cm、器高2.8~3.4cmとd類との差はないが、口縁部の開



第18図 須恵器 杯A(1)



第19図 須恵器 杯A(2)

きが大きくなる傾向がある。西後明3号窯の形式に一致する。

f類 142~147底径はe類とかわらないが、口径が減少する傾向が認められる。したがって、引き続き法量の減少傾向が指摘できよう。西後明12号窯の形式にあてられる。

g類 148~154全体に作りが雑で、特に底部はへラ切りしたまま、体部との変換点は明瞭な棱をなしている。鶴亀1号・入野6号窯がこの類に分類できよう。

h類 155・156比較的深いタイプの土器であるが、作りは雑である。

i類 157~162体部から口縁部にかけて円みをおびるタイプである。底部が不明瞭になる傾向がうかがえる。

j類 163・164底部は8cm前後と比較的小さくへラ切りが明瞭であるが、口縁部にかけてななめにやや長く伸びることを特徴とする。

k類 166~171底部をあまり明瞭につくらない段階のものである。特に、167に代表されるような、楕をごく浅くした形態は杯Aとしては最終末の段階のものといつてもよからう。西後明11号窯~緑ヶ丘落矢ヶ谷1号窯の形式があてはまるだろう。基本的には、a類からk類までの須恵器の年代的変遷を考えている。

杯B (172~226)

個体数78以上と食膳具では杯Aに統いて2番めの量を占める。この器種についてもかなりの年代幅を持っているようである。

173は形態からみて最も古いもので、口径15.0cmで器高は3.4cmと低いが、底径は11.6cmと口径に比して大きい。高台は低いながらもしっかりと作られ、全体に非常に丁寧な作りである。この土器の底部に「驛」の墨書がある(図版25・29)

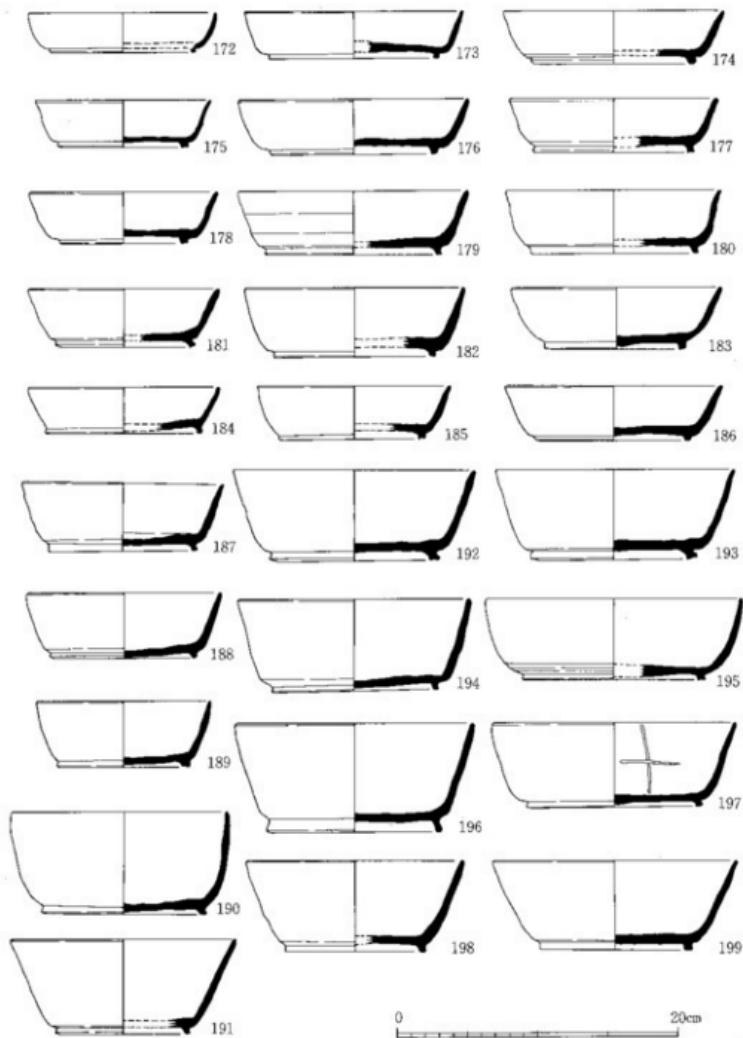
a類 172・174~186は173と同じく器高の低いタイプのものである。口径14cm前後、器高3.5cm前後の172・175・178・181・184・185と口径16cm、器高4.5cm前後の173・174・176・177・179・180・182・183とがある。いずれも丁寧なつくりである。

b類 192~199は口径が大きく器高も高いものである。口径17cm、器高6.5cm前後に集中する。底部と体部の境界部を丁寧にロクロ削りし、高台も高くしっかりとしたものが多い。

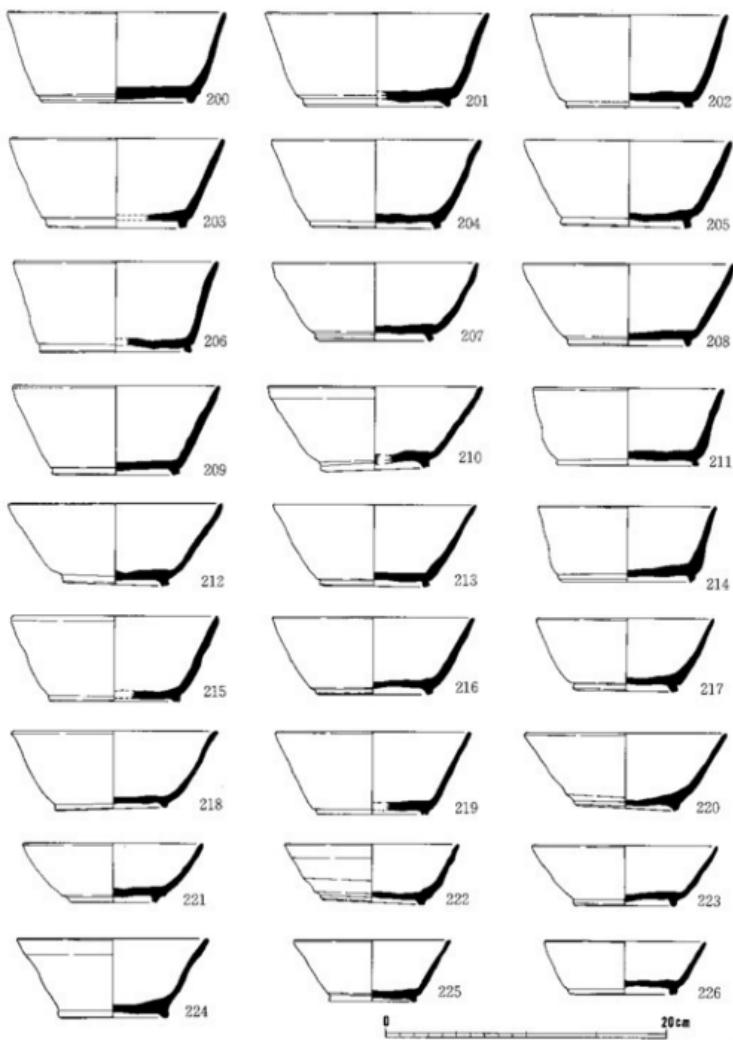
c類 200~206は口径はやや小さくなるものの、器高の高いタイプのものである。b類に比べて器高は6.5cm前後とさほどおおきな変化はないが、口径が15cm程度に縮小している。また高台が底部でも縁辺部に寄っている。

d類 207~213 前者と口径・器高はあまり変わらないが、底径が小さくなっている。c類の底径が10cm程度であったのに対し、8.5cm前後と極端に小さくなる傾向がある。したがって法量の面でもかなりの縮小傾向が認められる。

e類 214~226全体に小振りになり、特に高台部の作りが雑で、形骸化した段階のもの。



第20図 須恵器 杯B(1)



第21図 須恵器 杯B(2)

口径は13cm、器高は4.3cm前後と一段と法量の縮小が進む。高台は底部縁辺にわずかに高さを残す程度についている。226は杯Aの136・149と3枚合わせて重なった状態で出土しており、三者の年代的併行関係を知ることができる。

以上、杯Bを5類に分類したが、ここでは基本的にa類からe類への変遷を考えている。それは、同一器種における器形・法量の画一化、法量の縮小傾向、底径の減少による極化傾向をもとに判断したものである。

蓋 (227~262)

年代・形態ともにさまざまである。杯蓋 (227~229)、杯B蓋 (230~257)、皿B蓋 (258~261)、壺蓋 (227) がある。

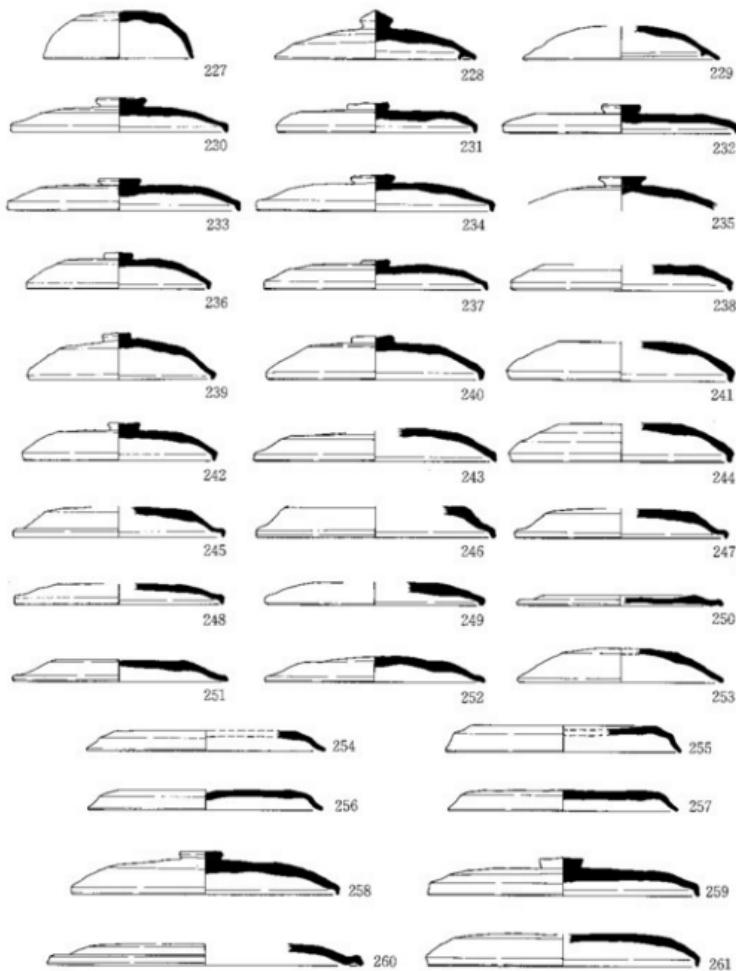
227~229は口縁部内面にかえりを持つ段階の蓋である。ゆるやかにカーブする天井部と宝珠つまみを特徴とする。天井部はロクロ削りする。口径14cm、器高3.6cm前後。230~234やや偏平で端部を下方に折り曲げ、偏平で大きなつまみを持つタイプ。天井部の平坦面はロクロ削りする。径14.2~19.5cm、高2.1~2.7cm。236~244は天井部は平坦だがやや器高の高いタイプ。矮小化したつまみを持ち、端部は下垂する。口径13.5cm前後の小型のものと16cm前後の中型のものがある。器高1.8~3.3cm。245~247は天井部が平坦で、口縁部を強く外方に屈曲させるタイプ。端部は下垂する。口径17~15cm。248~253小さく偏平なタイプ。口縁部を単純におさめるものが多く、つまみを持たせない。口径15cm前後、高0.75~2.45cm。254~257平坦な天井部と鋭く屈曲する口縁部とのさかいに棱を持つタイプ。皿との区別がつきにくい。口縁部は丁寧にナデで仕上げるが、天井部は巻き上げ痕を残すなど軽いナデを施すのみである。口径16.5cm前後、器高1.5cm前後。258~261直径が大きいので皿Bの蓋と思われる。

227は短頭壺の蓋。天井部ヘラ切り。杯との区別が難しいが、外面天井部全面に自然釉がかかっているため壺蓋と判断した。口径10.7cm、高3.6cm。

椀 (263~275)

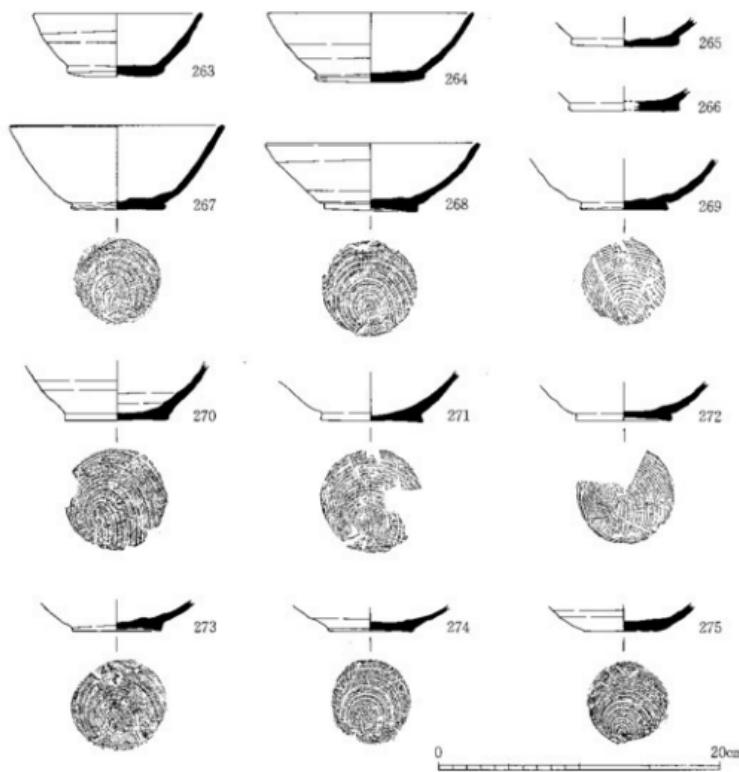
263~266はヘラ切り底平高台の椀である。高台部はそれほど顕著に突出せず、側縁の仕上げも雑である。年代的には10世紀代に収まるものであろう。263の口径12.2cm、器高4.5cm。264の口径14.8cm、器高5cm。

267~275は糸切り底の椀である。267~269のように少し突出した平高台のもの、270~272のようにやや高台が不明瞭なもの、273~275のように高台をなさないものとに分類できる。これらは、それぞれ粗生産址群の一ノ谷10号窯、西後明11号窯、竹原2号窯の形式に当てはめることができ、実年代はそれぞれ10世紀後半、11世紀代、12世紀前半代に位置づけられよう。267の口径15.4cm、器高6cm。268の口径15.4cm、器高5cm。



0 20cm

第22図 須恵器 蓋



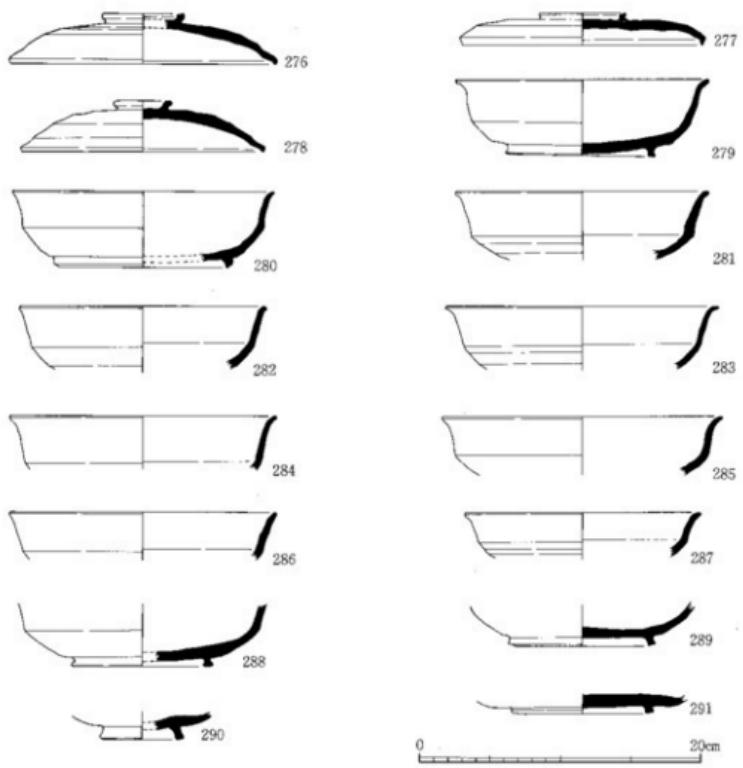
第23図 須恵器 梶

棗梶 (276~291)

蓋が3個体、身が13個体認められるが、内 279・280 はほぼ完形に近く、281~287は体部のみである。

蓋 (276~278) 外面天井部に環状のつまみをはりつけており、口縁部近くまでロクロを利用したヘラ削りを行い、端部を下方につまみ出す。口径は17.5cm前後のものと、19.0cmのものがある。器高は277の2.3cmに対し、276・278は3.5cmと若干高めである。

稜梶 (279~291) 佐波理梶を模倣した器形である。底部に張り付け高台をもち、体部中央

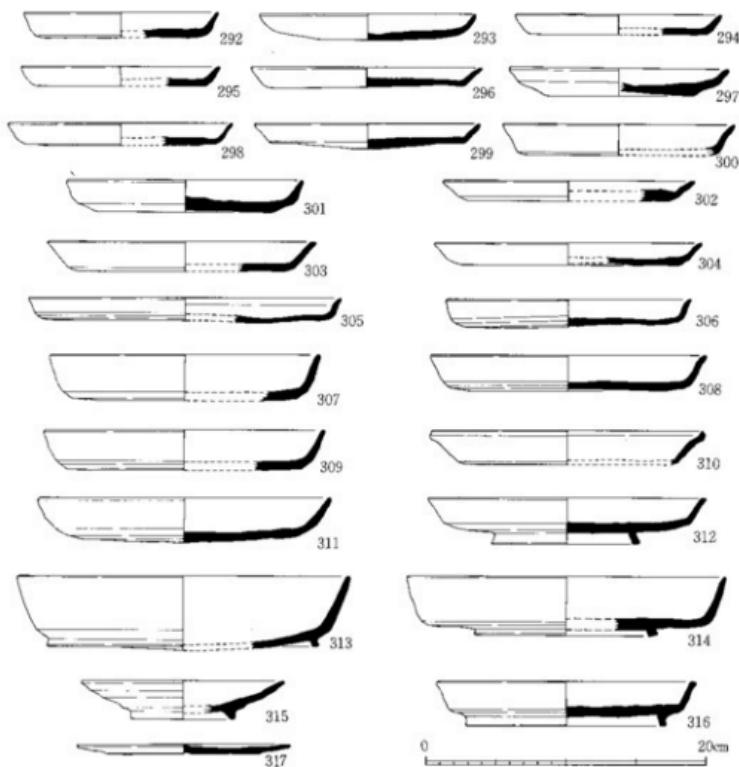


第24図 積惠器 棚柵

の稜線までロクロ削りを行い、口縁部はロクロナデで端部は外反して円くおさめる。口径は17.0~19.8cm程度、器高は口縁部から底部高台まで残存するものが2点しかないが、279が5.5cm、280が6cmである。

皿 (292~317)

平らな底部と短く口縁部の立ち上がる皿A。比較的大型で底部に輪高台を付す皿B。小型で浅い皿部に輪高台を付す皿Cとがあるが、それぞれの中でも年代・用途の違いなどにより大きさ・形態は千差万別である。

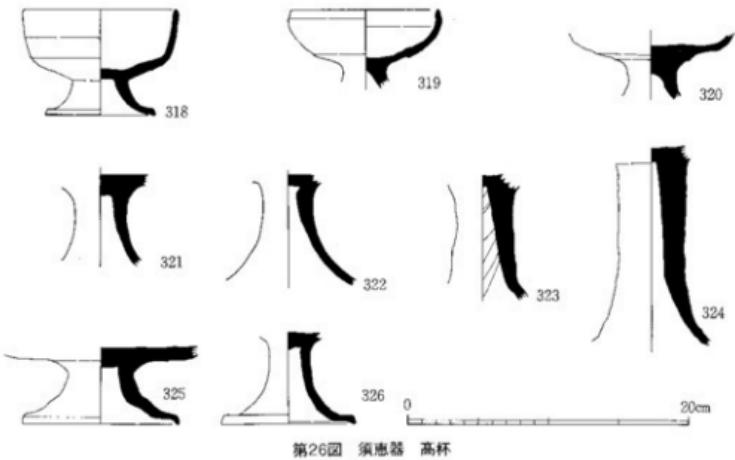


第25図 須恵器 皿

292~311は皿A。単純な平底の短い口縁部を有する。底部をヘラ削りし、比較的丁寧な仕上げをする305~309などは年代的には最も古く位置づけてよからう。口径は18~22cmの範囲に収まる比較的大型のものである。

反対に、特に丁寧に調整を施さず、口縁部のみをナデ仕上げする292~299・301~304などは小型品が多く、年代的にはやや新しい要素をもったものが多い傾向がある。口径は16cm程度を標準に、14~19cmの範囲に収まる。

310はやや外反した口縁部の端部を上方につまみあげるタイプである。土師器の製作手法を取り入れたものであろう。



第26図 痛患器 高杯

311は底部に「宅」の墨書がある。口縁部と底部との境界が明瞭でなく、円みをおびている。口径20.8cm、器高3.2cmと大きめである。

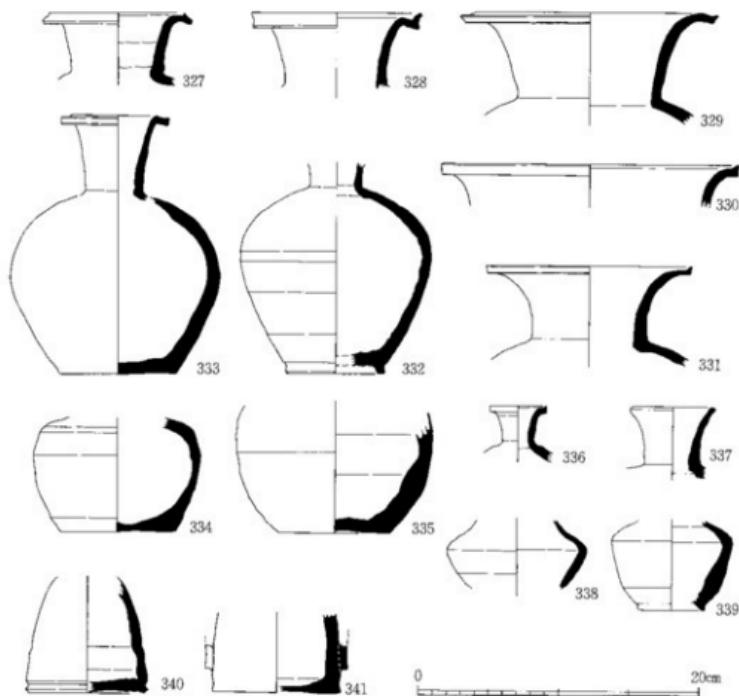
312～314・316は皿B。いわゆる皿に高台を付けた312・314・316と、杯Bの形態のまま直径を大きくした313とに分かれる。どの皿も底部をロクロ削りし、口縁部との境に明瞭な稜を作る。全体に仕上げは丁寧である。312・314は高台を内側に付け、特に312は高台が高い。316は高台が外側に付くタイプである。312の口径20.3cm、器高3.3cm、313の口径23.8cm、器高5.3cm。314の口径22.7cm、器高4.2cm。316の口径18.6cm、器高4.0cm。

315は皿C。灰釉陶器の影響をうけたタイプである。口径14.6cm、器高2.8cm。

この他、317は偏平な形態の皿である。巻き上げ痕を残す粗雑な作りである。口径14.9cm。

高杯 (318～326)

杯部から脚部まで復元できるものは1点しか出土していない。318はその唯一のものである。口径に比して杯部が深く脚部は低いタイプである。脚端部に面を持つ。口径10.9cm、器高7.6cm。319も杯部の形状がわかるものとしては数少ない例である。小さく浅めの杯の口縁部を内湾させる。口径10.4cm。320も基本的には319に似るが、やや大きめで、杯部と脚部との接合部の仕上げが粗い。321～324は脚柱部である。高さ、拡がりともさまざまである。323は内面に絞り痕を残す。325器高は低いが、口径の大きい皿状の杯部形態である。脚部も低いがやや太めで外方に大きく開く。端部をやや下方に折り曲げる。底径11cm。326反りながら水平方向に開いた脚端部に、やや下方につまみ出した端面を作る。底径9.6cm。



第27図 須恵器 壺(1)

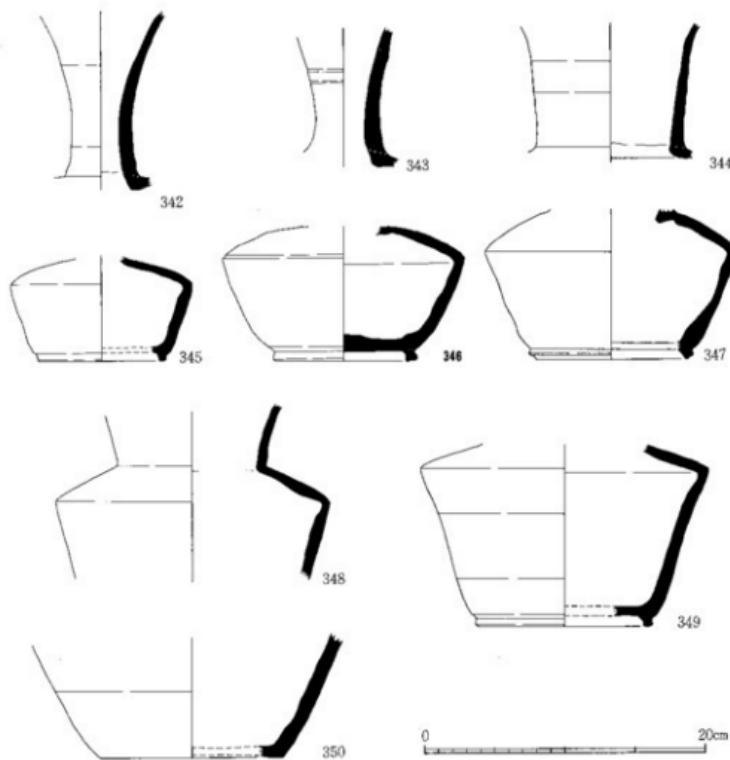
壺 (327~356)

327~335は壺Lである。肩部が円く、口縁部が外方に開いて端部に面を持つものである。全体の大きさがわかる資料は少なく、333では器高19.1cmであるが、やや大小がありそうである。底部に高台をもつものは332のみで、かなり退化した輪高台が付く。その他はヘラ切りの平底である。

336~339は小型の壺である。339は底部にわずかに輪高台を残している。

340・341は瓶である。形態化した輪高台を持つ340と平底で把手の付く341とがある。

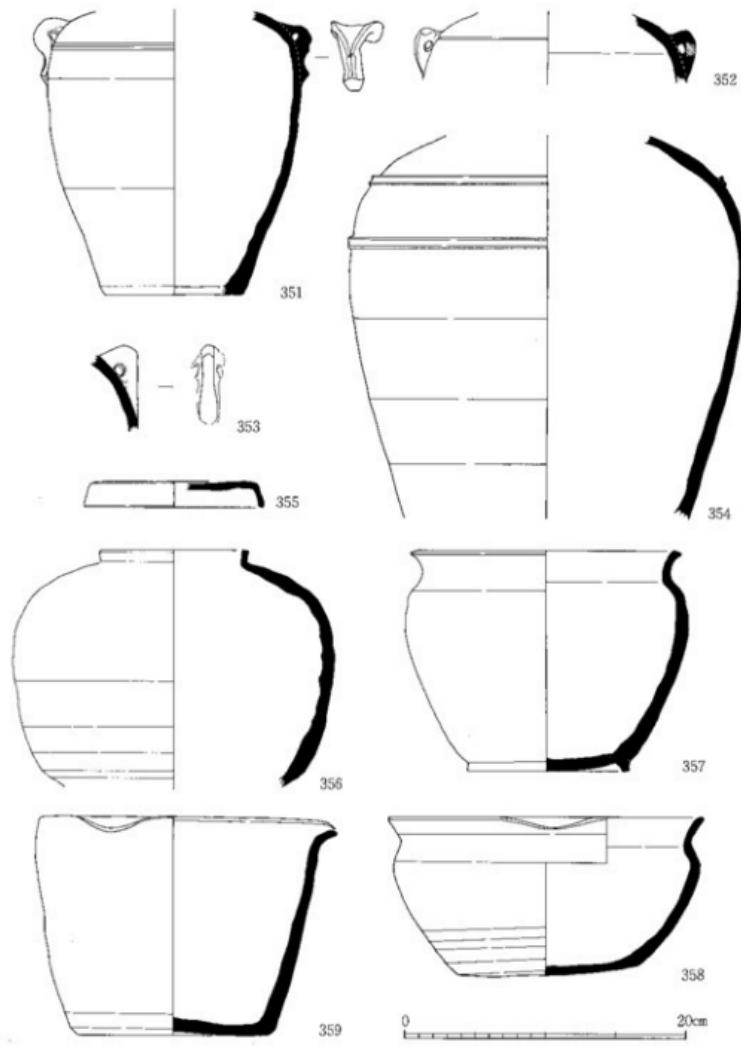
342~350は直口の壺である。肩部に稜を持ち、頸部はラッパ状に長く伸びて開く。頸部に沈線を施すものがあり(342・343)、底部にはほとんどのものに輪高台がつく。絆頸のもの(342・343・347・348)と太頸のもの(344~346・349~350)とに分けられる。



第28図 須恵器 壺(2)

345の体部径13cm、346の体部径17.2cm、347の体部径18cm、348の体部径19.4cm、349の体部径20.4cm。

351～354は相生窯址群に特徴的な双耳壺である。肩部に突蒂を持つものが多く、1条の351、2条の354のほか、沈線を持つ352がある。耳部は三角形になじ上げするもの(351)とヘラ切りによる偏平なもの(352・353)がある。いずれも直径数mmの棒を軸にして耳部を貼



第29図 須恵器 壺(3)・鉢

り付け、孔をあける。

356・355は短頸壺とその蓋である。壺は胴部径22.6cmで、上半部は丁寧なナデ仕上げ、下半部はヘラ削りで仕上げる。直立した短い口頸部は高さ0.8cmである。蓋は口径13cm、高さ1.9cm、全体にナデ仕上げする。

鉢(357~359)

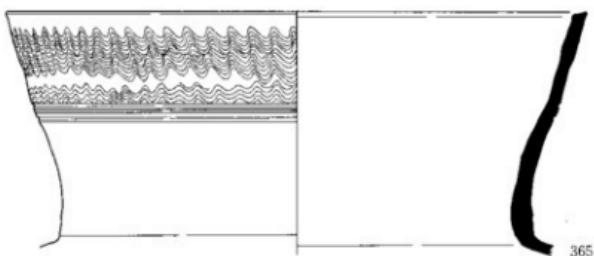
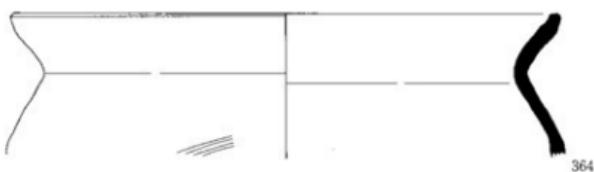
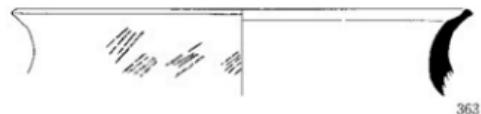
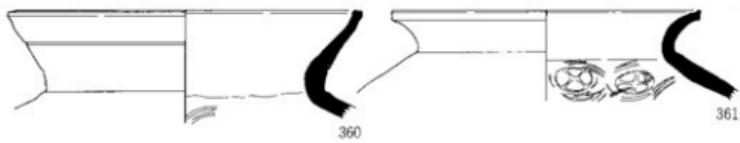
357頸部を絞り、それほど開かないタイプの鉢。底部に輪高台を付す。形態的には平城分類の壺Cに近いが、大きさが小さい。口径18.4cm、器高15.8cm。358・357の器高を縮めたような形態であるが、片口が付く。体部下半はロクロ削りし、平底である。口径22.3cm、器高11.5cm。359平底で体部は単純に立ち上がる。残存部では2箇所の注ぎ口を持つが、位置関係から判断すると3口である可能性が高い。底部と角部をロクロ削りするが、体部は内外面ともナデ仕上げる。

甕(360~366)

360口縁部はやや内湾しながら外傾する。口頸部中程に1条の沈線を施す。口径23.8cm。361短く外反する口縁端部に面を持つ。体部外面にはタタキ痕を残さないが、内面には同心円の中央に十字をいたれた、いわゆる車輪文タタキの当て具痕が残る。口径23.7cm。362頸部がしまり胴部が大きく膨らむタイプの甕である。口縁部外面はやや玉縁状に仕上げ、頸部以下はタタキのちカキ目で仕上げる。内面には同心円文を残す。口径22.6cm。363口縁部しか遺存しないため体部の形状は不明だが、頸部の屈曲が顕著でなく、口縁部近くまでタタキが入り、ナデ仕上げする。口縁部内面が強いナデにより窪む。口径31.8cm。364体部があまり張らず、くの字形に開く口縁部を有す。口径39cm。365口縁部が外方に直線的に延びる形態の甕である。口径部中程に2条の沈線を施し、上半部に3段にわたって波状文を施す。口径41cm。366胴部が張って、底部がやや間延びしたタイプの甕である。外反する口縁端部をやや上方に拡張する。体部外面には平行タタキを施すが、タタキ板に平行線に重ねてXを刻んでいるため、それが文様となって特徴的な外観を示す。内面はナデ仕上げる。口径21.8cm、胴部径35cm、推定器高40.6cm。

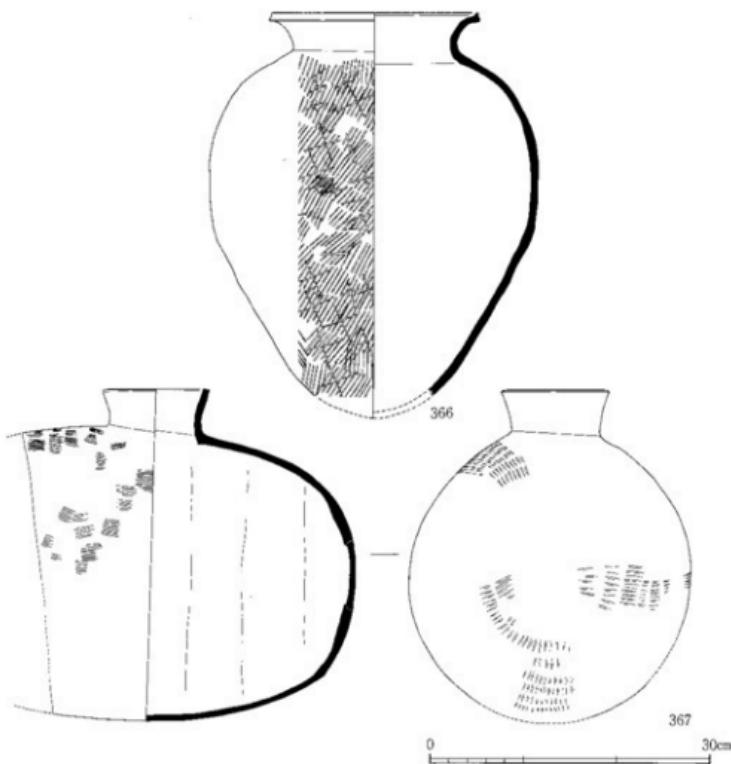
横瓶(367・369)

367は体部外面はタタキ整形のちナデにより仕上げる。内面には巻き上げ痕を残し、円板充填が明瞭である。口縁部は単純に開き、端部は平らにおさめる。口径10.2cm、器高35.5cm、胴部径29.9cm。369は横瓶の口縁部である。外方にやや反り気味で、端部は強いナデにより内側に突出させる。口径10.6cm。



0 20cm

第30図 須恵器 麦(1)



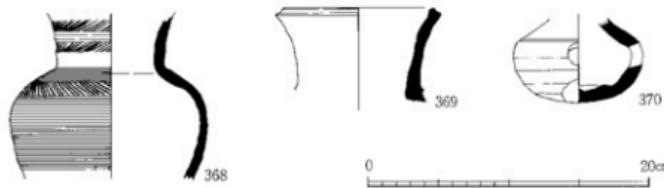
第31図 須恵器 瓢(2)・横瓶

壺(368)

やや肩部の張った広口壺である。口縁部及び底部を欠く。頭部には浅い2条の凹線状の沈線を施し、その上下に櫛状工具による右上がりの連続刺突文を付す。体部には全面にカキ目を施した後、肩部に左上がりの連続刺突文を付す。胴部の径14.2cm。

甌(370)

口頭部を欠くが、体部は径9.2cmと小さくなった段階のものである。体部下半はヘラ削りで仕上げ、肩部に1条の沈線を施す。

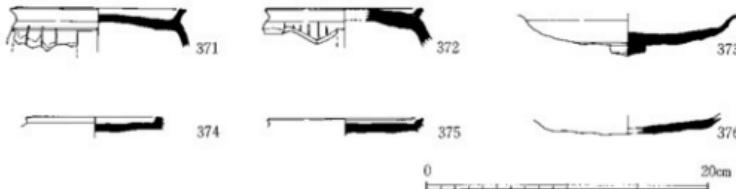


第32図 須恵器 壺・横瓶・趙

硯(371~376)

円面硯(371・372)と転用硯(373~376)とがある。

371は脚台部に長方形の透しを有し、透しの間に3条の線刻を施す。海部と陸部の境が明瞭でない。口径11.8cm。372も同じく長方形の透しを有するもので線刻は5条である。371よりも海部が明瞭である。口径11.2cm。373は杯B蓋の転用。屈曲部から先の口縁部のみをすべて打ち欠いて使用している。374・375は杯Bの転用。体部を打ち欠き、残った外面底部の高台内面を使用している。376は杯Aの転用。体部を全て欠き、底部のみを残して内面を使用。



第33図 須恵器 砚

土師器

出土した土師器は杯A・杯B・杯蓋・高台付椀・皿A・皿B・高杯・甕・鍋・製塙土器・その他である。年代的には須恵器と同じく奈良時代後半から平安時代前半のものを中心に出土している。土師器は須恵器に比べかなり少量で、土師器の実測点数は91点、そして破片数は987点であった。土師器は須恵器と違って軟質なため、道路状遺構(S F 0 1)より山側から出土したものは、乾燥した土に埋まっていたもので、残りが非常に悪い。復元できるものも少量で器表が荒れていたものが多い。また、上層からのマンガン質の影響によるためか色調も暗褐色を呈した物が多い。これと違って、道路状遺構(S F 0 1)より谷側から出土したものは湿地帯で残りが良く、器表の色も鮮やかに残っていた。

杯

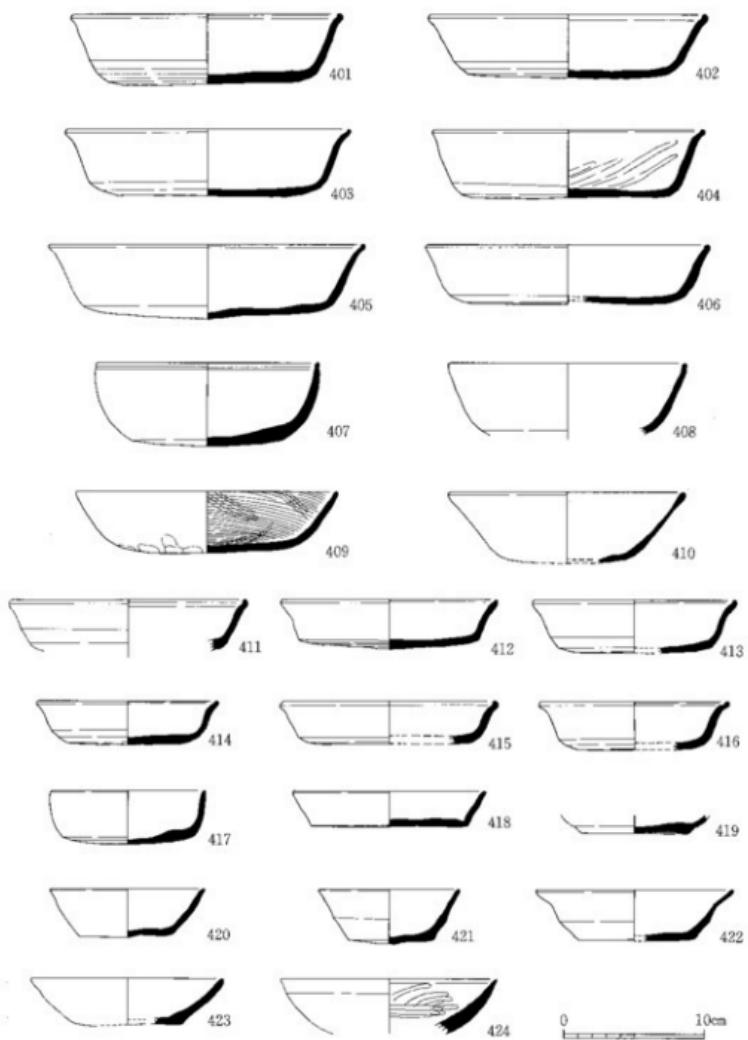
杯は、甕に次いで最も多く出土した器種である。全部で25点(401~424)を図化した。口径は10.0cm~22.4cm、器高は5.3cm~1.3cmとさまざまである。平城京出土遺物に見られるようなタイプのものから、平安時代に見られるタイプまでさまざま、出土遺物の中にはかなりの時期差があると考えられる。ほとんどが杯Aタイプで、高台を持つ杯Bタイプはわずか1点である。

杯A 401~408・411~419の遺物は、口径10.0cm~22.4cm、器高3.1cm~5.3cmである。調整は全体にナデを丁寧に行い、器表を平滑にし、器肉を均一に仕上げてある。口縁端部は特に丁寧にする意識が見られ、口縁端部の下で一度強く横ナデを施した後、端部のみをさらにもう一度横ナデしている。従って口縁直下で大きく外反したのち端部が、屈曲するか、沈線状のものが施されるか、或は端部が尖るなどして終わっている。口縁が外反しないものでも横ナデを施した痕跡は見られ、意識して調整していることがわかる。

内面も横ナデ調整を施すが、これに加えて404では粗く大雜把なものであるが磨きが施されていた。暗文は408で図示出来ない程度の痕跡が観察出来ただけでほとんど見られなかった。408でも、やはり、全体に横ナデを丁寧に行い、器表を平滑にしていた。外面についても同様である。

外面の底部は回転笠削りを施しているものが大半である。笠削りはものによっては401~404・411~414・416等のように胴部の下半に造して施されるものもある。そして、401のように何回も細かく削っているものも見られた。しかし、418のように未調整で終わるものも若干見られた。

これらの杯は、胎土は精良なもので砂粒はほとんど含んでいなかった。器表の色調は淡茶色から淡褐色で、器肉は黄白色である。焼成は良好である。



第34図 土師器 杯A

これらの杯は技法・形態では共通するが、口径から401～408と411～419の2つのグループに大きく分かれる。口径の大きなものは22.4cm～15.7cm、器高5.3cm～4.3cmである。口径の小さなものは14.6cm～13.1cm、器高3.8cm～2.5cmである。

全体的に、口縁直下の屈曲が杯小では胴部のかなり下から始まるのに対して、杯大では胴部の上半より下からは始まっている。そして、口縁端部の横撫でも細かい沈線になるものは少なく、屈曲して蓋受け状になって終わるものが多いようである。

さらに、これらのグループの中で、407・408・417・418は若干他のものとプロポーションや細かい所で異なっている。407は全体に器肉が厚手で、底部と胴部の境が明瞭なものである。そして、胴部が内湾しながら立ち上がるるものである。408は逆に薄手のものでやはり胴部が内湾しながら立ち上がるもので、やや器高が高いタイプのものである。

417はプロポーションや、口縁端部が円くすんなり終わること、内面底部に強い横撫で痕跡を残すなど、須恵器の杯Aを模倣したようなタイプのものである。

418は外面底部を未調整で終わり、底部と体部の境が明瞭で、口縁端部の横撫でも他のものに比べ簡単であった。

409は、内面に粗いハケ目が観察できた。口径18.6cm、器高4.35cmである。やや厚手のタイプで、口縁端部をやや内側に曲げるものである。外面底部は未調整で、指頭痕を残す。外面は口縁直下を軽く横撫するだけである。胎土にやや砂粒を含み、色調は淡灰色である。焼成は良好である。

410・419・422・423は口径と器高の割に底径が小さく、椀に近いプロポーションを持つものである。口径18.6cm～10.8cm、器高は410で5.1cmである。内外面とも横撫で調整で仕上げているが、簡単なもので、422では撫での痕跡が胴部中程に屈曲となって残るものである。口縁端部も丸く終わらせるものである。底部の調整を観察出来るものは少なかったが、範切り未調整ないし底部と胴部の境に軽い横撫でを施していた。胎土は精良だが少し砂粒を含んでいた。焼成はやや甘いものも見られた。

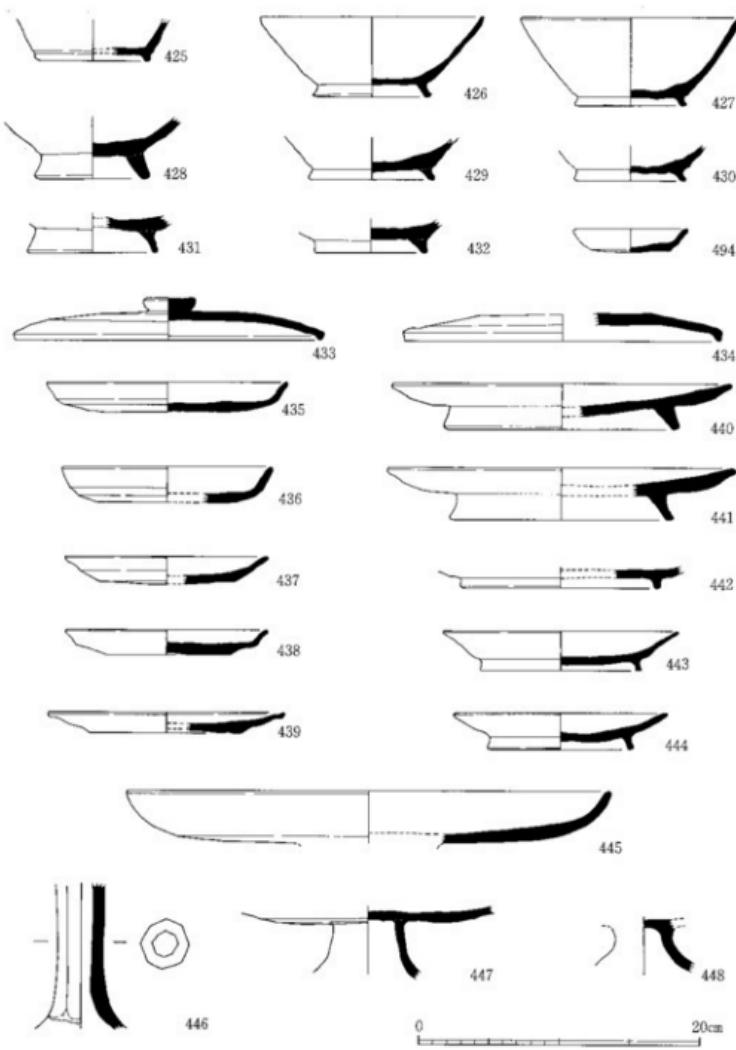
420・421は口径18.6cm～10.8cm、器高3.5cmと口径の小さいもので、底部から斜めに立ち上がるタイプのものである。底部は未調整である。

424は口径15.6cmである。厚手のもので口縁部は尖らせて終わる。内面は全体に範磨きを施している。

この他、杯Aでは井戸出土の21がある。

杯B 425の1点のみである。高台の復元口径8.2cmと小さいものである。内外面とも横撫で調整が施されている。

杯には以上のように、401～408・411～419のタイプと、410・419・422・423とがある。前者は平城京、あるいは9世紀初頭までの遺跡に多く出土するものである。後者は椀に近いア



第35図 土器器 杯B・椀・蓋・皿・高杯

ロポーションを持っておりこれより下る時期の遺物であろうと考えられる。

高台付椀

426~432、の7点を図化した。器壁が薄手で高台はハの字に踏ん張るが丁寧に作られている、426・427・429・430・432のものと、高台が大型で底部径が8.0cm~9.1cmと小さいもの428・431の2種類がある。調整は横撫で調整のみである。底部内面や外面の底部などに横撫での凹凸を残している。口縁端部は丸く終わる。高台周辺は丁寧に横撫でを施す。

蓋

433・434の2個体を図化した。口径21.8cm~22.4cm、器高3.1cmの大型のものである。平たいつまみの付くものである。外面はつまみを中心に丁寧に削り調整し、周辺を横撫で仕上げている。内面も全体に横撫で仕上げしている。この蓋の身になる大きさの口径の器種は土師器には出土しておらず何の蓋になるかは不明である。

皿

高台の付かない皿Aタイプの5個体(435~439)と、高台の付く皿Bタイプの5個体(440~444)を図化した。

皿Aは、口径14.7cm~16.7cm、器高3.7cm~3.5cmである。底部から短く胴部が立ち上がり丸く口縁端部を終わるもの(435・436)と、底部から斜めに胴部が立ち上がるもの(437~439)がある。後者は横撫での境が凹凸となって残り、胴部中位に強い屈曲が見られるものがある。437~439は調整方法が簡単で、杯の410・419・422・423のグループに近くやはり時期が新しくなると考えられる。

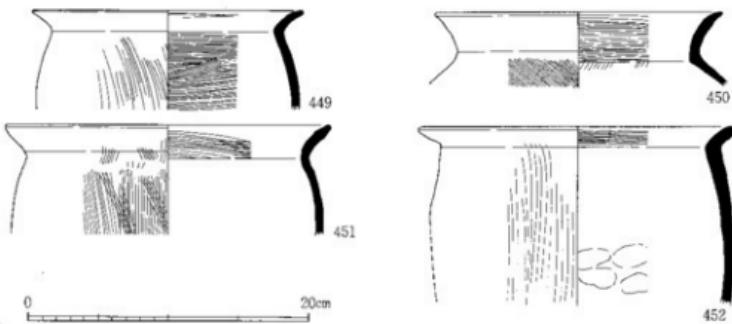
皿Bは、440~444の5個体を図化した。440・441は口径14.7cm~16.7cm、器高3.7cm~3.5cmである。やや厚手のもので高台も大きく外方に踏ん張るタイプである。胎土は精良だが、色調は灰色を呈している。

442・443・444は器壁も薄く高台が小型のものである。口径14.7cm~16.7cm、器高3.7cm~3.5cmである。横撫で調整が施されるが、442以外は撫でによる凹凸が見られる。

443・444は時期の新しいものであると考えられる。

高杯

445~448の4個体がある。445は口径34.0cm、器高3.7cmの大型のものである。口縁部は丸く終わり器表は整えられている。446は脚部片である。中空で8面の面取りを行っている。直径3.5cm、残存高10.8cmを測る。447は低い器高のものである。器肉は薄く杯部と脚部の取付け部周辺は丁寧に横ナデする。448も脚部である。撫で調整による凹凸は観察されず何れも丁寧に器面を整えている。胎土は精良なもので砂粒等は含まない。色調は淡褐色を呈する。



第36図 土師器 壺(1)

壺

壺は土師器の中で最も多く出土した器種である。國化したものは27個体である。全体的には、小型品は球形を呈するものが多く、大型品は長胴になるタイプが多い傾向があるようである。しかし、底部まで國化出来たのはわずか2点であり、ほとんどが細片のためプロポーションの詳細は不明な部分が多い。壺の調整は、458に内外面を叩いた痕跡が見られ注目される。内面にあて具痕跡を残すもので、叩き成形を行った後、内外面を刷毛目調整していた。大半の壺は叩いて全体の形を作り出した後、刷毛目などの調整を行い痕跡が消されているのである。壺全体の調整は刷毛目調整と撫でを中心として行われている。そして、口縁部付近について横撫で仕上げするものが多い。外面胴部より下は、縱方向の刷毛目を行う。底部付近になると不定方向に施している。内面についても主として刷毛目で仕上げ、横撫で、或いは板撫で仕上げのもの、或いはこれを併用しているものが見られた。

また、今回出土の遺物の特徴は、刷毛目を部分的にしか行わないものが含まれること。刷毛目は少し細かいものも見られたが、粗いものが主流である。口縁端部は全体に丁寧に整えようとする意識が見られたが、小型のものについては丸くしたまま終えていること。そして、小型のものは大型のものより若干簡単な成形・調整を行っている事などがあげられる。

壺と他の煮炊具との比較を行ってみると、壺は杯などと異なり器面を平滑にする意識はなく、刷毛目も粗いものと、やや細かいものなどさまざまである。胎土は良質であるが、細かな砂粒を含んでいる。色調は全体は暗黄土色ないし灰褐色の色調を呈するものが多い。焼成は良好なものが多いが、中にはかなり焼きの良いものも含まれる。そして出土した壺には外間に炭の付着するものが多く煮炊に使用されていたことを伺わせる。

壺の大きさは口径30.8cm~14.4cmまで様々なものがある。法量から壺は大・中・小の3つに別れる。大は口径25cm以上のもの、中は口径20cm~25cmのもの、小は20cmのものである。



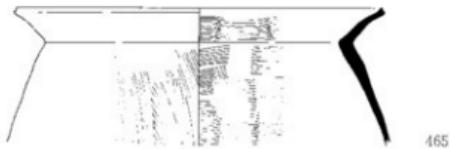
第37図 土師器 塗(2)



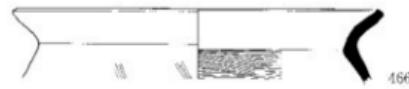
463



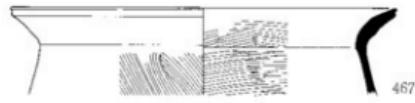
464



465



466



467



468

0 20cm

第38図 土器(3)

口縁部の形状から甕をいくつかに分類することができる。口縁部を丸く納めるものをA類。口縁部外面に端面を持つ意識のあるものをB類。口縁端部外面を横方向に引っ張る意識のあるものをC類。口縁端部を上方につまむタイプのものをD類とした。

A類 口縁部を丸く納めるもので、449～458の10個体がある。449～452は外面には縱方向の刷毛目を入れる。内面は主として横方向の刷毛目と横撫で仕上げをしている。口縁は頸部を絞った後「ハ」の字状に広がるものから短く外反して終わるものまで様々である。しかし頸部をやや絞りぎみにして撫肩になる器形が多いことから、長胴になる個体は少ない。

453～458は小型の甕である。458は内面にあて具痕跡を残し、須恵器甕のように叩きを行った後、刷毛目で仕上げていることが観察された。しかし、刷毛目調整を省略している個体も見られ全体に簡単な仕上げとなっている。

B類 459～468の10点である。口縁端部外面に端面を持つ意識のあるものである。外面は縱方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目で仕上げている。口径は26.2cm～30.0cmで大型の甕が多い。全体のプロポーションから、胴部的最大径が器高の中程にくる459～462は長胴になるものである。頸部が絞られ最大径が肩のやや下にくる463～468は長胴にならないものであろう。大型の甕も含まれており、内外面の刷毛目調整を省略するものは少ない。

C類 469～473の4点を図示した。口縁端部外面を横方向に引っ張る意識のあるものである。口径22.8～30.0cmで、大型の甕も含まれる。内外面の刷毛目調整を省略するものは少ない。長胴になるものが多いようである。

D類 474～477の4点を図示した。口縁端部を上方につまむタイプのものである。477の口径22.2cmである。中型で長胴になり、頸部と胴部の境が「く」の字に明瞭に曲げるものが多い。内面は刷毛目を省略したものが多く、474では口縁部周辺に横方向の刷毛目を施している痕跡が窺えた。

甕小はすべてA類に含まれる。Bはすべて甕大である。C・D類は甕中が多く甕大も含まれる。前述した様にB類は全体のプロポーションが明らかなものは少ないが、長胴のものが含まれるようである。D類についても長胴が多いようである。C類は肩の張り具合から長胴にならないものが多いようである。さらにC類は全体に器壁が薄く、刷毛目も細かいものが多い。全体的に丁寧な作りである。

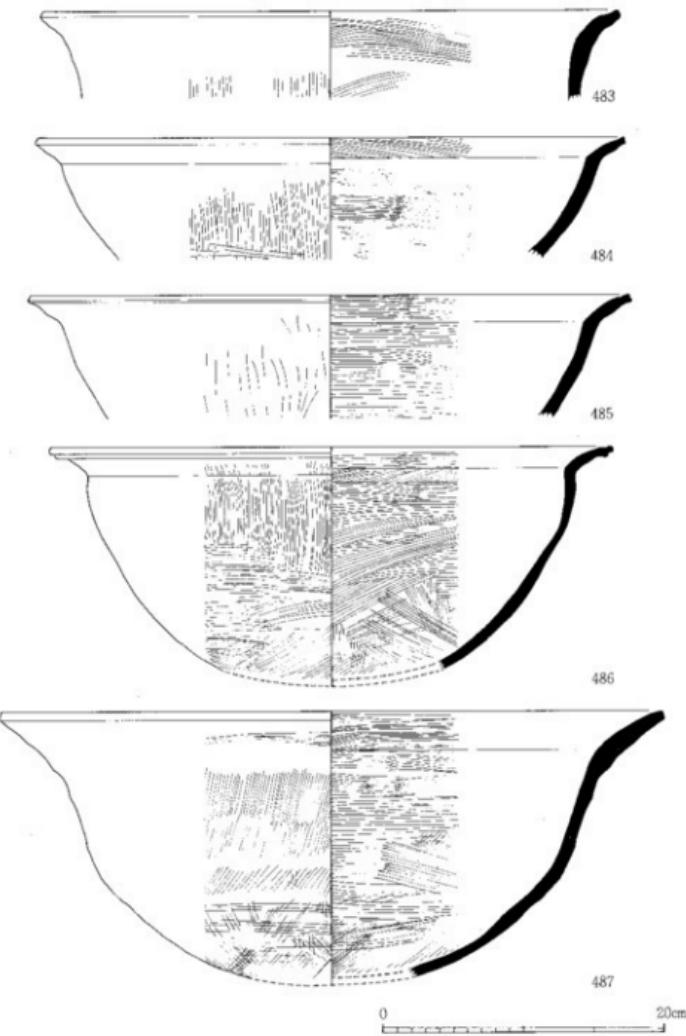
鉢・把手

480は口径24.4cm、器高10.7cmの鉢である。全体に器肉は均一に仕上げられ、器表は部分的に磨きが観察できた。底部と胴部の境は明瞭で口縁部を大きく内湾さすものである。色調は暗黄灰色で、焼成は良好である。胎土はやや砂粒を含み、底部は平で未調整である。須恵器に見られる鉄鉢を模倣したものであろうか。

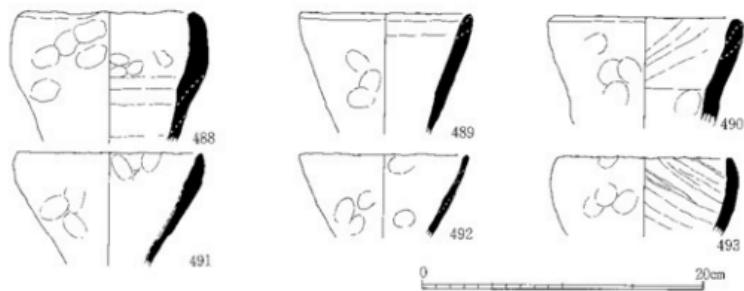
479は口径18.2cmである。厚手のもので外面を刷毛目調整し、内面をナデ仕上げしている。



第39図 土師器 豊(4)・鉢



第40図 土篩器 繖



第41図 製塩土器

胴部の下端は横方向の刷毛目、上半は縦方向の刷毛目を施す。底部の形状は不明であるが、胴部は湾曲しながら内湾するもので口縁部上端に面を持つが内側に傾いている。調整技法、胎土や色調は甕に似ている。481・482は把手である。481は取りつけ後周囲を刷毛目で仕上げている。482は差し込み式の突起を持っている。甕などに取りつくもので左右一対が1個体に取りつけられる。478は口径10.5cmである。外面を縦方向の粗い刷毛目、内面を横方向の粗い刷毛目で調整するものである。厚手の作りで、色調は暗褐色である。口縁部の上端に面を持っています。用途については不明である。

鍋

鍋は6個体を図化した。483～487の5個体である。口径46.8cm～39.6cm、器高18.8cm～15.7cmである。全体に器肉は厚く、刷毛目も粗い調整を施すものが多い。外面は頭部より下半が縦方向の刷毛目を施し、底部より胴部の $\frac{1}{4}$ より下で不定方向の刷毛目を施している。器表全体に隠なく刷毛目を施すものばかりでは無く、部分的なもの、あるいはほとんど痕跡程度にしか見られないものなど様々である。また、内面には主として横方向の刷毛目を全体に施す。そして、底部付近では外面同様に、不定方向の刷毛目を施している。器形は体部から外方に開き、口縁部でさらに外反するタイプのものである。口縁部と頭部の境は「く」の字に曲げるタイプのものと、486のように少し頭部を絞るタイプのものがある。逆に483は胴部と口縁部の境がはっきりしないもので、口縁部は短くすんなりと終わるものである。口縁端部は外方向に端面を持ち、横撫で仕上げているものが多いようである。

製塩土器

製塩土器は、6個体を図化した。すべてが破片で底部は尖り底か丸底になるものである。口縁径は総て復元であるが、13.1cm～12.0cmで粗い手づくね仕上げのものである。器高は破片のため不明である。

488～492の5個体は腹部が斜めに立ち上がりラッパ状に開くものである。488はやや口縁部を内側に曲げるものである。器肉は488～490の3個体は厚手の作りだが、491・492の2個体は薄手の作りである。

493は底部が丸底で終わり口縁をすこし内湾させるものである。全体に丸いプロポーションである。

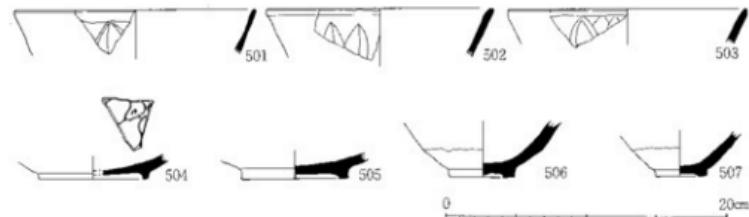
以上、見てきたように土師器は少量ではあるが多くの器種を出土しており注目される。しかし、出土遺物の中にはかなりの時期差があると見られ形体・技法共に同一器種の中で相違が見られた。杯では平城京の後半の遺物群と9世紀代の2つのグループが見られた。同様に皿にも2つのグループが存在するようである。高杯は9世紀の前半に無くなるためか古いタイプの調整のもの以外は出土しなかった。また、この他に高台付の椀は10世紀前後に登場するもので、さらに時期差のあるものである。その他の甕や鍋については変化に乏しく時期差を明確にすることは出来なかった。しかし、食膳具で8世紀の後半～10世紀前後の年代が考えられるためこの時期幅と同じ時期差が甕や鍋などについてもあると考えられる。

これらの土師器を用途別に分けるならば、食膳具（杯A・杯B・碗・蓋・高杯・皿A・皿B・鉢）と煮炊具（甕・鍋）があるが、貯蔵具は須恵器で賄ったようである。

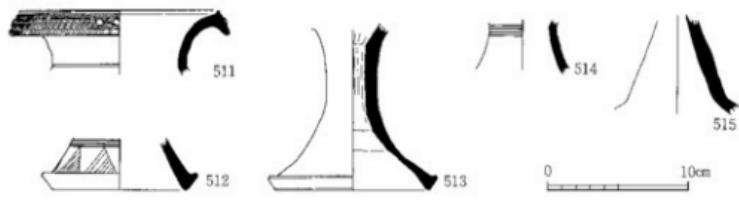
食膳具と煮炊具では見てきたように、明らかに胎土や調整方法が異なっていた。食膳具は横撫で調整を中心に器面を丁寧に整え、胎土も精良で砂粒を殆ど含まないのに対して、煮炊具では、器肉も厚く、胎土に砂粒を含むものも見られた。調整は刷毛目を基本に器面を調整するが、凹凸が残り、大雑把な調整である。

陶磁器

綠釉が2点出土している。いずれも底部の破片で高台径7.5cm～7.7cmである。504は半透の釉で浅い緑色を呈する。高台外面底部以外には釉がかかる。505は緑色の釉がかかるもので器



第42図 陶磁器



第43図 弥生土器・土師器

肉は暗灰色を呈する。

中世の遺物

この他、今回の調査では中世の遺物も何点か出土している。中国製の青磁碗・天目碗を図示した。この他、細辺ではあるが備前焼の擂鉢片・土師器皿などが出でている。いずれも耕作土からの出土であった。調査地域にはこの時期の遺構は検出されていない。

501～503は外面に錦運弁文を持つ碗である。何れも口縁部の破片である。口径は16.9cm～16.0cmである。

506と507は天目碗である。底部片で高台径は4.5cmと3.7cmである。施釉は内外面とも施すが外面の底部までは届かず胴部の下半までである。高台は台形に削り出されている。506の外面底部はトキン状の突起を残す。

時期は青磁碗が13世紀頃から日本の各地の遺跡で出土し始めるものである。天目碗は瀬戸・美濃産と思われるが一般的には16世紀頃から登場するものである。

494は小皿で、口径8.2cm、器高1.7cmである。底部は糸切りで、横撫で調整で仕上げている。

弥生土器・土師器

壺(511)広口壺の口縁部。上下に拡張した口縁端面に4条の凹線を施した後、キザミ目を入れ4方におそらくは1対の円形浮文を配する。頸部には凹線文の一部が遺存している。高杯(512～515)すべて脚部のみ残存。512は当地方特有のヘラ書きの鋸歯文を施すもの。連続する山形の内部を斜線で埋め、上方に同様の沈線を4条以上施している。513は形的には512と大差ないが、無文である。内面には絞り痕が明瞭に残る。いずれも器面が荒れて調整はよくわからない。513は古墳時代後期の高杯の脚柱部である。ややふくらみをもった円錐形状の脚部から端部は外方へ広がるタイプである。

511～514の年代は弥生時代中期後半、515は古墳時代後期である。

2. 墨書き土器

小犬丸遺跡では、総計40点の墨書き土器が出土している。内訳は須恵器37点、土師器3点と須恵器が大半を占める。また、器種別にみれば杯類が最も多く、杯A18点、杯B10点、蓋5点と圧倒的多数を占め、多くの例がそうであるように、食膳具に限られている。また、墨書き土器総数40点の出土土器総数に占める割合は4.0%、墨書きの認められる機種（杯A・杯B・蓋・皿・楕）の中に占める割合は8.9%と著しく高いものとなっている。なお、ここに図示できたものは37点である。

173 「驛」須恵器杯Bの底部に墨書きされたもの。完形ではないが、墨書きの位置から驛の一字のみと考えられる。

401 「布勢井邊家」土師器杯の底部に墨書きされたもの。肉眼ではやや不明瞭だが、赤外線テレビ・赤外写真により確認できる。「布勢」は驛家名を示すとともに、後世に成立すると考えられる布勢郷名として注目できる。

215 「布勢×」須恵器杯B底部。底部は完存しないが、他例から考えて布勢…と続くことはまちがいなかろう。

159 「布世井マ」須恵器杯A底部。本来「布勢」であるところを「布世」と表記する。「べ」についても「部」の略字の「マ」となっている。

136 「井口家 个」須恵器杯A底部。□は他の例から「いんべ」の「べ」をあてることが最も適当だが、文字は判読できない。他例の多い「个」形記号を併記する。

165 「井マ□」須恵器杯A底部。「井マ」に続く□は家の字をあてることも可能である。

113 「井」須恵器杯A底部。中央からそれで「井」の一字を墨書きしている。

266 「井尻」須恵器碗底部。他の墨書きと比べて土器形式が最も新しい。

237・258・132・276・196・181・115「个」 237・258・276は須恵器杯蓋に墨書きされたものである。いずれもつまみに接して中央に向かう矢印状に小さく表記されているのが特徴である。237・258は杯B蓋、276は稜楕の蓋であろう。

132・115は須恵器杯Aの底部に、196・181は杯Bの底部にそれぞれ墨書きされたものである。蓋に墨書きされたものに比べると、底部のものはかなり大きく書かれる傾向が認められる。

この他、176・377の須恵器杯B底部や378の杯A体部外面のものは、破片ながら「个」の墨書きであるものと思われる。

118 「符牒」須恵器杯A体部外面。

160 「乃」墨書きではなくヘラ書きだが、ここで扱っておく。須恵器杯Aの内面底部に焼成前に刻まれたもの。

- 109 「十」須恵器杯A底部。出土した墨書き器の中では唯一古く、7世紀に遡るものである。同様の時期墨書きに姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡の出土例がある。
- 233 「=」須恵器杯蓋つまみ部。数字の二よりはむしろ記号であろう。
- 379 「大宅」須恵器杯A底部。やや不確かだが「大宅」と判読できる。小丸遺跡と同じ旧揖保郡内の小宅里・郷（のちに小庄）を示す「おやけ」であろうか。
- 178 「(宅)カ」須恵器杯B底部。
- 310 「宅」土師器皿底部。
- 203 「三宅」須恵器杯B体部外面。
- 380 「一」須恵器杯B底部。
- 232 「二」須恵器杯A底部。
- 278 「二」須恵器蓋外面。
- 381 「二」須恵器杯A底部。
- 382 「一(家)カ」須恵器杯A底部。
- 383 「二(三)カ」須恵器杯A底部。
- 384 「二」
- 306 「二」記号か。須恵器
- 268 「竹万」須恵器楕底部。266とともに最も新しい墨書き器である。小丸東南方に現在も残る竹万（ちくま）の地名であろう。
- 17 「律合」須恵器杯A底部。井戸から出土したもので、祭祀に使用したものらしく、律令の2文字をやや組み替えて祝句としているものである。
- 218 「豊奈賀」須恵器杯B底部。形態状からはすでに演化した段階の杯Bに書かれたものである。「とよなが」と読むのであろうか。文字のタッチは祝句を思わせるものである。

3. 瓦

出土した瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦および磚である。すべて包含層中に破棄されたような状態で出土しており、完形のものはない。ここでの瓦の名称・分類については『小犬丸遺跡I』に準ずる。

軒丸瓦

2点出土した。

601は玉縁部を欠失するが、範面はほぼ完存している。単弁十三葉蓮華文軒丸瓦で、中房の蓮子は一部を欠くが、1+5と判断できる。これは、いわゆる「古大内式」の1+6に比べて1粒少ないものであり、いわゆる古大内式の垂式といえる。瓦頭部の直径16cm。胎土はきめが粗く、砂粒を多く含んでいて、灰褐色を呈する。

602は細片だが、601と同様の形式である。裏面は丸瓦部が剥離しており、接合のための半円状の溝が露出している。胎土は比較的きめが細かく、乳白色を呈する。

軒平瓦

瓦当面を残すものは3点出土した。すべて均正唐草文軒平瓦であり、いわゆる古大内式に分類できるものである。

603はやや下顎部が不明瞭で、珠文が欠けているためかわからないが、604の下外区・605の右内区ともに今里氏の指摘する范例は認められない。

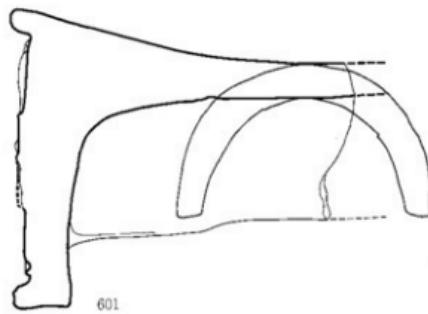
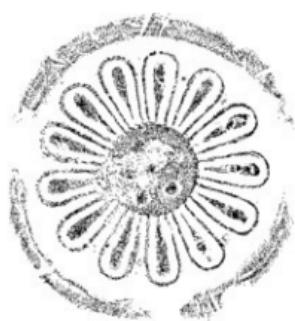
604は唐草文部が意図的に打ち欠かれたように失われている。

平瓦

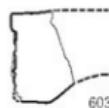
平瓦は破片がほとんどで、全体の大きさ・形状を知ることのできるものは少ない。成形技法は凸型台による1枚作りによっており、凸面に叩き目を残し、凹面には整形台との間に挟んだ布目を残している。ここではこの叩き目を基準に分類する。分類基準は『小犬丸遺跡I』によるものである。

A：刻線による叩き目

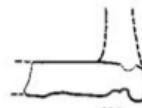
- I …叩き板の長辺・短辺にそれぞれ平行に線刻するもの。格子目は正格子になる。
- II …線刻が叩き板の長辺・短辺に対してそれぞれ斜行し、斜格子に交わる。
- III …叩き板の長辺に平行する線刻と斜行する線刻によって斜格子をつくるもの。
- IV …斜行する線刻がIIIとは逆方向に傾斜するもの。
- V …叩き板の長辺に平行する線刻と、斜行して交わる線刻を組み合わせたもの。
- VI …叩き目が明瞭でないもの。



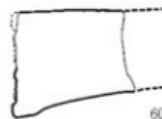
601



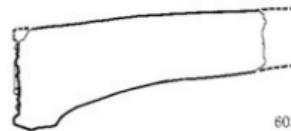
603



602



604



605

0

20cm

第44図 軒丸瓦・軒平瓦

B：繩叩き目

- a … 3 cmに16条以上の繩目があるもの。
- b … 3 cmに11～15条の繩目があるもの。
- c … 3 cmに繩目が10条以下のもの。

606はA Vによるもので、狭端部幅22.8cm、広端部幅25cm、長さ37.1cm、厚さ1.9cm。607はA IIIによるもので、狭端部幅22.9cm、広端部幅24.9cm、長さ34.9cm、厚さ1.9cm。608はA IIによるもので、狭端部幅25.7cm、広端部幅27.8cm、長さ34cm、厚さ2.1cm。609はA Vによるもので、狭端部幅23.5cm、広端部幅24.9cm、長さ37cm、厚さ2cm。

丸瓦

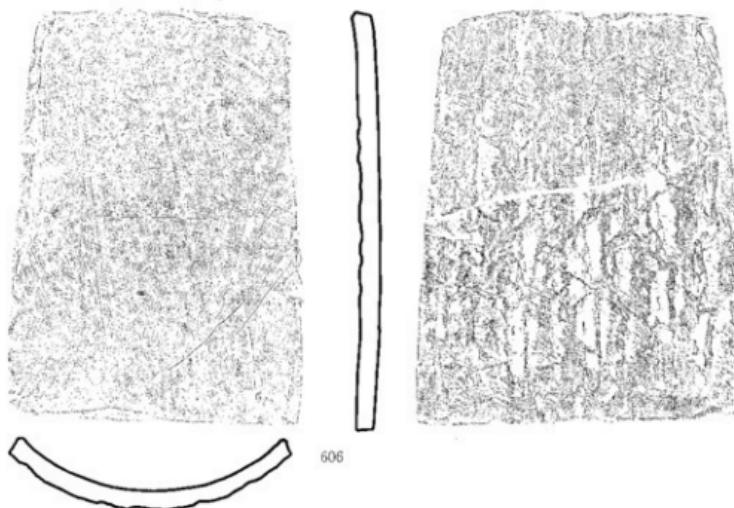
全容の知れるものは1点もないが、形態・手法上の特徴からは特に分類はできなかった。丸瓦はすべて玉縁を持つタイプのもので、直径10cm程の円筒型の筒に布を巻き、その上から粘土板を巻き付け、上部にはみ出した部分を紋り込み、玉縁部の段を外から貼りつけて整形している。ここでは玉縁部のよくわかるものを4点だけ図示している。(610～613)

すべて内面の布目と紋り痕が明瞭である。瓦の側縁部の内側角を面取りしていることが610・613の例でよくわかる。

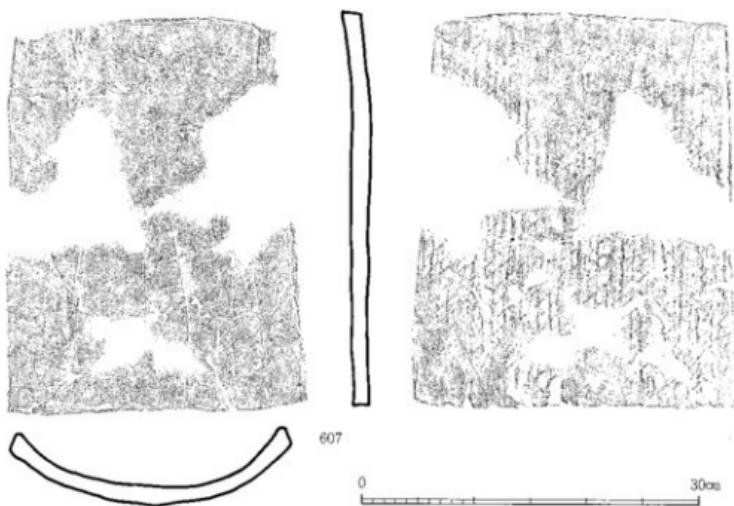
これらの瓦のうち、平瓦と丸瓦に煤のついたものが多数みられるほか、2次焼成されたものがある。建物の火災に伴うものとも考えたが、煤の付着面が平瓦・丸瓦とともに凹面に限られるところから、瓦をかまどなどに転用したものと考えられる。

塊 (614・615)

須恵質の塊である、砂を多く含み、比較的もろい。破片のため全体の形状は不明だが、おそらく正方形の板状を呈するものだろう。角部は円みを持ち、厚さは均質ではなく、614の場合最大7.0cm～最小7.0cmと厚手で粗雑な作りである。



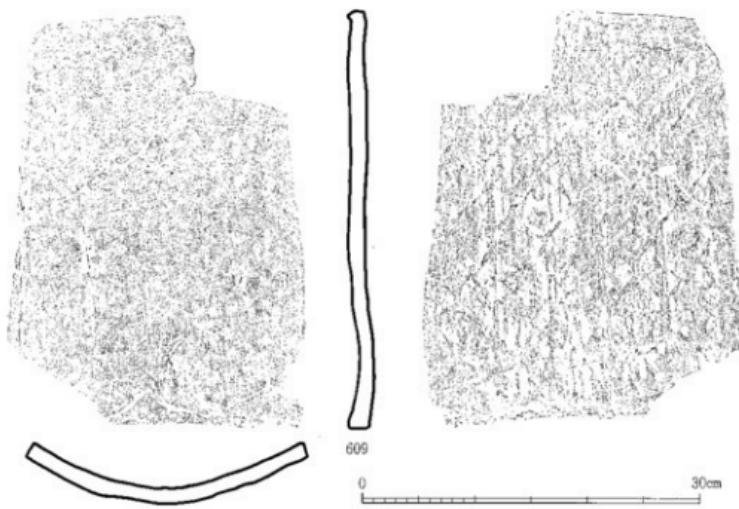
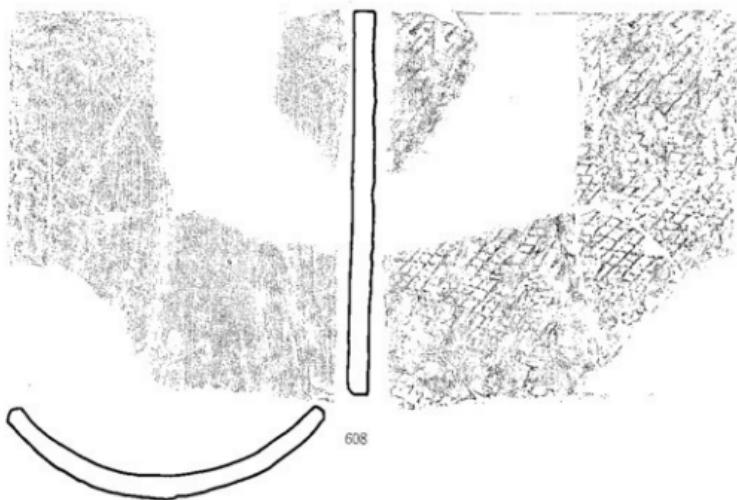
606



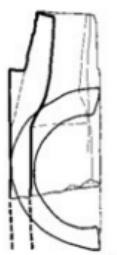
607

0 30cm

第45図 平瓦(1)



第46図 平瓦(2)



610



611



612



613



第47図 丸瓦

4. 木簡

小犬丸遺跡では3点の木簡が出土した。すべて折損しており形状は明らかではない。

1号木簡（集石遺構出土）

「布勢驛戸主□部乙公戸參拾人 中大女十□ 紿穀陸×
口口女口口」
(229)×(18)×4mm 081

2号木簡（井戸1周辺包含層出土）

(羽在)カ (為五)カ(正)カ (羽在堅)カ (為)カ (正)カ
「□□□□□□□百口 □□□□ □□五石□
(万カ(池)カ (為)カ (正)カ
□□□□□□□五百□」
(244)×(35)×5mm 081

3号木簡（井戸1周辺包含層出土）

(在)カ
「右□」
(224)×(17)×4mm 081

1号木簡 延喜式を除くと唯一の布勢驛家に関する文字資料である。勿論出土資料としても初めてのものである。布勢驛家の戸主である□部の乙の戸の三十人（うちわけ）に対して、穀物六□（斗・石などの単位）を給ったという内容である。「三十人」と人数を示すような書式の木簡はこれまでに出土例がないそうだが、年代的には奈良時代のものと考えられる。樹種未同定。

2号木簡 おそらくは人名とそれに続く何かの割り当てが列記されていたようである。左右及び下方を折損するため全体の形狀が不明で、どのていどの人数が列記されているのかはまったく判らない。ヒノキ。

3号木簡 「右」 のみしか判読できない。ヒノキ。



3号



2号



1号

第48区 木簡

5. 木製品

土器類と同様に、湿地に堆積する遺物包含層から出土しているものである。器種は農具・紡織具・服飾具・容器・食事具・祭祀具や用途不明品にいたるまで多岐にわたっている。遺構に伴うものはないが、井戸1の周辺にまとまって出土する傾向が強く、とくに齋串・馬形をはじめとする祭祀具や、焼けた木片が多数出土しており、井戸周辺での祭祀に使用されたものである可能性が高い。以下器種ごとに述べるが、形式を示したものはすべて奈良国立文化財研究所編『木器集成図録近畿古代編』によっている。

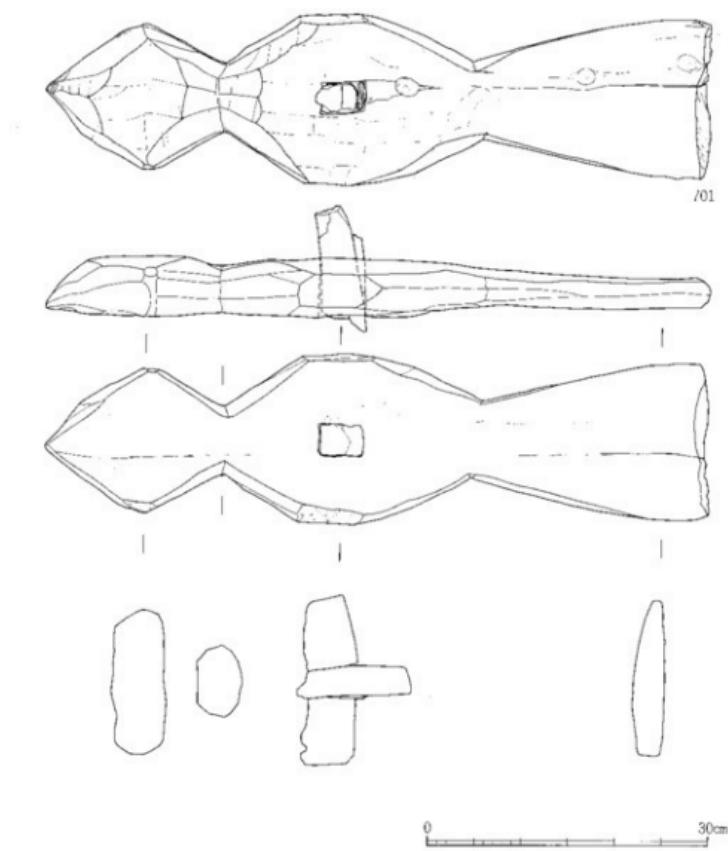
鳥形木製品

701は全長71.1cm、最大幅18.1cmと巨大な鳥形木製品である。最大厚5.8cmのコウヤマキの板材を木の中心部近くで板目に木取りし、芯側を裏面に、外側を表面にして使用している。頭・胴・尾の三部分を意識した形態で、それぞれの部位の境を側面から大きく抉り形象化している。裏面は荒削りしたまま未加工だが、表面は縱方向に手斧痕を残し、丁寧な加工を施すが尾部には達しない。表・裏面と側面との稜部は面取りして角をなさない。胴部のほぼ中心には4.7cm×3.2cmの大きさで孔を穿ち、裏面側から断面四角形で先端部をやや細くした棒が差し込まれ、表面に6cm突き抜けたところで止まっている。さらに軸のぐらつきを防ぐために尾側と右半身側の両側からクサビが打ち込まれている。軸・クサビともにコウヤマキである。

馬形（702～711）

総数10点が出土している。完形のものは少ないが、型式の判明する6点はすべてはっきりと鞍を作り出すB II型式のものである。

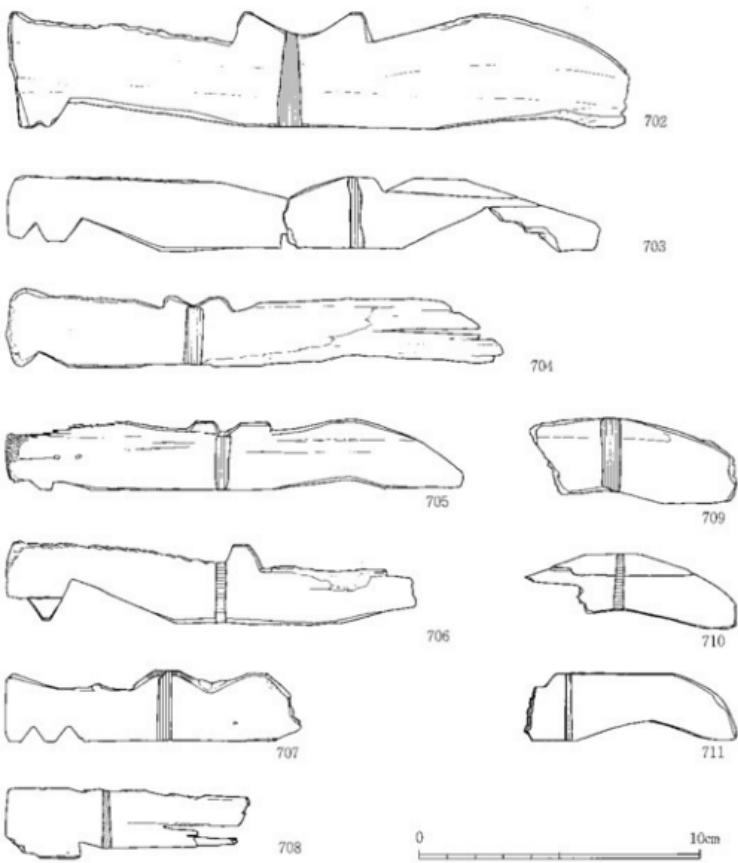
702 切欠きにより、頭部・胴部・尾部・鞍部を分ける。頭部では口・耳を作っているようである。頭部から鞍部にかけては細かな波形に削りたてがみを表現しているようである。長22cm、幅4.1cm、厚さ0.8cm。703切欠きが大きく、特に口が目立つ。たてがみを表現している。長21.1cm、幅2.5cm、厚さ0.45cmとかなり細長い。704切欠きが小さく各部分がこじんまりしている。たてがみを表現する。長17.6cm、幅28.5cm、厚さ0.7cm。705頭部に一对の小孔を有す。長16.2cm、幅2.45cm、厚さ0.3cm。706尾部を欠くが、切欠きが大きくダイナミックである。たてがみを表現する。残存長14.6cm、幅2.8cm、厚さ0.3cm。707尾部を欠く。全体に切欠きが小さいが、鞍部のみ大きく表現する。残存長10.5cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm。708頭部のみ。頭部を四角く表現する。たてがみを有す。残存長8.6cm、幅2.5cm、厚さ0.2。709尾部。残存長7.4cm、幅3cm、厚さ0.7cm。710尾部。残存長7.5cm、幅2cm、厚さ0.4cm。711尾部。残存長7.6cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。馬形はすべてヒノキ製である。



第49図 鳥形木製品

斎串 (712~721)

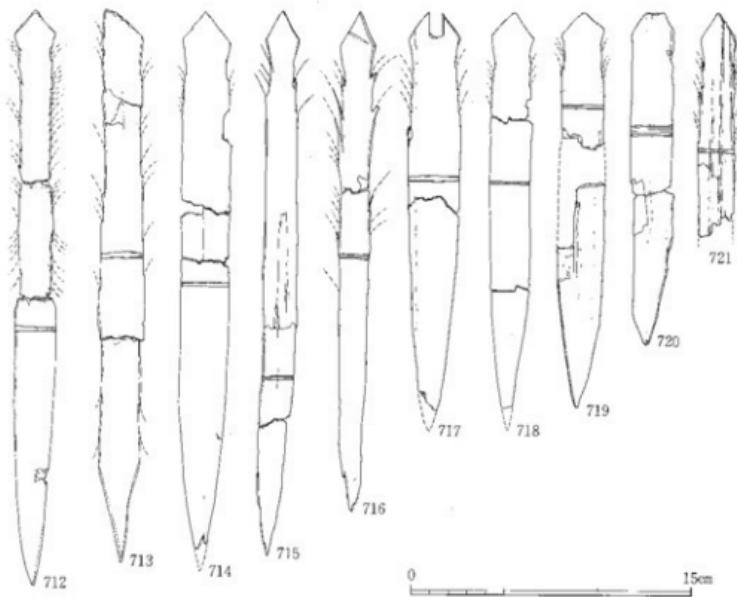
斎串は100点以上出土しているが、ほとんどが断片で、完形品は少ない。全様が知れるものでは形態はすべて共通で、「木器集成」分類によるC形式にあたるが、切込みの入れ方から2タイプが出土している。



第50図 馬形

V式は上下2方向から一对の切込みを入れるタイプのもの（712・713）で、IV式は上方のみから切込みを入れるタイプのもの（714～719）である。

大きさについては、V式については、712が長さ30.6cm、幅2.2cm、713が長さ29cm、幅2.5cmとほぼ一致しているが、IV式については、長さ28.5cm前後から15cm前後、幅2cm前後から2.5cm前後と幅をもっている。また、厚みについても、ほぼ0.2cm前後のものの中で、720は0.5cmとかなり厚くなっている。721はヒノキ製である。

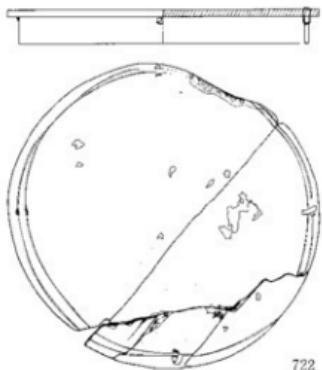


第51図 着串

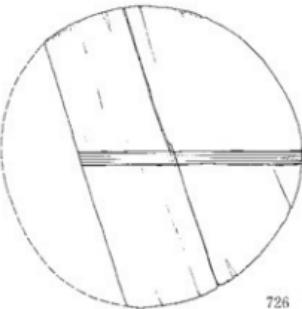
曲物 (722~730)

多数出土しているが、断片がほとんどで完形のものはない。特に側板の遺存状態がきわめて悪い。723は年輪年代測定の結果、709年以降の年代が出ている。

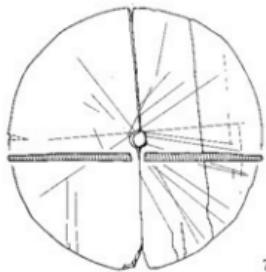
722桿皮結合曲物B。蓋板の縁ぞいに刃物で沈線を入れ、側板を結合する。側板は残存部に継ぎが残っていないため不明だが、円周を4等分する結合孔には桿皮が残る。径22cm、高さ2.4cm。723釘結合曲物。裏面の周辺部を薄く仕上げる。中央に径10mmの孔を有す。側辺に釘孔を有するため釘結合曲物と判断できる。表面に多数の刀傷痕を残す。径18.7cm、厚さ0.6cmヒノキ。724釘結合曲物。径13.5cm、厚さ1cmと小型のものである。側縁は傾斜を持ち一対3方からの釘孔を有する。725径4.5cm、厚さ2cmの最も小型のものである。柄杓に用いられたものであろう。726釘結合曲物。相対する2方に結合木釘を配する。径21.4cm、厚さ1cm。727桿皮結合曲物B。半分しか残存していないが、結合孔は4箇所であろう。外底面に無数の刀傷を残す。径19cm、厚さ0.7cm。728側板のみの出土。側板の下部にもう一重のタガをはめた釘結合曲物。側板は1列内4段継じだが、タガの綴合せ不明。内側には縦と右上がりの平



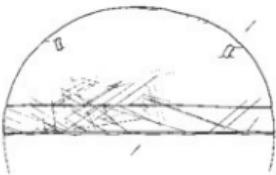
722



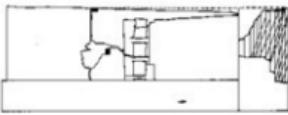
726



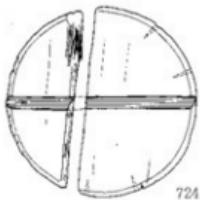
723



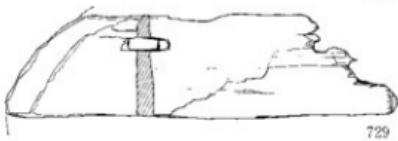
72



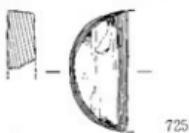
729



72A



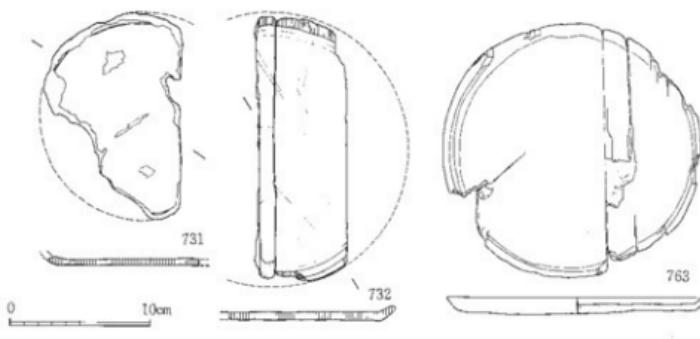
729



725



730



第53図 挽物

行線のケビキをいれる。推定径20.7cm、高さ7.5cm。729痛みがひどいが、外周部に段を有するところから樺皮結合曲物Aと考えられるが、長方形の孔を2箇所に持ち、何かに転用されたようである。730隅円長方形の樺皮結合曲物B。側辺に3箇所の結合孔を有す。長29.7cm、厚さ0.4cm

挽物（731～735・763）

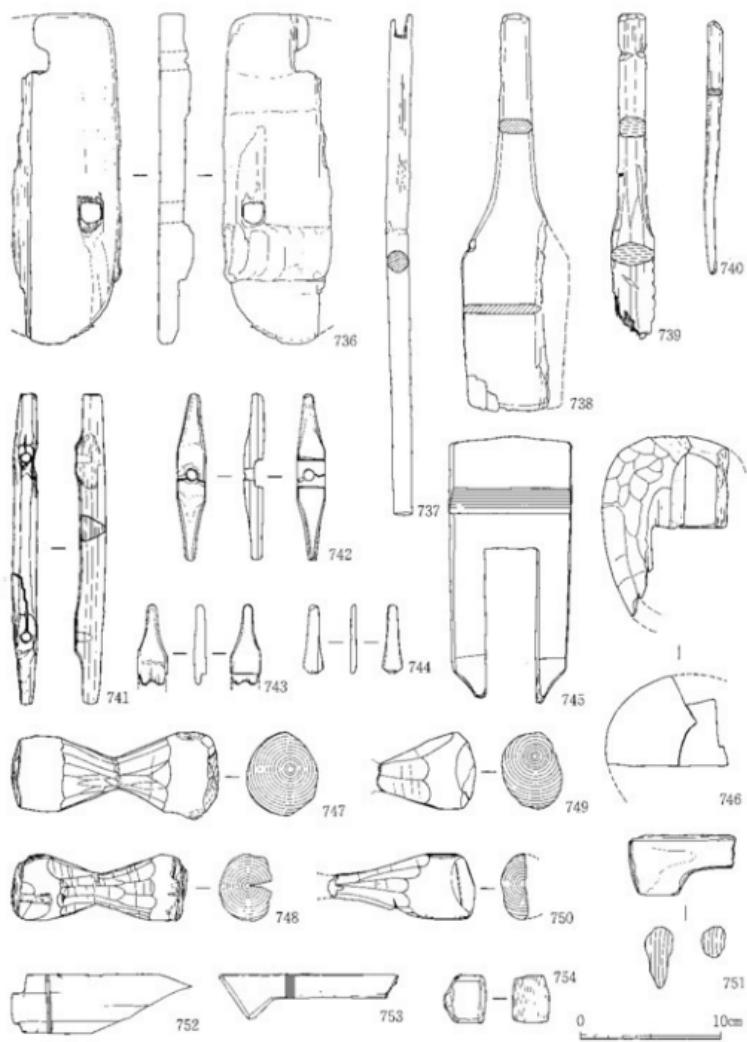
731は内外面に黒漆をかけた漆器で皿A類。口縁部を欠くため高さは不明だが、径は現状で14.5cm程度である。厚0.5cm。732白木作りの高台の付かない皿B類。内側と外面端部に轆轤目を残し、底部は粗削りのままである。内側に無数の刀痕を残す。直径18.6cm、高0.8cm。733高台の付かない皿B類。内側と外面端部に轆轤目を残し、底部は粗削り。直径20.9cm、高さ1.2cm。734高台の付かない皿B類。径不明、高1.1cm。735高台の付かない皿B類。推定径12.6cm、高0.8cm。763は高台の付かない皿B類。内面と外面端部に轆轤目を残し、底部は粗削りのうち一部に手斧痕を残す。年輪年代測定の結果、最外年輪が831年の年代を示している。直径18.3cm、高0.9cm。ヒノキ。

下駄（736）

平面形は前部を直線に、後部を円形に仕上げる。全長23.4cm、幅は欠失のため推定で10cm、身の厚1.8cmである。歯部は磨耗と風化が著しく、本来の形態は不明だが、側面まで歯部を削り出している。鼻緒孔は後蓋を後歯にあけたBあるいはC型式である。スギ。

杓子（738）

先縁を一直線につくるA型式の杓子形木器である。全長28cm、残存身幅5.7cm。ヒノキ。



第54図 下駄・糸巻・杓子・木錐・不明木製品

糸巻 (741~744)

741は棹木である。A III型式に分類でき、長さは22cmで中型である。背面は円く仕上げ、断面はかまばこ型を呈する。幅1.8cm、厚さ2.2cm。ヒノキ。742は棹木。A型式糸巻に伴うもの。相欠仕上口のかみあわせ部分の中央の軸穴は0.8cm。長さ11.8、幅2cm、厚さ1.5cm。ツガ。743棹木。A型式糸巻に伴うもの。残存長5.7cm、幅2cm、厚さ0.9cm。樹種未同定。744 A型式糸巻に伴うもの。残存長4.9cm、厚さ0.3cm。樹種未同定。

木鍤 (747~750)

丸木材の中央に向かって円錐形に削り込んだ、いわゆる槌の子である。丸木材には樹皮を残さない。747の長14.7cm、径5.9cm。ツガ。748の長12.4cm、径4.7cm。サカキ。749の径5.4cm。サカキ。750の径4.7cm。アカメガシワ。

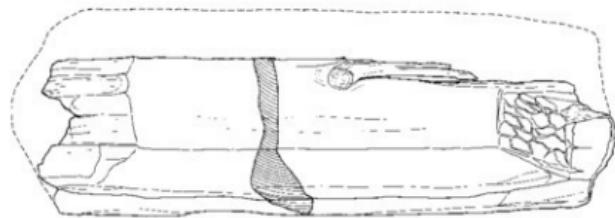
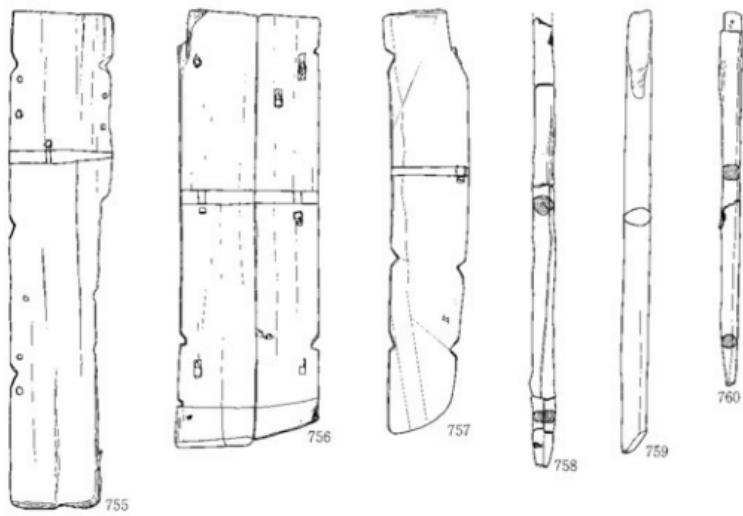
田下駄 (755~757)

田下駄のうち棹型（オオアシ）に分類できるものである。755は長方形の板材の上部、中央、下部のそれぞれに左右一対の三角形の切欠きを入れ、棹に取り付けるための対の小孔を4箇所に設ける。鼻緒孔は3箇所設け、前壺は左に偏る。全長52.8cm、幅11cm、厚さ1.4cm。樹種未同定。756は前部は直線に、後部はやや弧状の長方形の板材を使用するが、後部のやや内側部分に小さな段を持つところから、曲物の底板の転用かもしれない。上下2対の三角形の切り込みを持ち、取り付け孔も四隅に、鼻緒孔は3箇所設け、前壺は右に偏る。全長46.4cm、幅14.7cm、厚さ1.5cm。樹種未同定。757は鼻緒孔を持たないので断定できないが、左右3対の三角形切り込みを有するところから田下駄に分類した。これは、2箇所に櫛皮結合部を残し、表面に鋭い刃物の刃傷を残すところから、長方形曲物の転用と断定できる。全長44.9cm、幅8.2cm、厚さ0.9cm。樹種未同定。

刀形 (758~760)

細長く先端を尖らせた形態のものを刀形として扱った。

758は皮をはいだだけの丸木の先端部7cmほどを水鳥の嘴状に平らに仕上げている。残存長47.5cm、直径2cm。ヒサカキ。759は断面楕円形の加工木の先端部を斜めにカットし、木刀状の形態にしたものである。残存長47cm、長径2.8cm。ヒノキ。760は片側に刀部を持ち、先端部を尖らせた最も刀形らしい形態のものである。基部側は3方から一段削り込み、断面長方形に仕上げていて、中央部に小孔をあける。全長39.6cm、長径2.4cm。ヒノキ。



0 30cm

第55図 田下款・刀形・船形

船形（761）

一部を欠くが、残存長61.4cm、幅16.9cm、高さ11.2cmである。原本を断面台形にくり抜いて船形を作っている。底部は厚さ2.3cm程度に仕上げている。平城京出土資料のような帆立のための孔は認められないため、容器と考えられる。ヒノキ。

櫛（762）

長方形で肩部が角張るA I型式の横櫛である。断片のため全体は不明だが残存部の歯数は70枚、3cmあたりの歯数は32枚とごく平均的な数字を示す。歯の挽きだし位置をきめる切通し線はほぼ直線になっていいいる。残存幅8.5cm、高3.8cm、厚さ0.7cm。樹種未同定。

不明木製品（737・739・740・745・746・751～754）

737径1.5cm、残存長36.5cmの棒の片側から抉り込みが入るが、端部を失っているので全体の形状は不明である。棒の表面は丁寧に仕上げられている。ヒノキ。739刀あるいは杓状の形状の材の両側に鋸歯を刻む。柄と身とからなり、柄は面取りしていて橢円形に近い断面形状で、端部近くに両側面からの欠き込みを有す。身部はやや幅広く断面菱形状に両刃部を作り、残存部で6箇所以上の鋸歯を刻む。先端部は欠失する。残存長23.1cm、身部幅3.1cm、厚み1.6cm。ヒノキ。740やや偏平な棒の先端を尖らせたもの。頭部は斜めに丸く仕上げる。長17.9cm、幅1.1cm、厚み0.5cm。745偏平な板材をコの字形に作る。天地左右は不明だが、図示した状態で、頭部は両側から傾斜を持たせ山形を作る。側辺は先に向かってやや幅を狭め、先端部は側面から削って三角形に仕上げる。先端近くの片面に沈線が入る。凹部は3.8×11cmの長方形となる。全体に表面は平滑に仕上げられている。全長19cm、幅8.7cm、厚1.8cm。ヒノキ。746断片だが、元の形を復原すると卵形を呈する。このやや尖った側に大きく四角い削り込みがある。別府洋二氏の御教示によると、鎧の可能性があるという。現存長12.8cm、幅8.9cm、厚9.6cm。751やや偏平な棒状のものの端部に山形の突起がつく。鍾の柄であろうか。残存長7.6cm、幅4.3cm、厚1.9cm。752薄い板の片側を尖らせ、基部側の両側面を欠き込む。長12.9cm、幅4.1cm、厚0.3cm。753柄状の端部を山形を作る。これも柄であろうか。長12.7cm、幅31.5cm、厚0.6cm。754断面が不整形な四角形を呈し、片側木口は平坦に、もう一方は円錐形状に削るが先端部を欠失している。長径3.4cm、残存長2.9cm。

6. 自然遺物 (図版40、630・631)

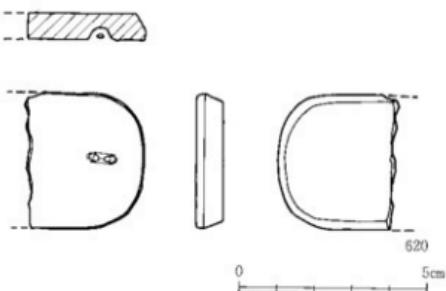
獣の歯と思われるものが井戸近くの包含層から2点出土した。奈良国立文化財研究所の松井章氏に鑑定していただいたところ、馬の左上顎の第2・第3後臼歯で、推定年齢は10歳前後との鑑定結果をいただいた。630の長5.2cm、厚2.1cm。

7. 石製品

石幕 (620)

石製の鉤帯である。先端部を欠損しているが、全体に横長で、両端部の幅が異なることから、蛇尾にあたるものと思われる。石材は花崗岩状の結晶質の火山岩を使用している。側面をカットし、下半部を帯状に面取りするため断面は台形状を呈する。表面・裏

面ともよく磨かれていて、全体に作りは丁寧であるが、中央部に石目にそってひびが入っている。裏面には端によって長辺と平行方向に潜り穴が穿たれているが、欠損部と合わせて1対のものであろう。幅3.6cm、厚0.7cm、残存長3.15cm。



第56図 石幕

第4節 小犬丸遺跡出土木器の樹種

京都大学名誉教授 島地 謙

兵庫県龍野市揖西町小犬丸遺跡の、8世紀から11世紀にまたがる遺構から出土した木器50点について樹種の同定をおこなった。

顕微鏡観察用の切片作製に際しては、現場（兵庫県埋蔵文化財調査事務所）において資料そのものから直接カミソリの刃を用いて木口、極目、板目の三断面の徒手切片を採取し、資料に与える傷を最小限度にとどめるように努めた。したがって、資料番号50の木簡の場合は切片採取によって著しく原形を損なう恐れがあり、切片の採取がはばかられたため顕微鏡観察がおこなえなかった。一部の資料切片（資料番号38,41,49,51,58）については、切片作製直後水によって封入した一時プレパラートを普通光顕微鏡によって観察するにとどめたが、大部分の資料切片は常法に従ってビオライトにより封入して永久プレパラートを作製し、普通光および螢光による顕微鏡観察をおこなった。これらの永久プレパラートは京都大学木材研究所の材鑑調査室に保管されている。

樹種同定の結果は表3に示した通りである。

同定された樹種は、針葉樹4種（ヒノキ30点、スギ7点、ツガ3点、コウヤマキ3点）、広葉樹5種（ケヤキ2点、サカキ2点、ヒサカキ1点、イスノキ1点、アカメガシワ1点）で、いずれも温帯から暖帯ないし亜熱帯に自生する樹種であった。この他に樹種同定が不可能な資料が1点（資料番号50）あった。

また樹種毎の用途別点数をみると次の如くである：

針葉樹ではヒノキ（馬形10点、曲物6点、簷串3点、木簡2点、刀形2点、杓子1点、糸巻1点、舟形容器1点、用途不明3点、曲物転用品1点）、スギ（井戸枠5点、下駄1点、用途不明1点）、コウヤマキ（鳥形木製品3点）、ツガ（糸巻1点、木鍾1点、用途不明1点）。

広葉樹ではケヤキ（井戸枠2点）、サカキ（木鍾2点）、ヒサカキ（用途不明1点）、イスノキ（櫛1点）、アカメガシワ（木鍾1点）。

以下、各資料の樹種同定の根拠となった木材組織の特徴を樹種毎に示す。また図版に資料切片の顕微鏡写真的代表的なものを示す。

樹種の特徴

ツガ *Tsuga sieboldii* Carr. (マツ科) (資料番号57,63,119:写真1~2)

早材から晩材への移行は急である。垂直・水平树脂道はみられないが、放射仮道管がある。放射柔細胞の壁が厚く、末端壁がいわゆる數珠状を呈する。以上の観察結果から上記資料は

いずれもツガと同定された。

ツガの分布範囲は暖帯から温帯。本州(福島県以南)、四国、九州、に自生する常緑の高木針葉樹。材は木理通直であるが、肌目は粗い。耐朽・保存性は中庸で、針葉樹中重硬な部類に属し、加工はあまり容易ではない。近世以降の用途としては建築(柱、土台、造作など)、土木(枕木、橋など)、器具(指物、経木、箸など)、包装箱、車両、船舶などがあげられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don (スギ科) (資料番号55,90,125,128,129,131,133; 写真3~4)

早・晩材の移行はやや急である。垂直・水平樹脂道および放射仮道管がみられない。樹脂細胞が早材から晩材への移行部ないしは晩材部に接線方向に並ぶ傾向がある。放射柔細胞の壁は薄く、分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に普通2個みられることが蛍光顯微鏡により確かめられた。以上の観察結果から上記資料はいずれもスギと同定された。

スギの分布範囲は暖帯から温帯下部。本州、四国、九州、屋久島の主として太平洋側に自生する。1属1種で日本特産の常緑高木針葉樹。材には特有の香があり、木理通直で肌目は粗い。耐朽・保存性は心材においては高いが、辺材においてはやや低い。近世以降の用途としては建築(板類一般、柱、建具など)、土木(電柱)、器具(桶樽、下駄、箸など)、船舶などに広く利用されているが、古代においても土木、建築、農具(田下駄、大足、田舟など)、船舶(丸木舟から構造船にいたるまで)などにきわめて広く利用されていたことが知られている。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* S.et Z. (コウヤマキ科) (資料番号139-1,139-2,139-3; 写真5~6)

早、晩材の移行は比較的ゆるやかで、晩材幅はきわめて狭い。垂直・水平樹脂道、放射仮道管および樹脂細胞を欠いている。分野壁孔はやや小型の窓状壁孔。以上の観察結果から上記資料はいずれもコウヤマキと同定された。

コウヤマキの分布範囲は暖帯上部から温帯。本州(福島県以南)、四国、九州の極く限られた地域に自生する、1属1種で日本特産の常緑高木針葉樹。材は木理通直で肌目緻密。耐朽性、耐湿性に富み、強靭な材である。近世以降の用途としては建築(天井板)、器具(蒸籠、将棋盤、桶など)、船舶などがあるが、近畿地方の遺跡から出土する古代の檜桶材の90%はコウヤマキである。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. (ヒノキ科) (資料番号6,7,11,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41,43,44,45,46,49,51,58,60,68,69,94,116,117,118,120,121,124; 写真7~8)

早・晩材の移行はゆるやかで、晩材幅は狭い。垂直・水平樹脂道および放射仮道管はみられない。樹脂細胞は晩材部に偏在する。放射柔細胞の壁は薄く、分野壁孔は典型的なヒノキ

型で普通1分野に2個みられることが蛍光顕微鏡により確かめられた。以上の観察結果から上記資料はいずれもヒノキと同定された。

ヒノキの分布範囲は暖帯から温帯下部。本州（福島県以南）四国、九州、屋久島にかけて自生する常緑の高木針葉樹。材には特有の香気と光沢があり、木理通直で肌目は緻密。耐朽・保存性が高く、韌性に富み、水湿に強い優良材であり、近世以降の用途としては建築（柱、社寺建築など）、家具、器具（曲物、漆器木地、樋、まな板など）、彫刻などきわめて広く用いられている。古代においてもヒノキ材の使用例はきわめて多岐にわたっているが、肌目の緻密さや、香気・光沢などがヒノキ材に一種の清浄感を与えることから、種々の祭祀具や仏像に用いられた例や、韌性に富み曲げ易いことから種々の曲物に用いられた例が多い。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino (ニレ科) (資料番号126, 127; 写真9~10)

環孔材。年輪のはじめに極めて大きい道管が1例に並び、孔圈外では小道管が多数集合して接線方向ないし斜線方向につながる。道管は單穿孔を有し、小道管の内壁には螺旋把厚がみられる。放射組織は異性で1~8細胞幅、上下の縁辺にはしばしば大型の結晶細胞がみられる。以上の観察結果から上記資料はいずれもケヤキと同定された。

ケヤキの分布範囲は温帯から暖帯下部。本州、四国、九州、台湾、中国に自生する高木の落葉広葉樹。材はやや重く、狂いや割れが少ない。概して硬く強靭で、心材の耐朽・保存性が高く、水湿にもよく耐える。建築（特に社寺建築）、器具（臼、杵、盆、漆器木地など）、家具、彫刻、ろくろ細工など用途の広い優良材である。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. (ツバキ科) (資料番号62, 71; 写真11~12)

散孔材。きわめて小さい道管が単独ないし2~4個複合して平等に分布する。道管は段階穿孔を有し、側壁にはピッチの広い螺旋把厚がみられる。軸方向柔細胞は不顕著ないし短接線状。放射組織は異性でほとんど単列であるが、ときに部分的に2列になる。放射柔細胞の壁は厚い。以上の観察結果から上記資料はいずれもサカキと同定された。

サカキの分布範囲は亜熱帯から暖帯。本州（茨城県~石川県以西南）、四国、九州、濟州島、台湾、中国に自生する高木または低木の常緑広葉樹。材の肌目は緻密であるが木理はむしろ粗い。概して重く、強靭・坚硬である。近世以降の用途としては建築（床柱、桁）、器具（柄、杵、箸、ブラシ背板、櫛など）、舟の棹、ろくろ細工などに用いられ、枝葉は神事に用いられる。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. (ツバキ科) (資料番号56; 写真13~14)

散孔材。きわめて小さい道管が単独ないし2~4個複合して平等に分布する。道管は段階穿孔を有し、段階の数は多い。道管の側壁には螺旋把厚がみられる。道管・放射組織間の壁孔は対列状。軸方向柔細胞は散在状ないし短接線状に配列し、柾目面で多数観察される。放射組織は異性で1~4細胞幅。放射柔細胞の壁は厚く、放射組織辺部の直立細胞の高さが

非常に高いのが目立つ。以上の観察結果から本資料はヒサカキと同定された。

ヒサカキの分布範囲は暖帯から亜熱帯。本州（岩手県～秋田県以南）、四国、九州、沖縄、朝鮮半島南部、台湾、中国に自生する低木ないし小高木の常緑広葉樹。材の肌目は緻密であるが木理はむしろ粗い。やや重く、強さは中庸。材は小器具、薪炭に、木炭は和紙製造に、枝葉は神事に、果実は染料になる。

イスノキ *Distylium rasemosum* S.et Z. (マンサク科) (資料番号31; 写真15～16)

散孔材。小径の道管がおおむね単独で平等に分布する。道管は段階穿孔を有し、内腔にはチースが存在する。軸方向柔細胞がほぼ一定の間隔で2～3細胞幅の接線状に配列する。多室結晶細胞が顕著にみられる。放射組織は異性で1～2（ときに3）細胞幅。しばしば平状細胞の多列部と直立細胞の单列部が交互に軸方向に長く連なる。以上の観察結果から本資料はイスノキと同定された。

イスノキの分布範囲は暖帯から亜熱帯。本州(関東以西)、四国、九州、沖縄、濟州島、台湾、中国に自生する高木の常緑広葉樹。材の肌目はきわめて緻密であるが、木理はときに交錯する。日本産材のなかでもっとも重く、もっとも強い材に属する。対朽・保存性も高いが、重厚なだけに切削・加工は困難。建築(床柱)、器具(櫛、柄、箱、盆、ブラシ木地、算盤枠、茶托、寄木細工)、楽器(三味線の棹、琵琶の撥)に用いられる。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell.Arg. (トウダイグサ科) (資料番号61; 写真17～18)

環孔材。孔圈の道管はやや大きく、放射方向に2～5個複合してややまばらな孔圈を形成する。孔圈外の小道管は柔細胞を間に挟んで数個が放射方向に複合する。孔圈外の小道管の壁は厚い。道管の穿孔は單穿孔。放射組織は単列・異性（ときに部分的に2列）で、放射柔細胞には結晶を含むものがみられる。以上の観察結果から本資料はアカメガシワと同定された。

アカメガシワの分布範囲は暖帯。本州（秋田県以南）、四国、九州、沖縄、朝鮮半島、台湾、中国に自生する小高木の落葉広葉樹。材は肌目が粗く、やや軽軟。建築(床柱)、器具(杵、箱、盆、下駄)、薪炭に用いられる。

表2 小丸遺跡出土木製品の樹種

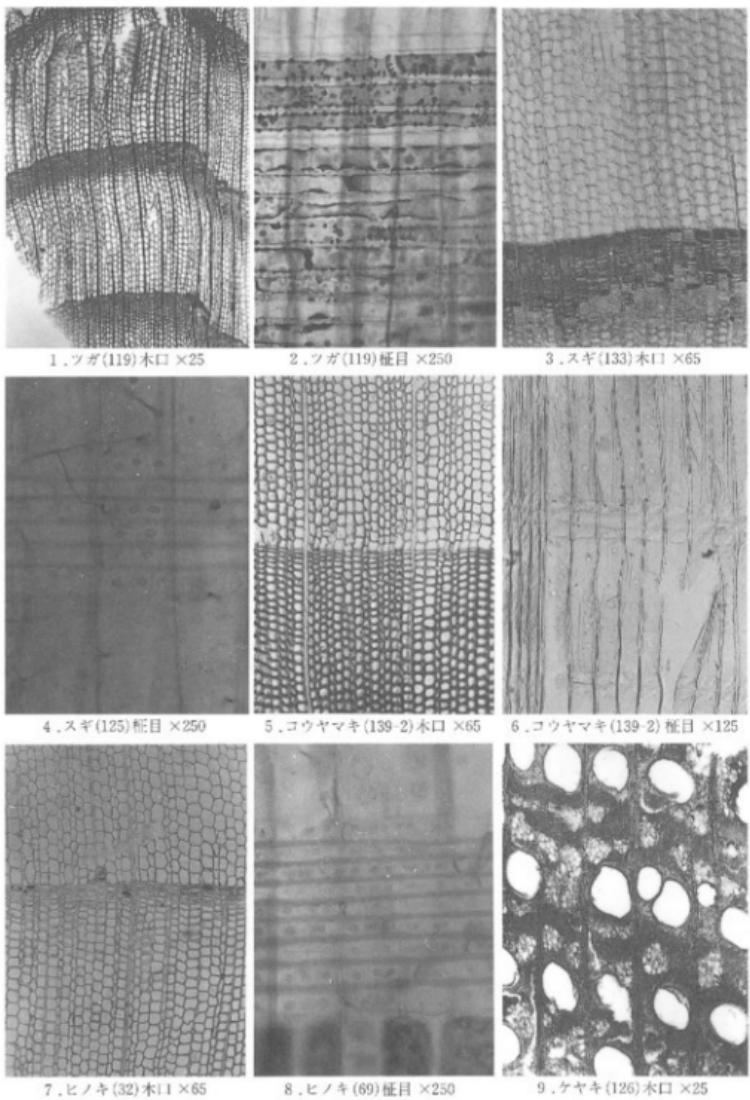
資料番号	遺物番号	遺 物 名	樹 種	備 考
6	727	曲物B	ヒノキ	
7	—	曲物B	ヒノキ	
11	—	曲物C	ヒノキ	
31	—	櫛	イスノキ	
32	738	杓子	ヒノキ	
33	702	馬形	ヒノキ	
34	704	馬形	ヒノキ	
35	705	馬形	ヒノキ	
36	706	馬形	ヒノキ	
37	707	馬形	ヒノキ	
*38	708	馬形	ヒノキ	*切片
39	703	馬形	ヒノキ	
40	718	柵串	ヒノキ	
*41	709	馬形	ヒノキ	*切片
43	710	馬形	ヒノキ	
44	721	柵串	ヒノキ	
45	—	柵串	ヒノキ	
46	711	馬形	ヒノキ	
*49	—	木簡	ヒノキ	*切片
*50	—	木簡	*同定不能	
*51	—	木簡	ヒノキ	*切片
55	736	下駄	スギ	
56	758	刀形?	ヒサカキ	
57	742	糸巻	ツガ	
*58	739	不明	ヒノキ	*切片
60	745	不明	ヒノキ	
61	750	木錘	アカメガシワ	
62	749	木錘	サカキ	

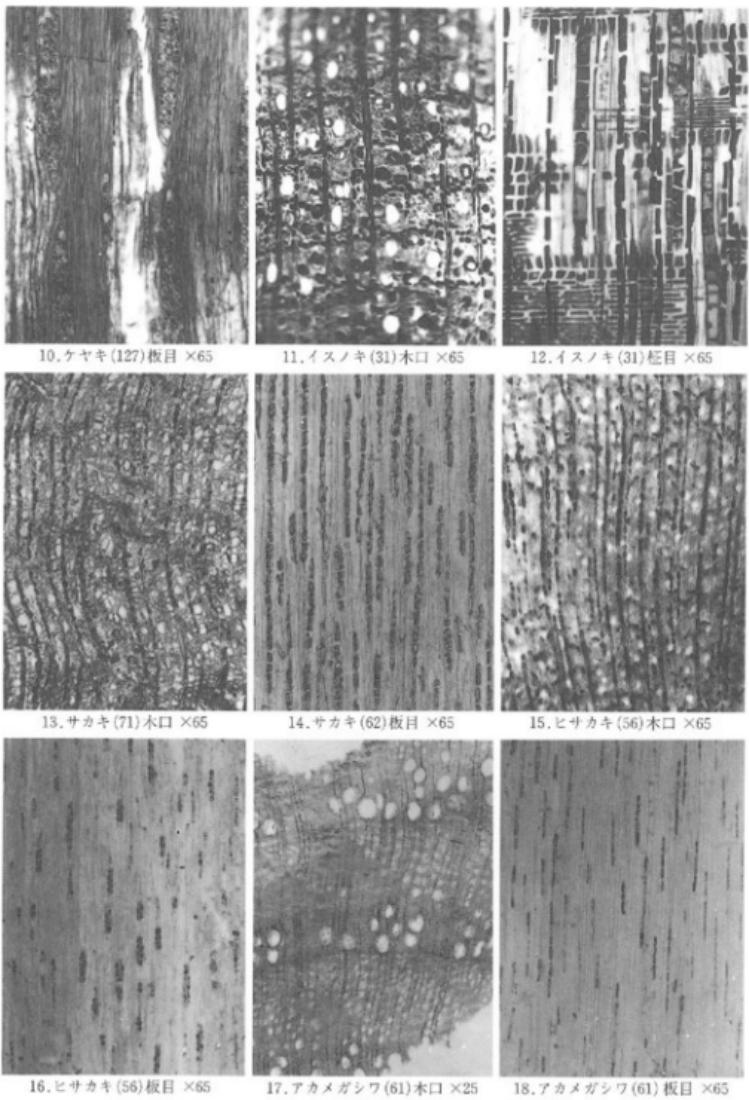
63	747	木錐	ツガ
68	741	糸巻	ヒノキ
69	726	曲物	ヒノキ
71	748	木錐	サカキ
90	737	不明	スギ
94	729	曲物転用品	ヒノキ
116	760	刀形	ヒノキ
117	759	刀形	ヒノキ
118	—	曲物	ヒノキ
119	—	不明	ツガ
120	—	曲物	ヒノキ
121	—	不明	ヒノキ
124	761	舟形容器	ヒノキ
125	—	井戸枠	スギ
126	—	井戸枠	ケヤキ
127	—	井戸枠	ケヤキ
128	—	井戸枠	スギ
129	—	井戸枠	スギ
131	—	井戸枠	スギ
133	—	井戸枠	スギ
* * * 139-1	701	鳥形木製品	* * * コウヤマキ
139-2	701	鳥形木製品柱	コウヤマキ
139-3	701	鳥形木製品くさび	コウヤマキ

*永久プレパラートを作製せず、切片を水で仮封入した一時プレパラートの観察により
同定をおこなった。

* * 本資料は片切採取がはばかられたためプレパラートによる顕微鏡観察ができず、同定
不能であった。

* * * 本資料は光谷拓実氏（奈良国立文化財研究所）が徒手切片の一時プレパラートを観察
することにより樹種を同定されたものである。





第5節 年輪年代測定法による小犬丸遺跡出土木製品の年代推定について

奈良国立文化財研究所 光 谷 拓 実

1.はじめに

近年、わが国においてヒノキやスギを用いた年輪年代測定法が進展し、考古学、建築史、美術史などに関連した木質古文化財の年代測定に威力を発揮している。

考古学に関連したものでは、長年、論争の続いている奈良時代の都、紫香楽宮跡(滋賀県)の所在位置と、平安時代の城柵、払田柵跡(秋田県)の築造年代を明らかにしたことなどが画期的な事例として上げられる。これらは、年代を1年単位で割り出す基準の曆年標準パターンが、ヒノキでは現在から紀元前206年までと、スギが東北地方において西暦1285年から405年まで完成しており、これらを用いて得られた成果である。

ここでは、小犬丸遺跡から出土した木製品のうち年代測定が可能と判断された木皿1点、曲物容器の底板1点を選定し、これらの年代測定を行った結果の概略を報告する。

2.試料と方法

年代測定を行った木製品の木取りはいずれも柾目で材種はヒノキであった。年輪幅の計測は、アメリカ製(F・ヘンソン社製、0.01mmまで計測可能)の年輪幅読取器を使用し、木製品の柾目面から直接計測した。計測した年輪幅データはただちにコンピューターに入力し、年輪変動パターングラフの作成と曆年標準パターンとの照合に備えた。コンピューターによる年輪変動パターンの照合は、相関分析手法を応用し、相関関係の最も高い年代位置を検出してから、この重複位置で双方の年輪変動パターングラフをライトボックス上で重ね合わせておき、目視による細かい検討を行なったのち、最終判断を下すこととした。⁽¹⁾

3.結果と考察

木製品2点の計測年輪数と残存最外年輪測定年代は表3に示したとおりである。表中に示したt値とは、木製品の年輪幅データを曆年標準パターンを構成する年輪幅データの古い年代位置から新しい年代位置へと順にずらしながらその重複した年輪幅データ間相互の相関係数 r を求め、ついでt分布検定を行ない、最も高いt値を示した年代位置での値である。(t値が高ければ高いほど双方の年輪変動パターンがよく類似していることを示す。このとき、t分布検定に関しては、自由度60以上、有意水準0.1%のt表より求めたt値=3.5を一応の基準とした。)

木製品2点の年輪変動パターンと曆年標準パターンとの照合の結果は、検出した最大のt値をみると基準としたt=3.5よりいずれもかなり高い数値を示し、曆年標準パターンとよく

似たパターンであることが判った。この検出結果にもとづいて暦年標準パターングラフと木製品の年輪変動パターングラフとを重ね合わせ、双方の変動パターンを詳細に検討したところ、2点とも最大のt値を示した位置で重複していることを確認した。第59図には曲物底板の年輪変動パターングラフ（上）と暦年標準パターングラフ（下）の一部を示した。これより、木皿（763）には693年～831年、曲物底板（723）には464年～709年にかけて形成された年輪が含まれていることが明らかとなった。したがって、これら木製品の原材の伐採年は、木皿が831年以降、曲物底板が709年以降であることが確定した。

年輪年代測定法にとって最良の試料とは、樹皮付きあるいは未加工部分をとどめている形状のものである。このタイプのものは、その最外年輪の暦年が試料材の伐採年、あるいは枯死年に相当し、遺跡、遺構等の年代に直接結び付くものが多い。

一方、今回測定したような木製品は、原木からどれほど除去して製品に仕上げたものか判らない。したがって、木製品に残る最外年輪の暦年にどれだけ除去した年輪数を加算すればよいのか不明である。つまり、このような木製品から得られた測定年代は、木製品に加工する前の原木の伐採年とはまったく無関係であり、木製品の残存最外年輪の暦年をもって、伐採年代推定の上限を示すにとどまる。

この他に、原木を伐採後、製品にするまでの寝かす期間や古材の転用などの点を考えると、遺跡、遺構、遺物の年代決定には、年輪年代値をそのまま使うのではなく、土器等に代表される発掘資料の細かい検討、あるいは遺跡を取り巻く歴史的な諸条件を勘案して総合的に年代推定をおこなう必要がある。

4.まとめ

今回、小犬丸遺跡から出土した2点の木製品を選定し、年輪年代測定法を行なった。その結果、現在作成している暦年標準パターンは、この地域の出土木製品にも適用できることが判明した。これから得られた暦年代は原木の伐採年を示すものではないにしても、小犬丸遺跡の年代を考察する上で、貴重な年代情報を提供することとなった。

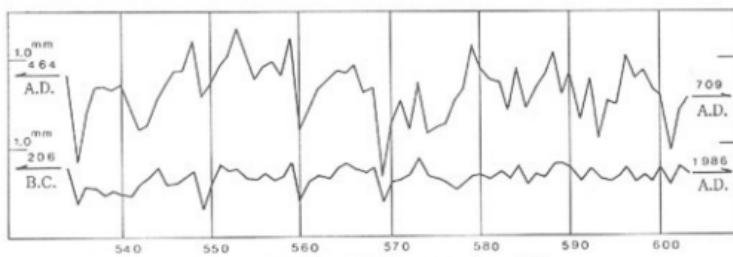
注

(1)わが国における年輪年代学の確立とその応用（第1報）

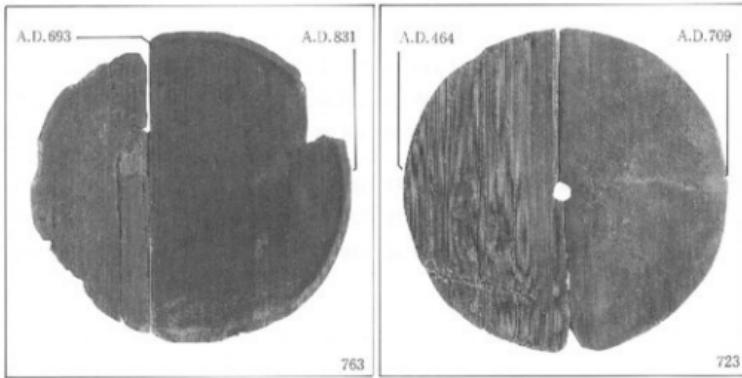
—現生木のヒノキによる年輪変動パターンの特性検討—木材学会誌第33号 168-169 1987

表3 木製品2点の年代測定結果一覧表

遺跡名	試 料	計測年輪数	t 値	残存最外年輪 測定年代	発掘所見に よる年代
小犬丸遺跡	木皿	139	6.6	831年	8～9 c
	曲物底板	246	9.3	709年	"



第59図 曲物底板の年輪変動パターングラフ(上)と
腐年標準パターングラフ(下)



第60図 木皿と曲物底板

表4 土器出土層位一覧表

出土層位	出土土器番号
谷側3層	126 130 200 209 215 268 270 274 281 302 314 455 491 504
青灰色シルト層	129 218 260 288 291 315 317 345 346 363 376 453 468 339 268
谷側2層	101 102 103 105 113 115 121 128 135 144 146 147 148 164 170 179
暗灰色シルト層	185 186 192 193 194 197 201 202 213 222 226 230 231 232 239 240 245 247 248 249 254 275 281 294 298 300 304 311 313 318 326 349 401 447 435 279 120 262 310 324 250 111 118 155 156 177 178 228 261 488 492 493 117 142 172 463 464 216 227 246 256 258 478 484 137 189 150 151 157 174 175 180 187 195 190 211 242 293 319 333 367 404 407 422 445 340 487 334 357 327 329 341 348 352 355 359 358 360 375 409 362 365 370 402 411 412 413 415 417 433 434 441 443 449 450 458 461 462 465 469 476 472 479 490
	286 127 342 356 403 414 436 470 473 107 108 109 133 140 141 171 176 182 183 184 212 214 228 233 237 241 243 244 276 277 284 285 287 301 309 319 323 347 416 424 458 489 471 481 480 483 513 283 296 305 308
集石遺構内	120 125 138 145 152 153 167 196 197 191 203 204 205 206 207 208 217 220 224 238 257 259 278 289 292 303 306 325 328 312 331 337 338 343 361 365 371 425 428 451 457 486 439 446 489 364
集石遺構下層	106 123 131 223 321 362 450 482 512 181 401 435

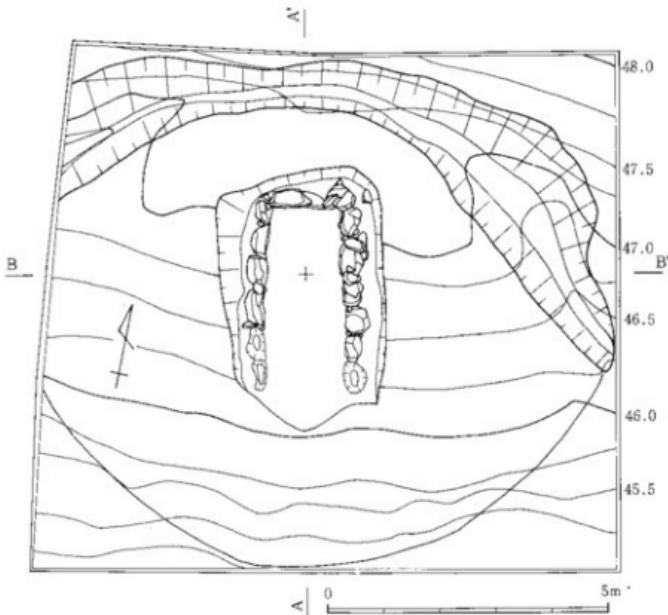
*この他の土器は山側2・3層から出土したものである。

第4章 津原1号墳の調査

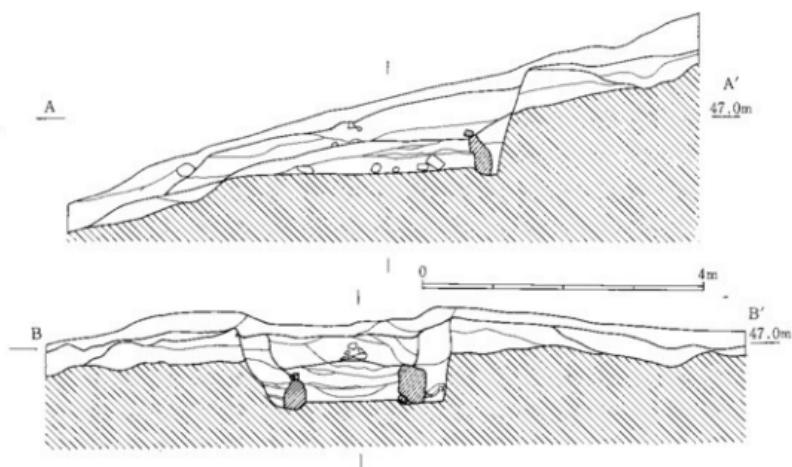
第1節 遺構

立地

小犬丸東南方の山塊から西方へ派生した最も北の尾根は一旦鞍部をなし先端部に小丘陵を造る。津原1号墳はこの丘陵の南斜面の裾部近くに立地する。古墳の南に展開する谷斜面が弥生時代中期から平安時代末にかけての遺物が出土した小犬丸遠畿脇遺物散布地である。さらにこの谷を挟んだ南尾根上には直径10m程度の円墳があり、崩れた石組みが認められる。この古墳は津原1号墳と同様に横穴式石室を主体部に持つ古墳と判断でき、津原1号墳と群をなすものと考えて、この古墳を津原2号墳と呼称する(第5図参照)。なお、津原1号墳からは小犬丸地域の谷部は全く見通せず、わずかに南部の谷入口部を望めるのみである。



第61図 B3区(津原1号墳)地形測量図



第62図 墳丘土層断面図

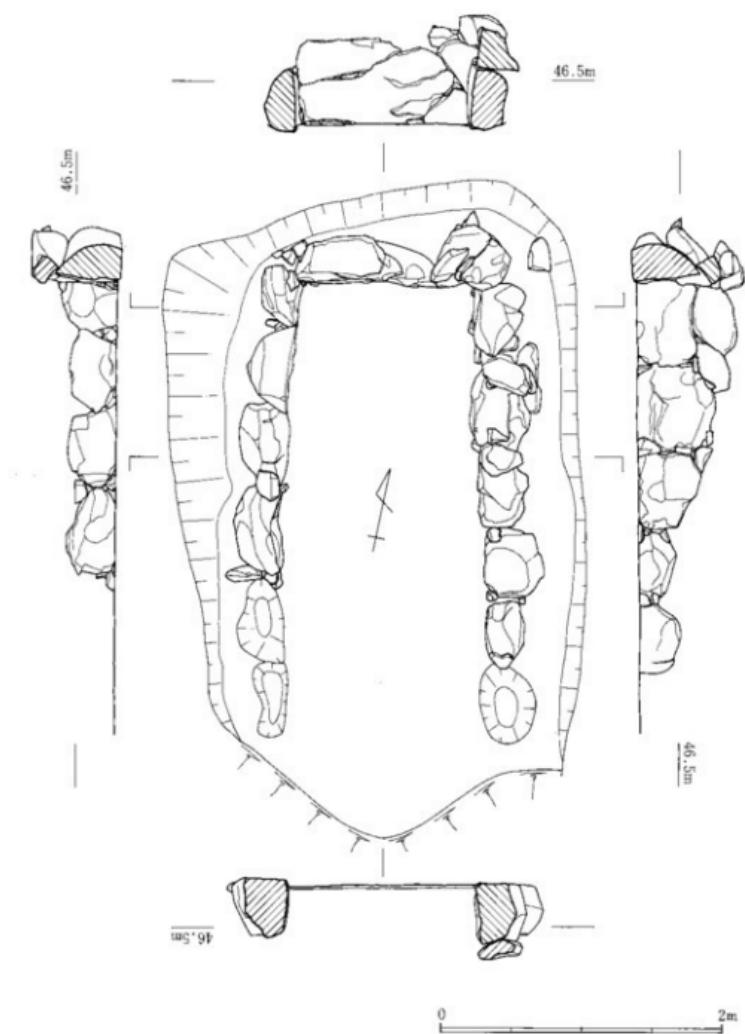
墳丘

調査前には丘陵南斜面に直径10m程度のわずかな盛り上がりが認められただけであった。墳丘は丘陵斜面に弧状の溝を掘削し墳丘を区画するとともに、斜面下方に盛土することによって築いている。その作業と同時に先行して墓坑を掘削して横穴式石室を構築している。本来は石室を覆うかなりの盛土があったはずだが、そのほとんどが流失し、わずかにその痕跡をとどめるのみである。

横穴式石室

本墳の主体部は横穴式石室である。地山を幅3m長さ4.5mの大きさに掘り込み横穴式石室を築く。石室では一部で2段の石組が認められるものの、大部分は基底石のみが遺存している状態である。最下段の石を被えるに当たっては、奥・側壁とともにコの字形状に溝を掘り石を被える。奥壁はやや不整形な石を2段に組み、遺存高60cmで幅1.2m。側壁は右側は奥から4石が1段だけ残り、開口部側に2石の抜き跡が認められる。左側壁は基底部5石が残り、1石の抜き跡が認められ、第2段は奥壁側にやや小振りの石が2石残る。基底石は比較的平滑な面を石室内側に向け石を立てた状態で被える。つまり石の最も表面積の広い部分を表面に出しているのだが、2段目からは平積みに変わっている。

現状では玄室と狭道との区別はできないし、石室自体が開口部側にどの程度続くかは判ら



第63図 横穴式石室

ない。ただ、抜き跡を含めると基底部は左右とも6石で長さも良く揃っているところから、原状を示しているとも考えられる。奥壁から抜き跡までの長さは3.3mで、ほぼ石室の全長を示すものと考えてよかろう。石室の開口方向は真南から約12°東に振っている。

第2節 出土遺物

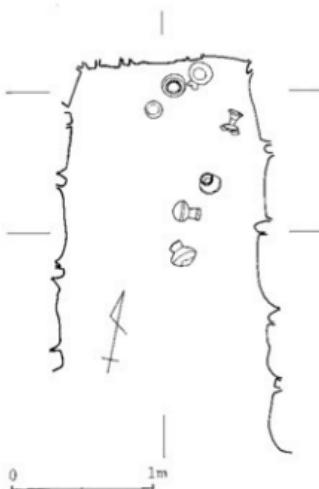
遺物出土状態

玄室の床面からは7点の須恵器が出土した(801~807)。808は墳丘南裾の流土中から出土したものだが、その他の土器は第64図に示したようにすべて床面に接した状態で出土している。

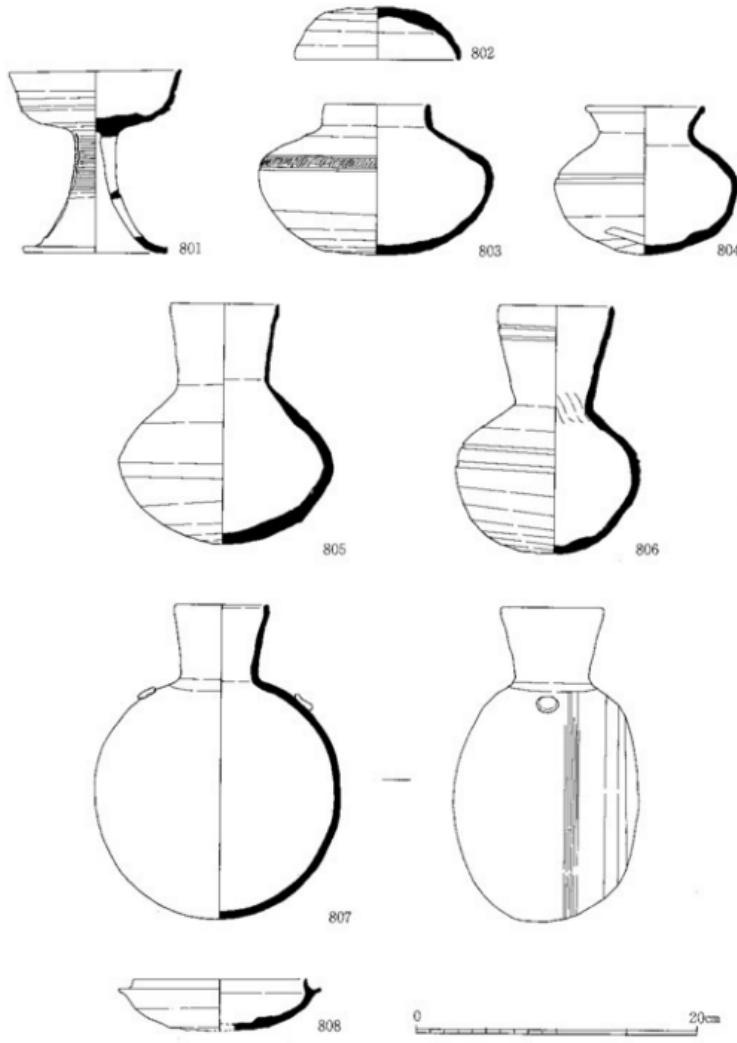
出土遺物

801は高杯である。長脚2段の二方透しで、無蓋の高杯である。杯部はやや外方に開き、棱も明瞭である。脚部には中段までカキ目が施される。口径12.3cm、器高12.9cm。802は壺蓋である。803とセットになるよう近接した場所で出土している。天井部は円くメリハリのない形態である。口径11.8cm、器高3.8cm。803は有蓋の短頸壺である。やや張った肩部には2条の沈線の間に刻み目を施す。

底部にはロクロ削りを施す。胴部径16.9cm、器高10.7cm。804の短頸壺はやや開き気味の端部を玉縁状に仕上げたものでナデ肩の肩部には2条の沈線を施す。底部は不定方向のヘラ削りで仕上げる。胴部径13.2cm、器高10.6cm。805・806は長頸壺である。どちらも体部下半をロクロ削りしているが、薄く直口の805(胴部径15.4cm、器高17.2cm)に比べ、806はやや開き気味の口縁部と肩部にそれぞれ2条ずつ沈線を施し、より装飾的である。胴部径13.2cm、器高17.7cm。807は提瓶である。体部はナデ仕上げし部分的にカキ目がみえる。やや開いた口縁部は端部をやや側に曲げる。両肩部には釣手を形どった浮文が付く。胴部径17.7、器高22.4cm。808の杯は墳丘の流土中から出土したものである。器高は3.7cmと浅い作りで、立ち上がり部もかなり低くなった段階のものである。口径12.4cm。



第64図 石室床面遺物出土状態



第65圖 古墳出土須惠器

第3節 中世墓

横穴式石室内の左側壁第2段目の奥壁よりの位置で、中世土器が一括で出土した。土師器の羽釜と椀それぞれ1点と皿6点、須恵器の椀3点である。

破損が見られるものの、ほとんどが完形に近く、意図的に埋められたものであることはまちがいない。掘り方は検出できなかったが、遺物の集中の仕方と墳丘のほぼ中央に位置するところから、古墳を利用した墓であると考えられる。



第66図 中世土器出土状態

出土遺物

811~813は須恵器椀である。底部は糸切りで、体部にはロクロ痕が明瞭な凹凸となって残される。胎土は砂まじりでやや荒く、焼成は不良でやや青白い。口径15cm前後、器高5cm前後である。

814は土師器椀である。口径15.4cm、器高4.4cmとやや浅手である。

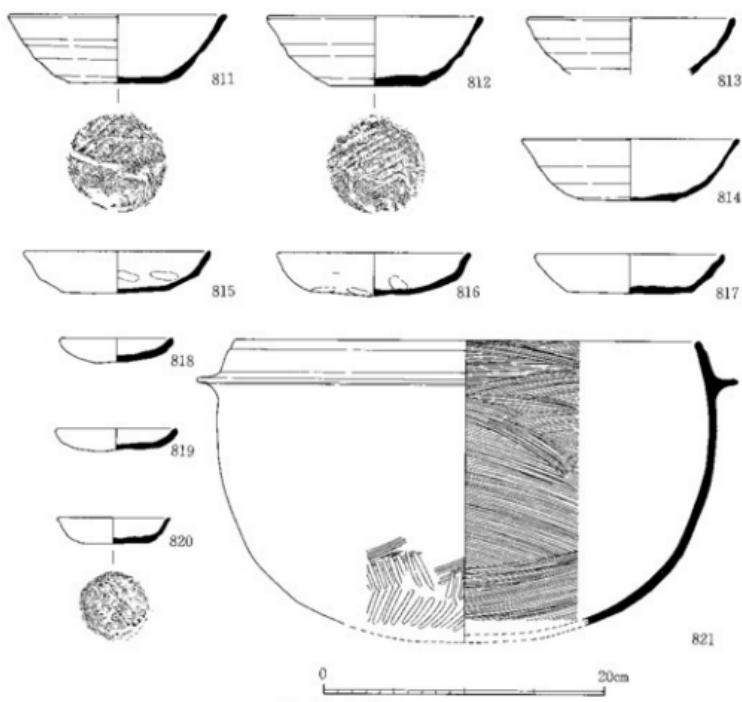
815~817は土師器皿。口径13.5cm前後、器高3cm前後で、指頭痕を残す荒い作りである。
818~820は土師器小皿。口径8cm前後、器高1.8cm前後。820は底部を糸切りする。

821の土師器羽釜は叩きののちハケ目を施し、内面は全面を横方向のハケ目で仕上げる。口縁部外面はナデにより沈線状のくぼみが付き、底部も薄くつまみ出された状態である。口径33cm、器高21.4cm。

これらの遺物のうち、須恵器は椀は相生窯址群竹原2号窯の形式に一致することから、12世紀後半頃に位置づけられ、また、土師器羽釜は、底部外面に叩き目を残すところから、12世紀代のものと考えられる⁽¹⁾。したがって、この中世墓の年代は12世紀後半頃にもとめてさしつかえなかろう。

注

(2) 岡崎正雄氏の御教示による。



第67図 古墳出土の中世土器

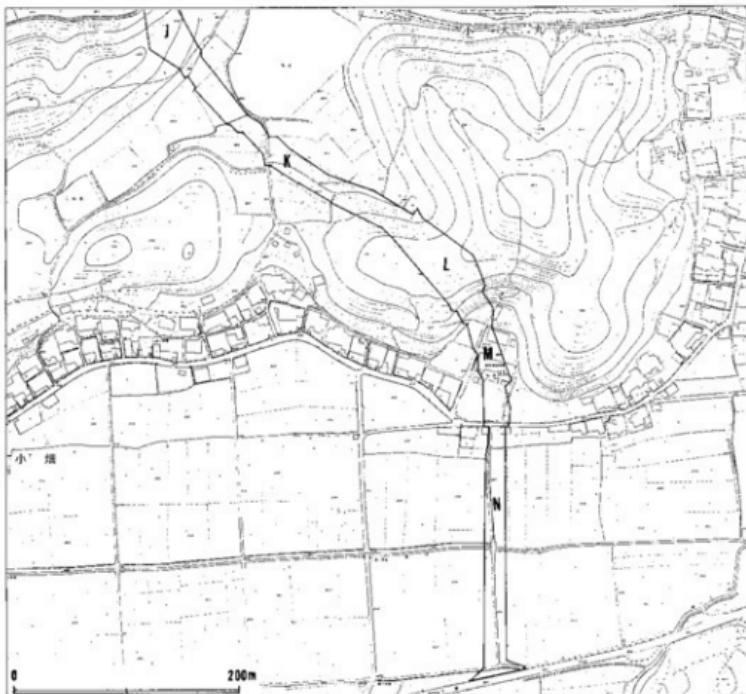
第5章 小畠遺跡の調査

第1節 確認調査

小畠地区ではJ～N地区の全長700mの工事区間を対象として確認調査を実施した。

N地区

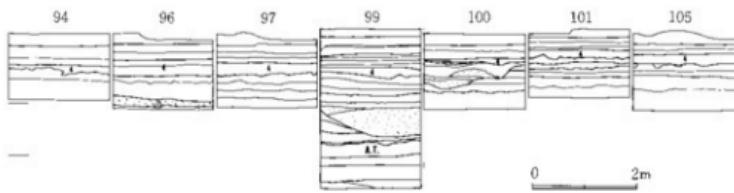
小畠丘陵と南山丘陵との間の低地で、水田地帯である。第2章でもふれたとおり、揖保川本流及び支流性の堆積物から埋め残され、かつては非常に低湿な地帯であったところである。現状では、揖保郡全域に亘る条里型地割を明瞭に残している。当地区では全部で12箇所の試掘坑を設定した（No.94～102）。



第68図 小畠地区的調査区



第69図 N地区グリッド配置図



第70図 N地区の土層

N地区の土層

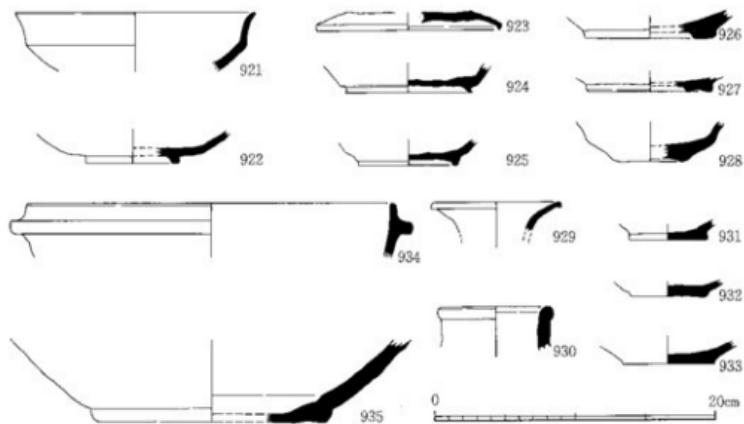
比較的安定した湿地帯の状態が続いたために、谷を横断する方向でもあまり極端な堆積状況の変化はみられない。

基本的には表土下70cmまではⅢ耕土層が認められる。第4層の暗灰色砂混じりシルト層に至って遺物の包含が認められるが、No94・102に特に顕著で、奈良～平安時代の遺物を中心としている。

それ以下も基本的にはシルトを中心とした堆積物に覆われているが、No96・99・100などではこれらの堆積の合間に洪水性の堆積物である砂層の堆積が認められ、湿地帯の中央部を河道がときおりその流路を変えながら流れていた様子がうかがえる。この地区的層序で注目されるのは、No99の地表下2.2mで検出された火山灰層である。厚さ25cmで、分析の結果、AT火山灰層であることが判明した。⁽³⁾

注

(3) 群馬大学の新井房夫氏に分析していただいた。



第71図 N地区出土の遺物

N地区出土遺物

須恵器（921～925・929・931～933）

921・922は金属器を模倣した形態の柄、いわゆる稜樅である。丸みを帯びた底部から途中に明瞭な稜線を持ち、外上方へ反り気味に口縁部を作る。口径17cm。922の底部は、やや平べったい底部に直径6.5cm、高さ0.45cmの輪高台を付ける。両者ともに丁寧な作りである。923蓋。天井部はヘラ切りで平坦にし、口縁端部を屈曲させるタイプ。924・925杯B。高台部のしっかりした924に対して、925は高台部と体部との境が明瞭でない。929壺。小型の壺の口縁部で、外方に大きく開く点に特徴がある。931～933椀。糸切り底の椀で、931は底部がやや突出し、平高台をなす。

M地区

幼稚園の敷地にあたり調査対象としていない。しかし工事完了後に崖面の黒色土中から土師器片が検出されるなど付近に遺跡の存在が予想された。地形から判断すると、この遺物包含層は谷の埋土で、遺跡は谷のより奥、すなわち北東側にあるものと思われる。

L地区

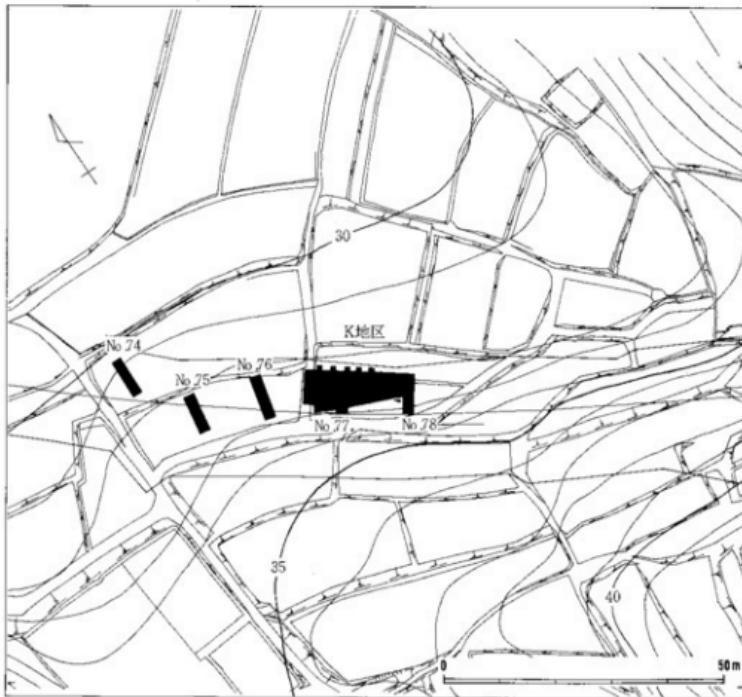
丘陵頂部に41m×2mのトレンチを設定したが、遺構・遺物は確認できなかった。

K地区

丘陵斜面から谷にあたる。丘陵斜面部を中心に5箇所のトレンチ調査を実施したところ、No.77および78で遺物包含層と地山を整形した建物遺構を認め、地名をとって小畠十郎巖谷遺跡として全面調査を実施した。これについては次節で詳しく報告する。

J地区

小畠地区最北の尾根上である。古墳状の隆起が認められたためトレンチ調査した。以外なことに表土下には水田土壤様の土が括がり、土器や瓦の細片が混入していた。この土からは明らかに運ばれたものと判断できる。古墳についてはまったく認められなかった。



第72図 N地区的地形と調査区

第2節 小畠十郎殿谷遺跡の調査

K地区のNa77・78トレンチで遺物包含層と地山を整形した建物遺構を認めたため全面調査を実施した。遺構は調査区北方の路線外に拡がるよう、ほぼ小畠十郎殿谷の範囲にあたるものと思われる。このため小畠十郎殿谷遺跡と呼称することにする。

立地

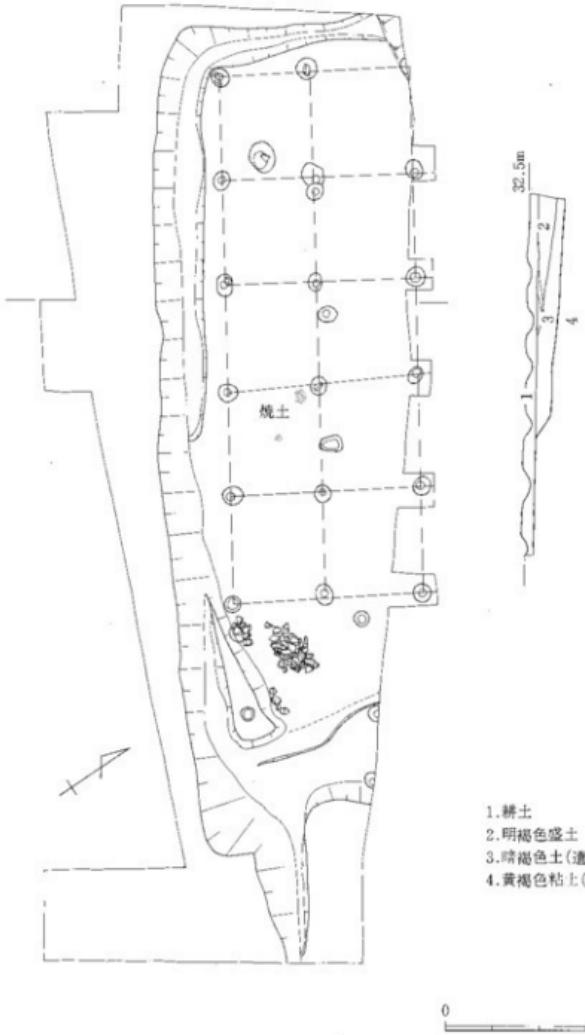
小畠の丘陵から北向きに開けた谷に向かった比較的緩傾斜な斜面地に立地する。現状では開墾が進み、丘陵上は畑に、調査区から下方にかけては水田として利用されている。

遺構

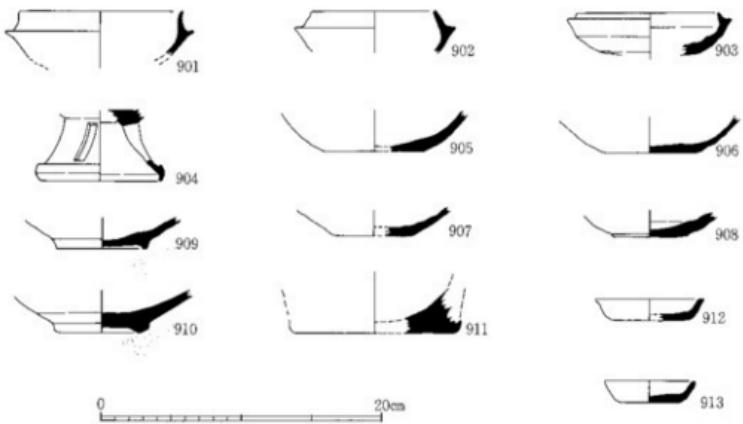
東北方向に傾斜する斜面を8mほどの幅に削り出して平坦面を造っている。後世の開墾で旧地形がかなり削平されているためにどの程度の深さを掘削したのかは不明であるが、残存部での高さは35cmあり、およそ50cm程は掘り下げているものと思われる。

遺物包含層は、この平坦面を埋めるように、斜面上方から下方にかけて傾斜しながら40cmの厚さに堆積している。層中の遺物の年代は、後に述べるように古墳時代後期と平安時代末の2時期に分かれているが、前者は斜面上方からの流れ込みによる二次堆積と考えられるため、遺構の年代は平安時代末と考えてよからう。

この平坦面の北西側いっぱいによせて掘立柱建物跡が検出された。桁行は5間だが梁行は2間分は確認できるものの、柱穴がさらに調査区外に伸びることが予想されるた断定できないが地形から判断すると3間であろう。したがって5間×3間の總柱の掘立柱建物か想定される（建物1）。柱間は桁行で2.2m、梁行で1.9~2.2mである。柱穴は直径40cmで深さは40cm程度に掘られている。柱痕の認められるものから判断すると柱の太さは20cm程度と、あまり太いものではない。一部の柱穴のなかには柱の根固めのための石が埋められたものが認められる。建物の南西から北西側にかけては幅50cm、深さ数cmの排水溝が巡っている。柱穴には切り合ひ関係が認められるため建物の建て替えが考えられる（建物2）。建物1の床面に相当する部分には径40cmと60cmの2箇所の焼土面が認められる。どちらも、周縁部が赤く焼け、かなりの高温で焼けているようである。これらの焼土面がどちらの建物に伴うものかは判断しがたい。建物1の東南部では集石遺構が検出された。50個前後の頭大の石を、1.5×0.8mの範囲に30cm程の高さに積み上げている。この集石の用途、あるいは積み上げた目的については全くわからない。



第73図 捩立柱遺物跡



第74図 K地区出土の土器

出土遺物

すべて包含層からの出土である。当遺跡の建物に伴う時期の遺物のほかに、古墳時代後期の遺物がかなり混入している。

古墳時代の土器（901～904）901～903は杯。たちあがり部の高いものから、短く内方へ突出するものまである。904短脚一段透かしの高杯脚部。以上、古墳時代の土器は5世紀末から7世紀初頭に至る。

古代末～中世初頭の土器（905～913）905～908は須恵器柄。底部糸切りで、相生窯址群揖西地区的竹原窯の製品である。⁽⁴⁾

注

(4) 森内秀造氏の御教示による。

第6章 遺構と遺物の検討

前章まででは発掘調査の成果について、事実関係を主に報告してきた。本章では、特に小犬丸遺跡について調査成果に検討を加えようと思う。

すでに報告したとおり小犬丸遺跡では多量の出土遺物のなかに、「驛」あるいは「布勢」銘墨書土器、「布勢驛」木簡があり、これまでに指摘されていた小犬丸遺跡=布勢驛家説を裏付けることとなつたが、これらの出土によって小犬丸遺跡が布勢驛家であるということを証明できただろうか。そのためには、調査成果をさまざまな側面から分析することによって遺跡の年代と性格を明らかにする必要があるだろう。それとともに問題点も指摘しつつ検討していきたい。

第1節 出土遺物の検討

第3章第3節では小犬丸遺跡出土の遺物についてその内容について提示したにすぎない。本節では、出土遺物のうち土器・瓦・木器についてその年代と特色を検討し、遺跡の性格を明らかにするためのてがかりとしたい。

1. 土器

表5は出土土器のほとんどを占める須恵器と土師器の器種構成を示したものである。まず、ここに示した点数の計数方法は、基本的には接合可能な資料は接合した後に点数をすべて数える方法をとった。具体的には次のとおりである。杯A・Bは底部の高台の有無を基準に分類したが、口縁部のみの小片でどちらか判断不能のものは少量でもあったので除外した。蓋は口縁部を残すものの点数を、椀については底部片と口縁部片のうち数の多かった底部片の数をとった。稜椀については、特徴的な器形でもあり、口縁部と底部を、接合できないことを確認して、両方を合わせて数えた。皿は口縁部の破片を数えた。高杯は杯部・脚柱部・脚台部のうち別個体であることが確認できた脚柱部と脚台部の合計を、壺は口縁部と底部のうち量の多かった口縁部の点数を、鉢・甕・鍋は口縁部の破片数を数えた。

さて、この表をみれば明らかなとおり、全体では須恵器と土師器の個体数はほぼ均衡しているが、貯蔵形態では須恵器が、煮沸形態では土師器が使用されている。残された食膳形態、すなわち食器の比率は、須恵器82.6%、土師器17.4%と須恵器が大勢を占める。むろん年代差を無視して一括して扱っているため、細かく見れば時期別に若干の構成比の変化はあるだろうが、須恵器の優勢はかわりない。

表5 小犬丸遺跡出土品の構成

	器種	須 惠 器 (%)	土 師 器 (%)	計 (%)
食膳具	杯 A	1 5 3 (31.1)	3 1 (6.3)	
	杯 B	7 8 (15.8)	2 (0.4)	
	椀	3 5 (7.8)	2 0 (4.1)	
	稜 梗	1 3 (2.6)	0	
	蓋	6 6 (13.4)	3 (0.6)	5 0 1 (50.8)
	皿	4 3 (8.7)	1 7 (3.4)	
	高 杯	2 0 (4.1)	4 (0.8)	
	鉢	1 4 (2.8)	2 (0.4)	
計		4 2 2 (85.6)	7 9 (16.0)	
貯藏具	壺	5 4 (11.0)	0	
	甕	1 7 (3.4)	0	
	計	7 1 (14.4)	0	7 1 (7.2)
煮炊具	甕	0	4 0 0 (81.0)	
	鍋	0	1 5 (3.0)	
	計	0	4 1 5 (84.0)	4 1 5 (42.0)
総 計		4 9 3 (49.9)	4 9 4 (50.1)	9 8 7 (100)

このことは、研究のすんでいる中央官衙遺跡での土師器が優勢となる傾向とは全く逆の結果を示していて、背景に、西播磨地方の一大生産地を後にひかえている当遺跡の特異性が現れているといえよう。

器種構成

それでは須恵器と土師器について器種構成の特徴をみていこう。

須恵器の器種構成 須恵器では、食膳具が全体の85.6%と、圧倒的多数を占めている。器種別にみると、杯Aが31.1%と最も多く、次いで杯Bが15.8%、蓋が13.4%とはば対応関係にある。その他、壺が11%を数える他は1割を切っている。これらのうち、椀と鉢についてはやや年代が下がるものであるため、年代を限れば杯類の比率はさらに高くなるであろう。

土師器の器種構成 土師器では、食膳具が16%、煮炊具が84%と須恵器とは全く逆の構成比を示している。このうち甕は総数のうち81%を占めているが、破損状態がひどいので、実際の個体数で比較するとやや比率が低下することが予想されるが、主体となることにはかわりなかろう。

高径比と年代

次に、食器類について須恵器・土師器ごとに法量分布をみておこう。そのために杯・椀・

皿類についてそれぞれの口径と器高の比率をグラフに示した。

第75図は須恵器の杯・椀・皿の口径と器高比を示したものである。

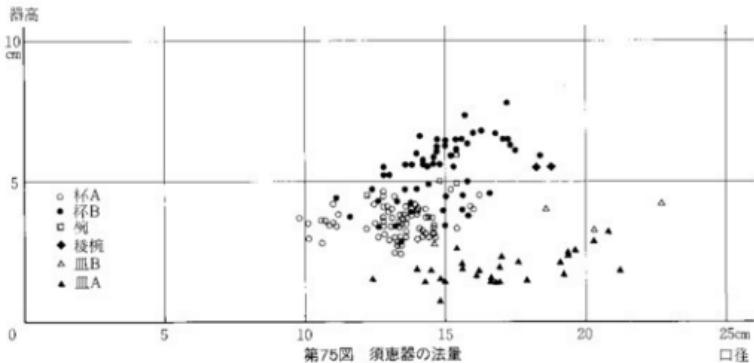
これをみると、杯Aは口径10~11cm、器高3~4cmに集まるA群と、口径15cm以上のB群、口径12~15cm、器高2.5~4.5cmに集まるC群とに分かれる。A群を構成する土器は大部分が口径が小さく、年代的にも8世紀初頭以前に位置づけるられるもので、B群については、口径が大きく丁寧な作りの8世紀中頃から後半に位置づけるられる。しかし、C群については年代的には9世紀初頭から12世紀にわたる土器が含まれており、杯Aの用途と形態・大きさが確定してきたことを示しているといえよう。

杯Aに比べると杯Bは大きさのばらつきが大きい。特に器高を取り出してみると、5cmを下回るA群と5cmを越えるB群とに分けられよう。A群は口径のわりに器高が低く8世紀代と考えられるものが中心で、B群は器高が高く楕化傾向の進んだ9世紀代と考えられるものが中心となっている。径高比でみれば、前者が22~35であるのに対し、後者は40前後に集中してくる傾向がある。

椀については、杯B消滅後のヘラ切りおよび糸切り底をもつ10世紀以降のものとしたが、口径15cm前後、器高5~6cmに集まっている。

稜椀は、口縁部が大きく開く特徴的な器形のためか、口径18~19cm、器高5~6cmに集中するようである。他遺跡出土例と比較してもごく一般的な大きさであり、稜椀の規格性と製作期間の短さを示しているものといえよう。

皿については、高台が付く皿Bは口径が大きく器高も高いことは明らかだが、皿Aはともかく口径の差が最小14.6cm、最大23.7cmと非常に大きい。この差が年代差によるものか、規格差によるものかは判然としない。



土師器は須恵器ほど豊富ではなく、出土数が限られることは、先に記述した通りである。須恵器で出た年代幅に対応して資料が正確に測れない部分もあると思われる。

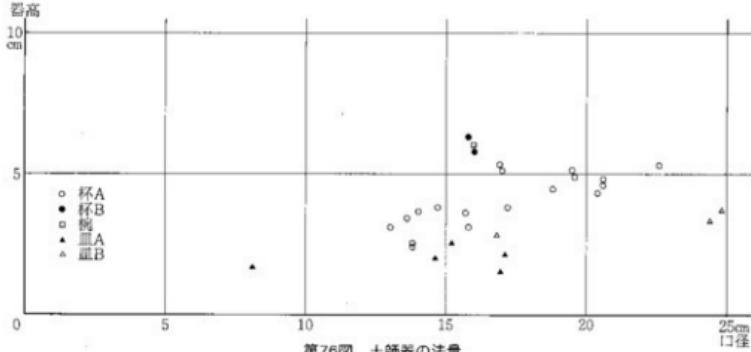
第76図は土器法量図である。杯Aはこれで見ると先に分類した通り大きく2つのグループに別れることがわかる。第1グループは口径13~15cm前後のもので器高3~4cm前後のものである。第2グループは口径17cm~23cmのもので器高は5cm前後のグループである。残りの食膳具は個体数が少なく詳細は不明である。杯だけに限ってみると、平城京VI~VII期の皿A IIに等しい値を示している。杯の大きいものが杯A IIに相当する。

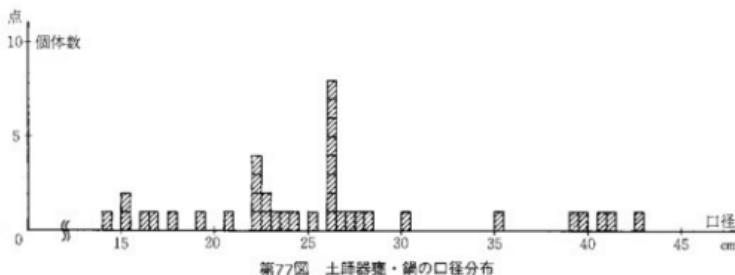
そして、この杯類の一部と椀のなかには9世紀後半から10世紀のものもふくまれることは前述した通りである。甕は8世紀~10世紀の間に含まれると考えられるが、出土遺物から変化を捕らえる事は出来なかった。このようなことから、土師器の時期は、8世紀後半から9世紀前半に中心があり、少量ながら10世紀代のものも出土していると考えられる。

次に表4は、出土した土器の器種構成表である。ここでは時期差を無視して個体数を数えたものであるため問題がないわけではないが大きな傾向は出ていると考えられる。

土師器では、貯蔵具と煮炊具が出土している。杯・皿などの食膳具16%に対して、甕・鍋などの煮炊具が全体の84%を占めている。煮炊具が圧倒的に多いが、出土土器全体でも42%を占めている。もちろん、個体が大きく破片になる点数もかなりな数に昇るため割合が正確には少し少ないと考えられる。しかし、そのことを除いても出土した遺物の中で大きなウェイトを占めることには疑いないであろう。

古代集落や官衙関係の遺跡からの出土遺物の構成を比較して遺跡の特徴を分析した宇野隆夫によれば、公的な場所ほど煮炊具が少なく食膳具が多い、そして器種が豊富な傾向があるという⁽³⁾。今回は煮炊具の比率が高い傾向があった。しかし反対に、食膳具の器種構成は杯





Aに2タイプあることや鉄鉢を模倣したものが出土する他、少ないながらもほとんどの器種が揃っていると考えられ、小犬丸遺跡が官衙的な傾向を持っていることを示していた。この他、調査地点が井戸近く遺跡の周辺部であることを考えると、遺跡全体の特徴というよりもこの調査地点の特色と考えられる。

2. いわゆる稜椀について

稜椀とは、佐波理椀を模倣した形態の須恵器の俗称で、その形態は、ハの字形に踏ん張った張り付け高台を持ち、体部中央あたりが屈曲して稜をなす特長からこう呼ばれている。稜椀の出土地はこれまでに確認し得た遺跡で、消費地が22箇所、窯跡が8箇所、総数30遺跡を数える。出土した稜椀は形態の特徴により、次のとおりの分類を試みることができる。

A類 稜椀が佐波理椀模倣土器であるという点で、より忠実なタイプで、陶邑古窯跡出土例⁽⁶⁾のように、体部がゆるやかにS字を描くものをI種、平城京跡出土例⁽⁷⁾のように、体部に若干の稜が認められるものをII種とした。A I種は、京都府加茂町西門窯跡⁽⁸⁾、姫路市本町遺跡⁽⁹⁾に出土例がある。また、西門窯ではA II種も出土している。

B類 体部半ばで屈曲し稜をなすタイプ。口縁端部が大きく外方へ屈曲する点が特徴である。姫路市本町遺跡、同市上原田遺跡⁽¹⁰⁾、明石市吉田南遺跡⁽¹¹⁾、加古川市札馬古窯跡群⁽¹²⁾、同市西ノ池古窯址群⁽¹³⁾などに出土例がある。小犬丸遺跡の出土例もすべてこのタイプに属する。

C類 B類との形態上の違いはないが、口縁端部内面に凹線状の溝を持つことを特徴とする。長岡京跡⁽¹⁴⁾、但馬国府推定地である兵庫県日高町深田遺跡⁽¹⁵⁾、舞鶴市志高遺跡⁽¹⁶⁾、兵庫県市島町上牧窯跡群⁽¹⁷⁾、京都府夜久野町木古窯跡群⁽¹⁸⁾などの出土例がある。

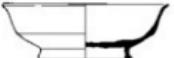
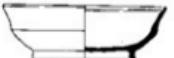
D類 体部の稜が強調され段をなすもの。岡山県山陽町門前池遺跡⁽¹⁹⁾、同勝央町勝間田・平遺跡⁽²⁰⁾などで出土例がある。

以上の分類を表にまとめたものが表6である。

表6にあげた出土遺跡は、その分布を線で結ぶことができる。それは、律令体制下の古代山陽道および山陰道とその支路であり、道沿いに点在している。これらの遺跡の性格をみると

表6 稲焼分類表

(小川真理子作成)

分類	形 肢	特 徴	出 土 遺 跡
A	 I種	底部からゆるやかに内湾して口縁部に至り口縁端部で更に外反してS字状をなす	陶邑古窯群 西脇窯跡 平城京跡 本町遺跡
	 II種	体部に若干の棱をもつ	
B		体部半ばで大きく内方に屈曲して棱をなし、わずかに外反し、さらに口縁部で大きく外方へ屈曲させている。縁部は丸くおさめる。	本町遺跡、小大九遺跡、上原田遺跡、丁・柳ヶ瀬遺跡 ⁽²¹⁾ 、安曇中学校前東・西遺跡 ⁽²²⁾ 、吉田南遺跡 ⁽²³⁾ 、家原・空ノ元遺跡 ⁽²⁴⁾ 、ハゼノ木遺跡 ⁽²⁵⁾ 、札馬古窯跡群、西ノ池古窯跡群
C		体部は屈曲をなしして棱を持ち、口縁部は外反して縁部に至る。口縁部の内面に凹縦状の溝を持つ。	但馬国府推定地、西水ノ部遺跡 ⁽²⁶⁾ 、長岡京跡、寛内寺遺跡 ⁽²⁷⁾ 、青野南遺跡 ⁽²⁸⁾ 、羅尾太田地遺跡 ⁽²⁹⁾ 、志高遺跡、上牧古窯跡群、木古窯跡群、青野ダム、落合窯、姫窯
D		底部から外方へまっすぐには体部へのび、口縁部はそれに貼り付けられたように強調された棱をもつ	門前池遺跡、勝間田・平塚跡、下市瀬遺跡 ⁽³⁰⁾

と、共通性が認められる。それは国府や郡衙、あるいは駅家などの官衙遺跡に関連するということである。たとえば、播磨国府と推定される本町遺跡、明石郡衙に推定される吉田南遺跡、布勢驛家と考えられる当遺跡など、22の消費地遺跡のうち14の遺跡が何らかの官衙遺跡と推定されている。また、その他の遺跡についても、官衙的要素が認められる遺跡も多く、これらのことから、稲焼が官衙的遺跡特有の遺物であることを予測させる。次に、稲焼の形態別にその分布をみると、A類は中央行政区域タイプ、B類は播磨タイプ、C類は但馬・丹波・丹後をつなぐ山陰道タイプ、D類は現在の行政区画での岡山県タイプという特徴をみいだすことができる。これは生産地についても共通することである。さて、こうして稲焼の分類と出土遺跡の関係をみると、それぞれの形態ごとに出土地域が限定されていることに気がつく。このことは、稲焼はそれぞれの地方窯により生産され、かつそれぞれの地方官衙に供給されたということを示している。これは地方行政区画単位ごとで生産と供給の連関がなされていたことが推測されよう。

具体的には、陶邑窯などA類に含まれる窯は平城京・恭仁宮に供給するための官窯と考えられるし、札馬・西ノ池窯などB類出土窯は、「延喜式」主計にみえる陶器調査の一つである播磨国の官窯と考えられるが、今のところ、B類の稲焼に関しては平城京あるいは播磨国外では認められない。また、C類の末・上牧窯は丹波国の官窯にあてられることが可能であるし、D類については、今のところ窯跡は発見されていないものの、その分布のかたよりから、美作・備前といった国単位で焼かれていた可能性はきわめて高いといえよう。

3. 墨書き土器について

第3章第3節で小丸遺跡出土の墨書き土器について報告したが、ここではその傾向と内容について若干の検討を加えておきたい。事実報告の際にもふれたが、当遺跡では、出土土器中に占める墨書き土器の比率が非常に高いことが指摘できる。このことが、当遺跡が布勢驛家という官衙関連の遺跡であることのひとつの傍証となるだろう。

さて、墨書き土器の年代であるが、これは、墨書きの内容よりもむしろその土器の形式が年代の判断材料となろう。土器形式からみると、7世紀のものを初出とするが、これはむしろ例外的なもので、8世紀の中頃から資料が増加し、8世紀末から9世紀前半頃のものが最も多く出土している。その後、9世紀後半までものはかなり出土しているが、10世紀以降のものとなるとかなり点数が少なくなってくる。最終的には11世紀の前半で終焉している。このことは、遺跡の消長、すなわち驛家の成立と解体、ひいては律令制の衰退と期を一にしているといえよう。

次に、墨書きの内容についてみておこう。

墨書きの内容は次の4種類に分類できる。①「驛」・「三宅」や、驛家名を示す「布勢」など官衙に関する墨書き。②「大宅」「竹万」や「豊奈賀」など地名・人名墨書き。③「个」などの記号。④「律令」など祭祀に関する墨書き。

この中で①の官衙関係の墨書きと③の記号の点数が多くなっている。

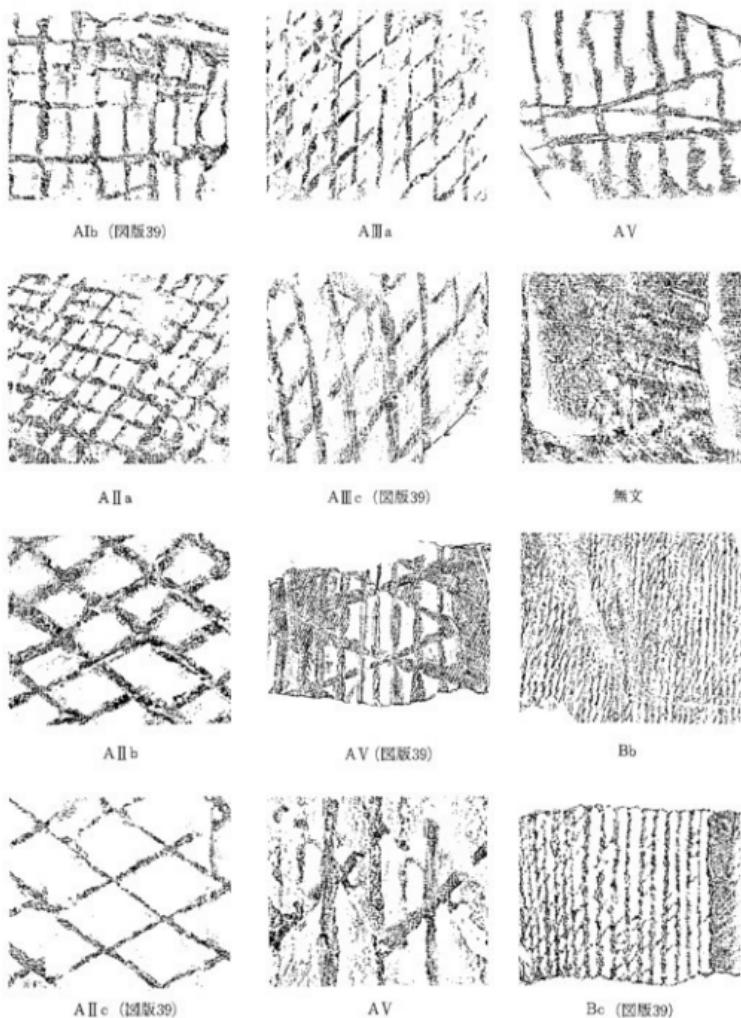
「个」記号は当遺跡では11点が出土しており、特徴的な記号となっている。この記号が本来何を意味するものはわからないが、この類例は、神戸市西区の明石郡衙に推定される吉田南遺跡で出土例があるが、「个」よりも「个」となっていて「个」記号の本来の姿を推測する手掛かりとなるかもしれない。

4. 瓦について

小丸遺跡出土の瓦のうち、ここでは平瓦と丸瓦についてその構成をみておきたい。

表7は平瓦の叩き目の分類別と丸瓦の構成比を示したものである。点数の計測方法は、資料の少なさと遺存状態の悪さもあって、破片数すべてを数える方法によった。これにより、丸瓦は225点、平瓦は333点とほぼ4対6の比率になっている。本来屋瓦は丸・平瓦をほぼ同数使用するはずだから、この比率は平瓦の割れやすさを示すものと思われる。

平瓦の叩き目は線刻によるものと縄によるものとに分かれるが、前者が7割強、後者が3割弱となっている。また、線刻叩きのA III類は全体の3分の1を占めている。これらの構成比を「小丸遺跡 I」と比較すると、上・下層瓦群やS D03など全体出土量の大部分を占める遺構群出土の平瓦の構成とほぼ一致している。このことは、当地区出土の瓦が基本的には



第78図 平瓦叩き目の各種

表7 小犬丸遺跡出土瓦の構成

丸 瓦		225		40.3%
平瓦	正格子 A I	15(4.5%)		
	斜格子 I A II	43(12.9%)		
	II(右上がり) A III	112(33.7%)	238(71.5%)	
	III(左上がり) A IV	7(2.1%)		
	正格子+斜格子 A V	20(6.0%)		59.7%
	その他の格子 A VI	41(12.3%)		
	繩目 中 B b	23(6.9%)	95(28.5%)	
大 B c		72(21.6%)		
小 計		333 (100%)		
計		558		100%

小犬丸遺跡本体出土の瓦と同一のものであることの証拠となるだろう。瓦からみるかぎり、10世紀頃までには駅館本体の破損品が当地区に破棄されていたという事実が指摘できよう。

5. 木製品について

用途不明品を除くと、ほとんどを祭祀具と容器類が占めている。井戸周辺での曲物・皿など容器類の出土は利用を示しているし、また、馬形・斎串・焼けた木片など祭祀具は水の祭祀をしめすもので、互いの相関関係が成り立っているといえよう。

馬形については、兵庫県下では日高町・姫谷・川岸・出石町砂入等の遺跡で馬形が出土しており⁽³¹⁾、特に鞍部を削り出すB II種の出土例が目立つ。小犬丸遺跡の出土品は全てこのB II種に限られているが、年代的にも限定されたものと思われ、8世紀末から9世紀前半の年代を与えておきたい。

6. 鳥形木製品について

小犬丸遺跡で出土した全長71cmの鳥形木製品は、その大きさの点で傑出したものである。そこで類例をまじえながらその年代と用途について考えてみたい。

奈良県石見遺跡出土例：全長110cm前後のものが4点出土。形態は基本的には小犬丸遺跡例に似るが、頭・胴・尾の各部をそれぞれこんもりと盛り上げて、立体感を出している点と、

背部に羽根を付けるためと思われる切り欠きを持つ点で異なっている。石野博信氏の復元によると、棒の先端に身の膨らんだ側を下にして、背の羽根を広げて飛んでいる状態を示したものだという⁽³²⁾。木製の埴輪とも言うべく、古墳の埋葬儀礼に伴い使用されたものと考えられている。高橋美久二氏によれば、京都府長岡市今里車塚古墳の笠形と同じく、埴輪と同様に古墳の周濠内に立てられたものと言う⁽³³⁾。

小犬丸遺跡出土の鳥形木製品については、すでに高橋美久二氏によってとりあげられている⁽³⁴⁾。氏によれば、駅家には原初的な鳥居があって、小犬丸遺跡の鳥形木製品も駅家の門に取り付けられていた可能性が指摘されている。

この場合、鳥形木製品が門に取り付けられ「鳥居」を形成していたかどうかはわからないが、肝心の鳥形木製品の年代が問題となろう。調査結果からは「鳥形」の年代は特定できなかつたが、共伴する遺物の年代から最低限度の年代幅として、上限が6世紀後半、下限が8世紀代と限定できる。この場合、形態的な特徴からは、6世紀前半に位置づけられる石見遺跡例は、より写実的であり、小犬丸遺跡例に先行するものと考えてよかろう。またその材質はすべてコウヤマキで作られており、これまでの木製品の例から、コウヤマキを使用する木製品が奈良時代まで下る可能性は薄いものと考えられ、これらの年代を考え併せると「鳥形木製品」の年代は6世紀後半から7世紀代のものと考えるのが妥当であろう。

また、その用途については、出土地点が小犬丸遺跡の所在する谷の最も東端に位置しており、古墳等の祭祀に使用された形跡は認められないし、特に他の遺構に伴うものでもないところから、現在も韓国に残る民俗例のように、村の入口に守り神として立てられた「ソッテ」「ダンサンシン」に似たものと考えるのが最も適当であると考える⁽³⁵⁾。

以上の遺物の検討の結果、小犬丸遺跡の年代は7世紀から12世紀にわたり、特に8世紀後半から9世紀代にその中心があることが明らかとなった。また、その性格についても、木簡・墨書き器にみる布勢釋家の一部を構成するものであることはほぼ確実といえよう。

注

- (5) 宇野隆夫「越中の国府・莊家・村落」『高井梯三郎先生喜寿記念論集 历史学と考古学』 1988
- (6) 大阪府教育委員会『陶邑I』 1976
- (7) 奈良市教育委員会『奈良市埋藏文化財調査報告書』 1982
- (8) 加茂町教育委員会『西門窯跡』 1981
- (9) 綾路市教育委員会『本町遺跡』 1984
- (10) 兵庫県教育委員会『上原田遺跡』『播但連絡有料自動車道建設にかかる埋藏文化財調査報告書II』 1980

- (11) 神戸市立考古館「吉田南遺跡」『地下にねむる神戸の歴史』1980
- (12) 加古川市教育委員会『札馬古窯跡群発掘調査報告書』1982
- (13) 西ノ池古窯跡群発掘調査団『西ノ池古窯跡群調査報告書』1979
- (14) 百瀬正恒「長岡京の土器」中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』1986
- (15) 昭和61年度に兵庫県教育委員会が調査。
- (16) 山下正・肥後弘幸「昭和60年度志高遺跡の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報 第19号』1986
- (17) 吉田昇「上牧古窯跡群」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和57年度 1985
- (18) 京都府立丹後郷土試料館「未の窯」『丹波夜久野の文化財』1976
- (19) 岡山県教育委員会「門前池遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9 1975
- (20) 河本清「勝間田・平遺跡」『岡山県史』第18巻19
- (21) 兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』1985
- (22) 兵庫県教育委員会『中国縱貫自動車建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』II 1976
- (23) 加東市教育委員会『家原・堂の本遺跡』1984
- (24) 西脇市教育委員会『ハゼノ木遺跡』1986
- (25) 兵庫県教育委員会「西木ノ部遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和57年度 1985
- (26) 池田正男「龜円寺遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度 1982
- (27) 綾部市教育委員会『綾部市文化財調査報告 第9集』1982
- (28) 大槻真純「篠尾太田地遺跡」『京都府埋蔵文化財情報 第13号』1984
- (29) 兵庫県教育委員会『青野ダム建設に伴う発掘調査報告(1)』1987
- (30) 岡山県教育委員会『中国縱貫自動車建設に伴う発掘調査1』1973
- (31) 金子裕之編『律令祭祀遺物集成』1988
- (32) 石野博信「石見の鳥」「青陵」奈良県立橿原考古学研究所彙報58 1985
- (33) 高橋美久二「長岡京市今里車塚古墳の笠形木製品」『山城郷土資料館報』3 1985
同 「木製の埴輪再論」『京都考古』49 1988
- (34) 高橋美久二「駅家の門」『京都府埋蔵文化財論叢』第1集 1987
- (35) 立平 進「死者の鳥」『考古学ジャーナル』166 1979
金闇 忍「神を招く鳥」『考古学論考』1982

第2節 遺構の検討

すでに出土遺物については前節で検討してきた。そこで、本節では小犬丸遺跡の遺構についてのその性格と年代について検討しておきたい。

1. 立地について

小犬丸遺跡の調査を通じて得た土層のデータをもとに、A地区の地形を分析しておきたい。

第79図にA地区周辺の地形分類を示した。東方の琴坂から流れ出た谷は小犬丸遺跡の乗る扇状地にぶつかり南へと流れ落ちる。現状では単純な谷間にみえるが、実は、A地区の南よりの地点では埋没微高地が確認できる。したがって、第79図に網目で示した範囲に弥生時代中期以後の黒色シルトが堆積している。このシルト層の拡がる範囲が初期の水田可耕地帯である。

A1区はこの谷と山が迫り、西に向かって扇状地形が広がっていく地点にあたる。



第79図 A地区周辺の微地形

2. 道路状遺構について

今回の調査の最も大きな成果のひとつに道路状遺構の検出がある。すでに第3章でも述べたが、この遺構は次のような理由で古代山陽道の道路敷ではないかと考えた。

- ①6~7mと一定の幅を持ち、山側には側溝を持つ平坦面が調査区内35mを越えて続くこと
- ②古代山陽道を通すとすれば、北側の急斜面と南側の湿地との間のこの位置しかないこと。
- ③調査地の東方山裾の現地表面に直線に延びる道路状の痕跡が認められ、ちょうど遺構検出地点につながること。

④旧県道がほぼ同じ位置を通って駅家推定地の南面を通過していること。

近年全国各地で道路遺構の発見例が報告されているが、小犬丸遺跡の道路幅については、高槻市駅家川西遺跡での山陽道と考えられている検出例の8m、岡山県備中国分尼寺前で検

出された山陽道の7mに近く、大路である山陽道にふさわしいものである。この推定が正しければ、大変重要な発見となるわけだが、それとともに、いくつかの問題点を提示することになる。それは、次に述べる点である。

まず第1は、道路遺構が廃絶した後に掘立柱建物が建てられており、その年代が11世紀代に求められることである。すなわち、本来律令国家の基幹道路である山陽道が11世紀代にはその命脈を断っているのである。

第2には、第1のような理由で山陽道が11世紀代には廃絶したとすると、布勢驛家本体と考えられる地区の調査で、瓦葺の建物群が12世紀末ないしは13世紀初頭までは使用されていたことが明らかにされており、道路が廃絶しているのに駅家が機能している状態が百数十年にわたって続いているという矛盾が生じる。

これらの点に関して、吉本昌弘氏は、龍野市内各所に残る大道の地名をつないだ山陽道のバイパスを考え、古代末期に道路が移動し、後の筑紫大道がこれにあたるとの考えを示した。
(吉本1986)

また、小犬丸保の成立とも関連することだが、駅家の機能が停止したのちに、その施設を利用して他の機関が設置されたという考え方もなされている。

いずれにせよ、この遺構が道路であるという確実な証拠がつかめない以上、今後小犬丸遺跡の別の地点で同様の道路遺構が確認されることにより、その裏付けがなされなければ全ての論はなりたたない。今後の周辺地区的調査に期待したい。

3. 井戸と祭祀

井戸1の立地する地点は、小犬丸遺跡の立地する層状地の最も東よりの肩端部に位置し、旧地形でも小谷が認められ、調査中にも絶えることなくこんこんと泉が湧いていた。遺構は現状では10世紀代を通じて使用されていたことが明らかとなったが、すでに前代から使用されていたことは疑いない。

井戸の周辺では多量の墨書き土器が出土したが、そのなかに数点みられる、「布勢井邊」あるいは「布世井マ」はこの井戸との関係において興味深い。この井戸を司った駅戸が「布勢井邊家」であった可能性も考えられよう。

また、井戸周辺では多量の木製品が出土しているが、なかでも、多量に出土した斎串と馬形および焼けた木片は井戸周辺での祭祀を考える際に注目できる。井戸の内部では上下2面にわたって祭祀のあとが認められたが、とくに下層では律令のくずし字とおもわれる墨書き土器が埋められており、呪符木簡の「急々如律令」に通じるもので、井戸水が涸れた際の祭祀に伴うものと考えられる。

4. 遺構の変遷

これまでに小犬丸遺跡の遺構の検討を行ってきたが、最後に検討を通じて得た遺構の年代とともに調査地点での小犬丸遺跡の変遷をたどっておく。

0期（7世紀以前）

井戸1の地点ではすでに湧水が利用され、湿地帯では谷間の一部では弥生時代から水田耕作が行われていた。

I期（8世紀前半前後）

山裾部に7m幅の道路（古代山陽道）が造られる。

II期（8世紀後半～10世紀頃）

道路は断続使用されており、湿地部の湧水地点に井戸が作られ、南西部には集石遺構が形成される

III期（11～12世紀）

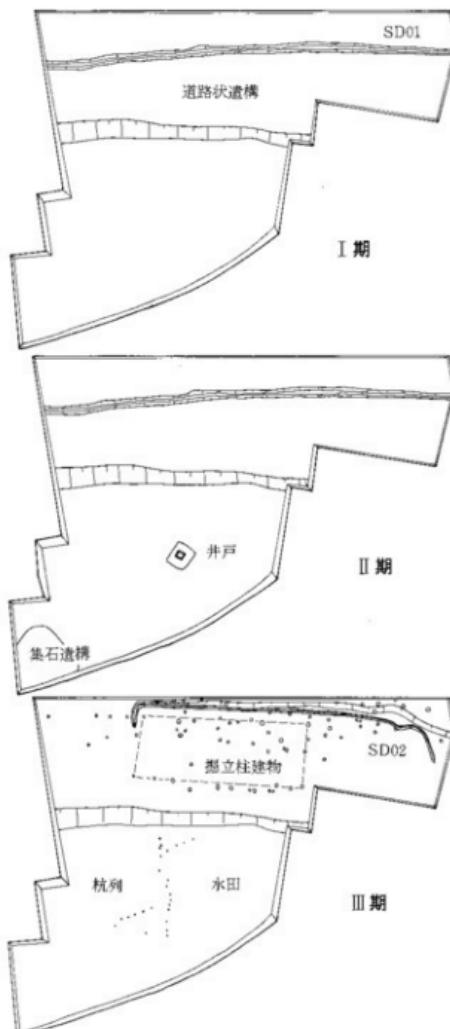
道路部は埋まり、新たに掘立柱建物が建てられる。湿地帯では、井戸が廃絶され、全域が水田となる。

IV期（13世紀～）

掘立柱建物跡が検出された地点まで水田域が拡大する。

V期（近世）

山裾部まで開墾が進み、調査区北方へ水田が拡大する。



第80図 遺跡の変遷

第7章 おわりに

これまでに、出土遺物と遺構の検討を通じて、今回的小犬丸遺跡の発掘調査の成果と問題点について検討を加えてきた。本報告を終えるにあたって、今一度調査成果をまとめ、今後への課題を述べておきたい。

まず、前提として昭和58年度の発掘調査の成果を「小犬丸遺跡Ⅰ」により簡単にまとめておく。

1. 遺跡の中央をほぼ東西に横断するかたちで、長さ130m、幅4mの範囲を調査。
2. 東西幅6m以上で梁行2間の南北に長い瓦葺建物を2棟以上検出。掘立柱建物から礎石建物への建て替えと規模の縮小が認められた。
3. 軒平瓦の下面にベンガラによる朱線がついたものが10点と漆喰片がみつかっており、建物は「瓦葺粉壁」で柱が朱塗りされていたことがわかった。
4. 中心となる瓦葺建物は東西幅85mの内側におさまり、築地・側溝に囲まれた官衙域を復元できる。
5. 大量の瓦とともに8~12世紀代の綠釉陶器、越州窯青磁、水晶玉などが出土。小犬丸遺跡が布勢駅家である可能性が強まるとともに、遺跡が奈良時代には成立、10世紀代には建物が建て替えられ、12世紀代には廃絶したことが明らかとなった。
6. 中心施設（駅館に推定）の外方に倉や雜舎群などの付随施設の存在が予想される。

次に今回の調査結果をまとめておく。

1. 今回の調査地は、駅館推定範囲の東辺から東へ100mの地点で、遺跡の立地する扇状地の東端部と、山地、谷との接点にある。
2. 「布勢驛」木簡や、「驛」「布勢」銘墨書き土器の出土により小犬丸遺跡が布勢駅家であることがほぼ確定される。
3. 出土遺物は、食器類を中心とした多量の須恵器・土師器の内に多数の墨書き土器を含んでおり、官衙的色彩の強いものであるが、同時に生活奥のする遺物群でもある。
4. 出土した瓦の構成は、小犬丸遺跡の中心部の瓦葺建物群のものとほぼ一致する。出土遺物の年代は、7世紀後半~12世紀におよぶが、特に8世紀後半から10世紀代のものが中心である。
5. 幅7mの道路状遺構を検出。11世紀代には掘立柱建物が建つ。
6. 木組、石囲いの井戸を検出。馬形・斎串や焼けた木片などの祭祀遺物が周囲から多量に

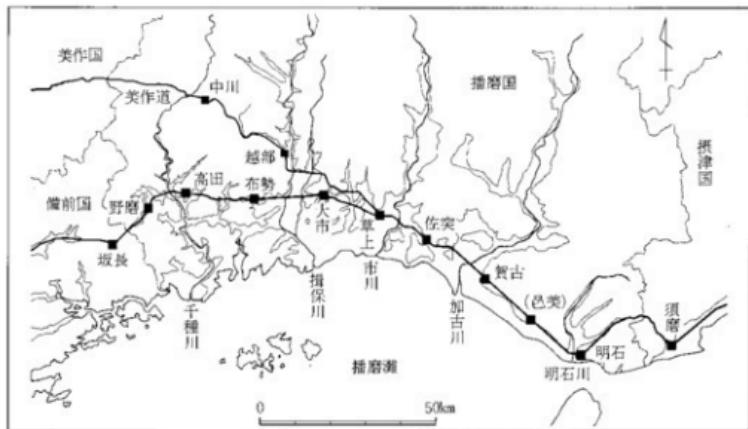
出土。また、井戸にちなんだ墨書きが多いところから、駅家のなかでも最も重要な井戸であった可能性が高い。

以上の発掘調査の成果を合わせて考えると、結論として、小犬丸遺跡が布勢驛家であるという考え方には立証されたといってよいだろう。また、駅家遺跡の構成要素の一端を知ることができたことは意義深い。しかし、今回の調査ではまだ明らかにできなかった問題が数多く残っている。それは、次のような問題点である。

まず第1に、駅家はいつ成立したかということである。今回の調査で出土した遺物は7世紀末から8世紀初頭にかけてのものが断続性のある資料としてはもっとも古いものである。また、文字資料としては、173の杯Bの「驛」銘墨書きが8世紀半ばまでは遡れる資料と考えられるので、駅家の成立はそれに先行するものと考えられる。

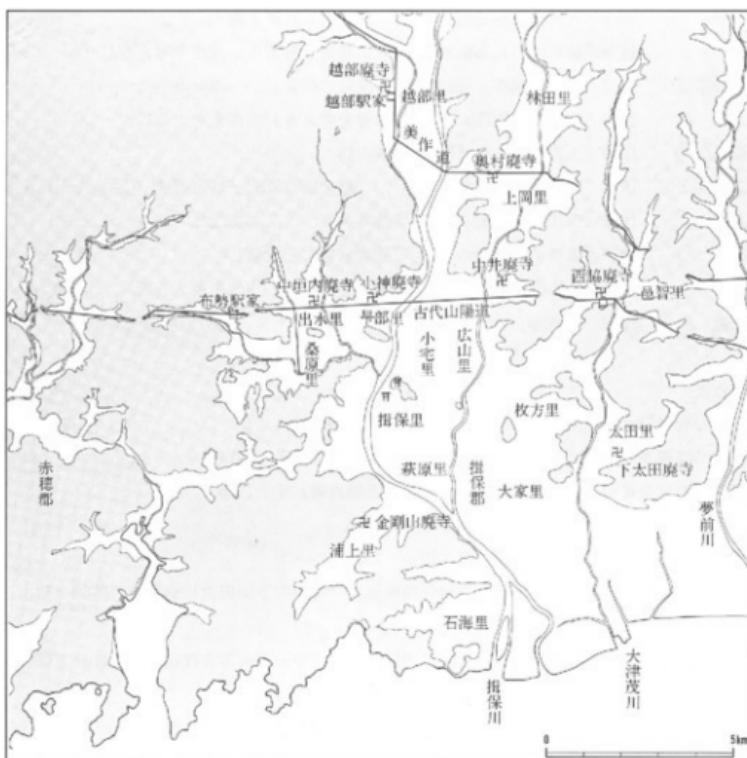
第2に、瓦葺建物はいつ建てられたかということである。今里幾次氏は古大内式軒瓦の年代を形式的に8世紀末から9世紀初頭のものと考えられているが、年代を遡らせる考え方もあり国分寺建立の前後の8世紀中頃までは遡る可能性を持っているのではないだろうか。

第3に、駅家はいつ廃絶したかということである。このことは小犬丸保と駅家の関係にも関連してくる。



第81図 播磨国の古代官道と駅家

以上の問題点を解決するためには、駅家遺跡の実体を解明するための総合的な調査がのぞまれるところだが、現在、龍野市教育委員会が中心になって小丸遺跡の範囲とその構造を確かめるための調査が継続的に実施されており、その成果が期待されるとともに、今後も他の駅家遺跡をも含めた、広範な調査が実施されることを期待したい。



第82図 古代の指保川流域

参考文献

本文中でふれたもの以外に以下の文献を参照した。

論文

- 今里幾次 1974 「山陽道播磨国の瓦葺駅家」『兵庫県の歴史』12
〃 1978 「古代の駅制と布勢駅家」『龍野市史』第1巻
〃 1978 「播磨国の瓦葺駅家」『古代山陽道を考える』古代を考える17
鎌谷木三次 1942 「小犬丸廃寺」『播磨上代寺院址の研究』
木下 良 1978 「山陽道の駅路」「古代山陽道を考える」古代を考える17
篠原芳秀 1980 「大宮遺跡と安那駅」「芸備』10
高橋美久二 1978 「播磨国賀古駅家について」『歴史地理研究と都市研究（上）』
〃 1982 「古代の山陽道」「考古学論考」
〃 1986 「山崎駅と駅家の構造」『長岡京古文化論叢』
〃 1978 「古代の山陽道」「古代山陽道を考える」古代を考える17
武藤 直 1978 「播磨国」「古代日本の交通路III」

報告書

- 大阪府教育委員会 「鳴上郡衙跡発掘調査概要」1971
岡山県教育委員会 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」5 1974
鳥根県教育委員会 「クテチョウ遺跡発掘調査報告書」I 1979
福岡市教育委員会 「多々良込田遺跡II」 1980
〃 「多々良込田遺跡III」 1985
府中町教育委員会・府中町重要文化財保護協会 『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』
第1集 1964
府中町教育委員会・府中町重要文化財保護協会 『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』
第2集 1963
府中町教育委員会・府中町重要文化財保護協会 『下岡田遺跡発掘調査概報』1965年度 1966
府中町教育委員会・府中町重要文化財保護協会 『下岡田遺跡発掘調査概報』1966年度 1967
府中町教育委員会 『下岡田遺跡発掘調査概報』1982年度 1983
府中町教育委員会 『下岡田遺跡発掘調査概報』1983年度 1984
府中町教育委員会 『下岡田遺跡発掘調査概報』1984年度 1985

図 版



西方上空からみた小犬丸遺跡（中央を古代山陽道が走る）



東方からみた小犬丸遺跡



南方上空からみた小犬丸遺跡



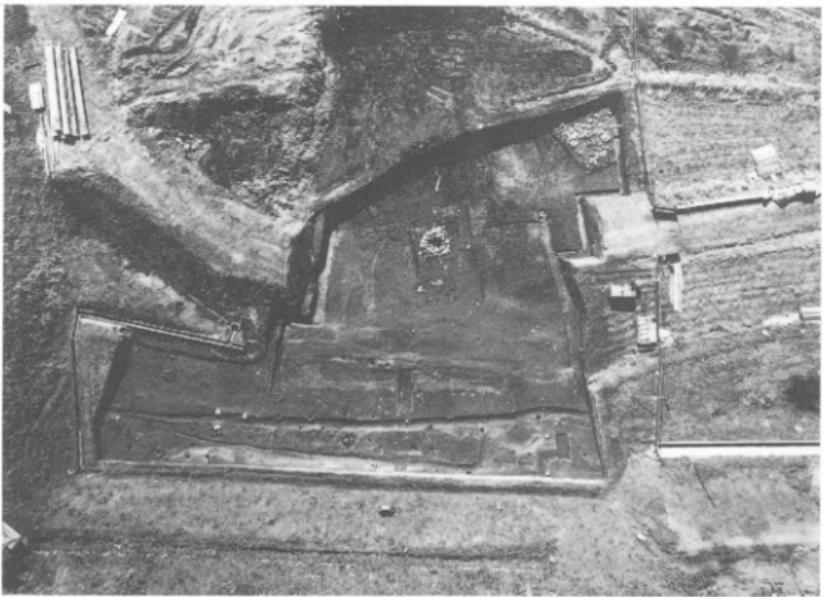
調査地全景（南から、左上が小犬丸遺跡）



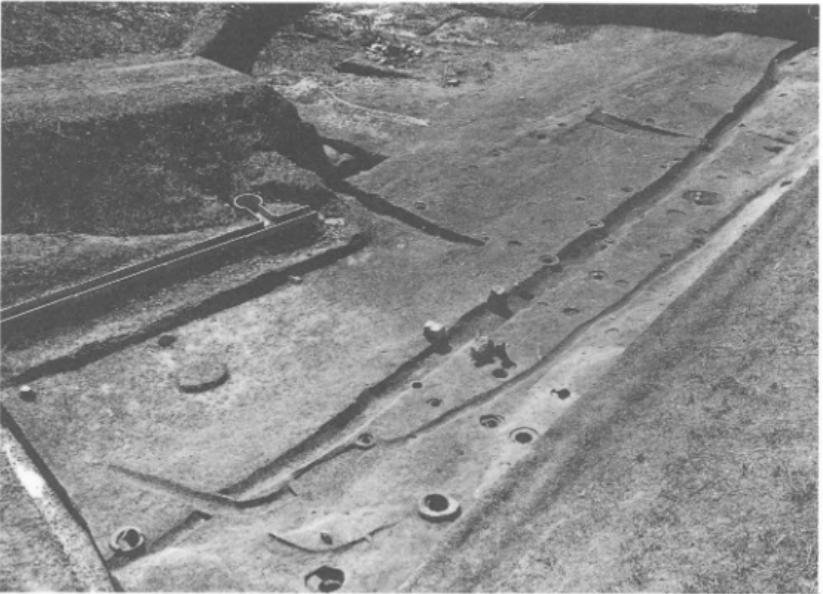
小犬丸遺跡遠景（南西から）



小犬丸遺跡全景（西から）



A1区の全景



A1区の道路状遺構



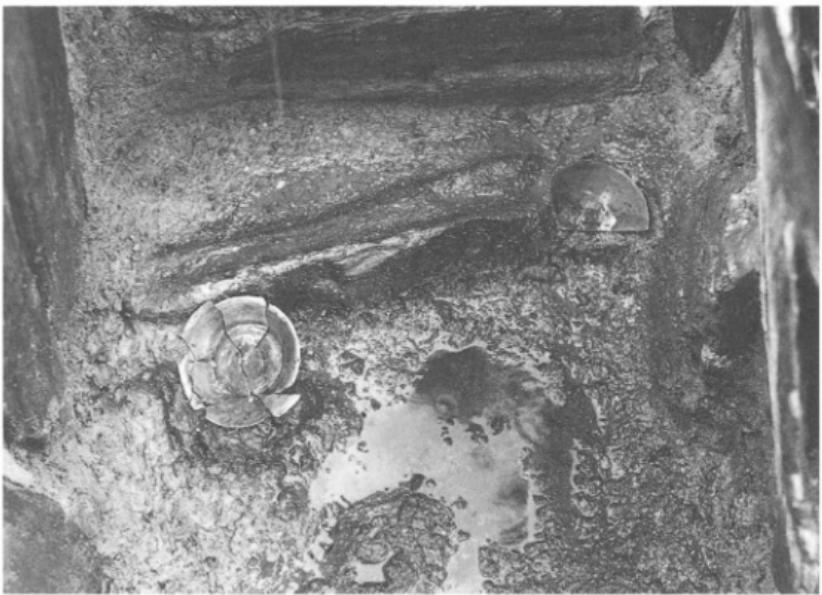
A1区井戸 1 検出状態



井戸 1



井戸 1 断ち割り状況



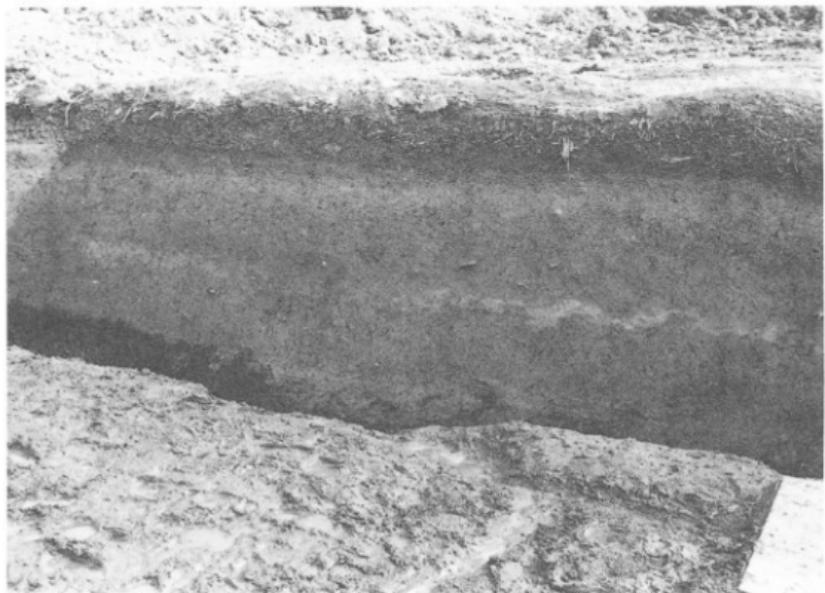
井戸 1 遺物出土状態



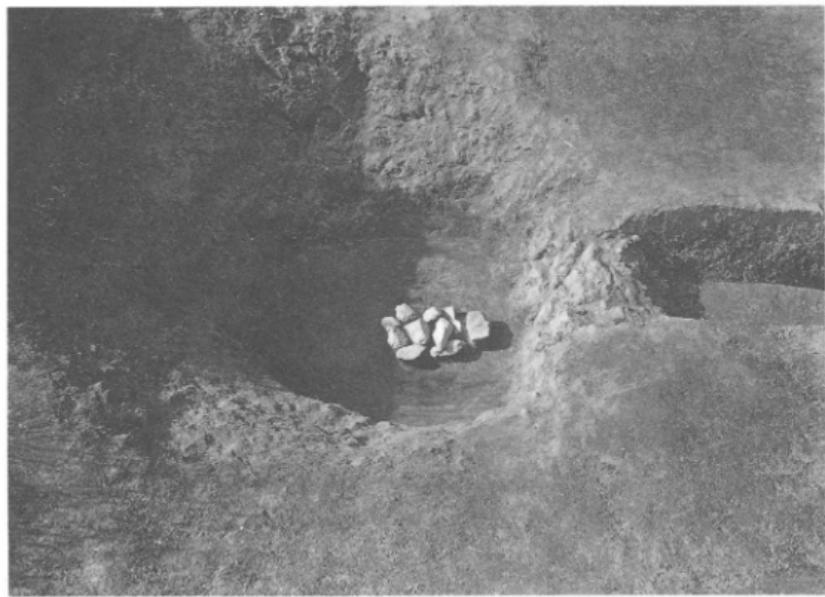
集石遺構



上層遺構



土層断面（F—G間）



B1区火葬遺構



119



113



112



118



162



124



125



136



132



128



149



134

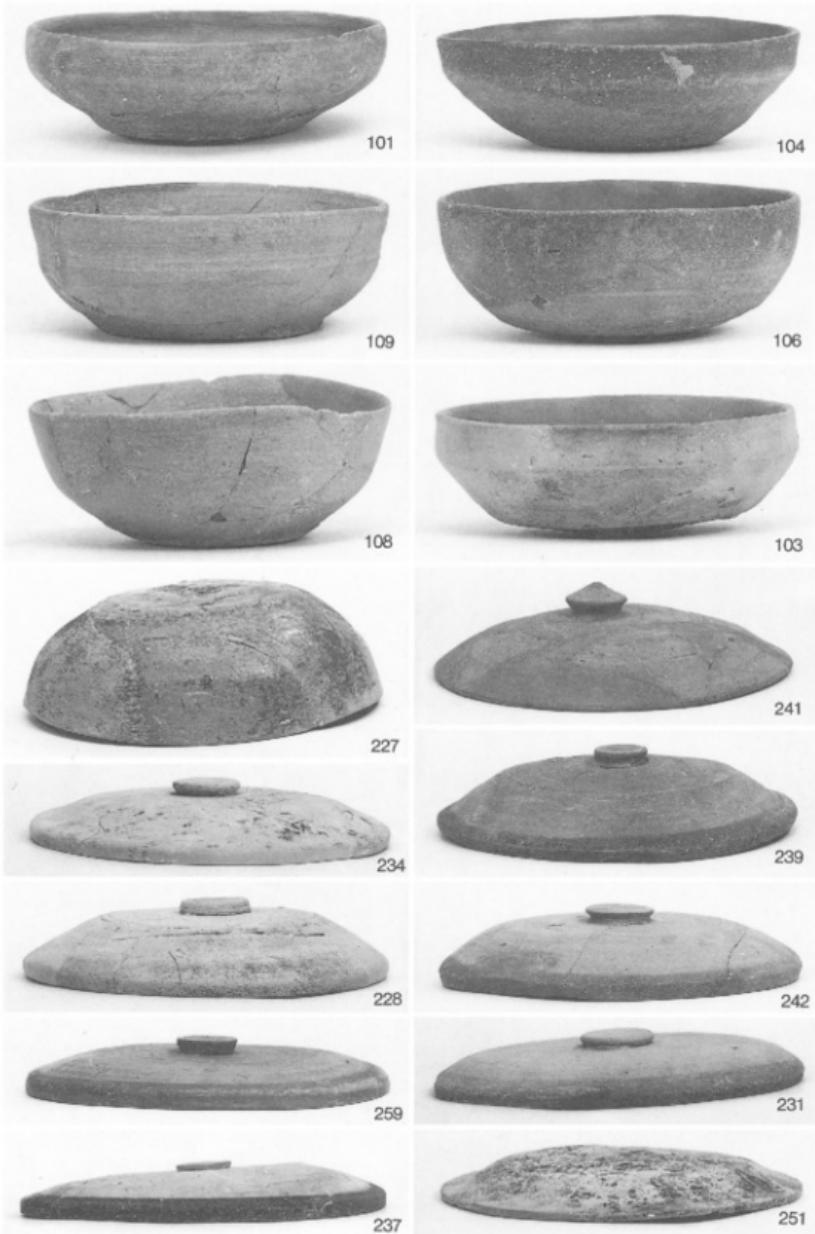


160

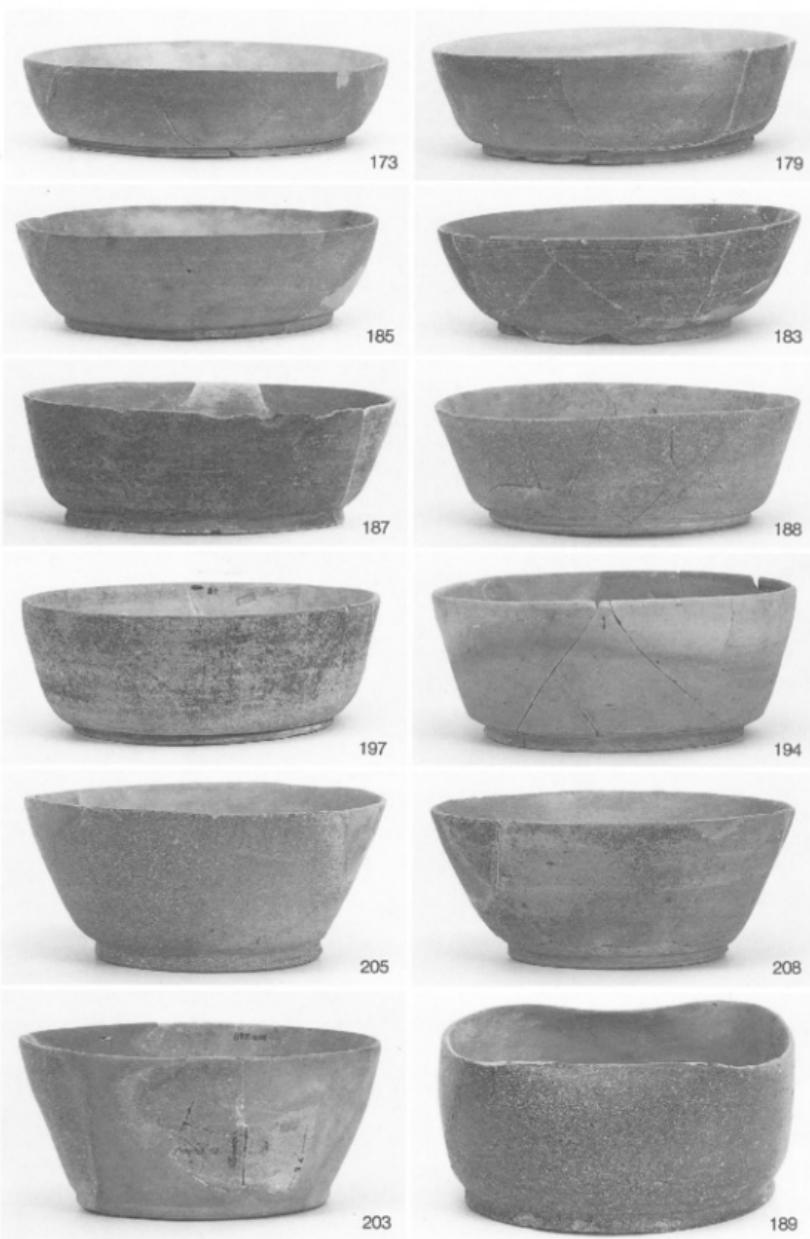


167

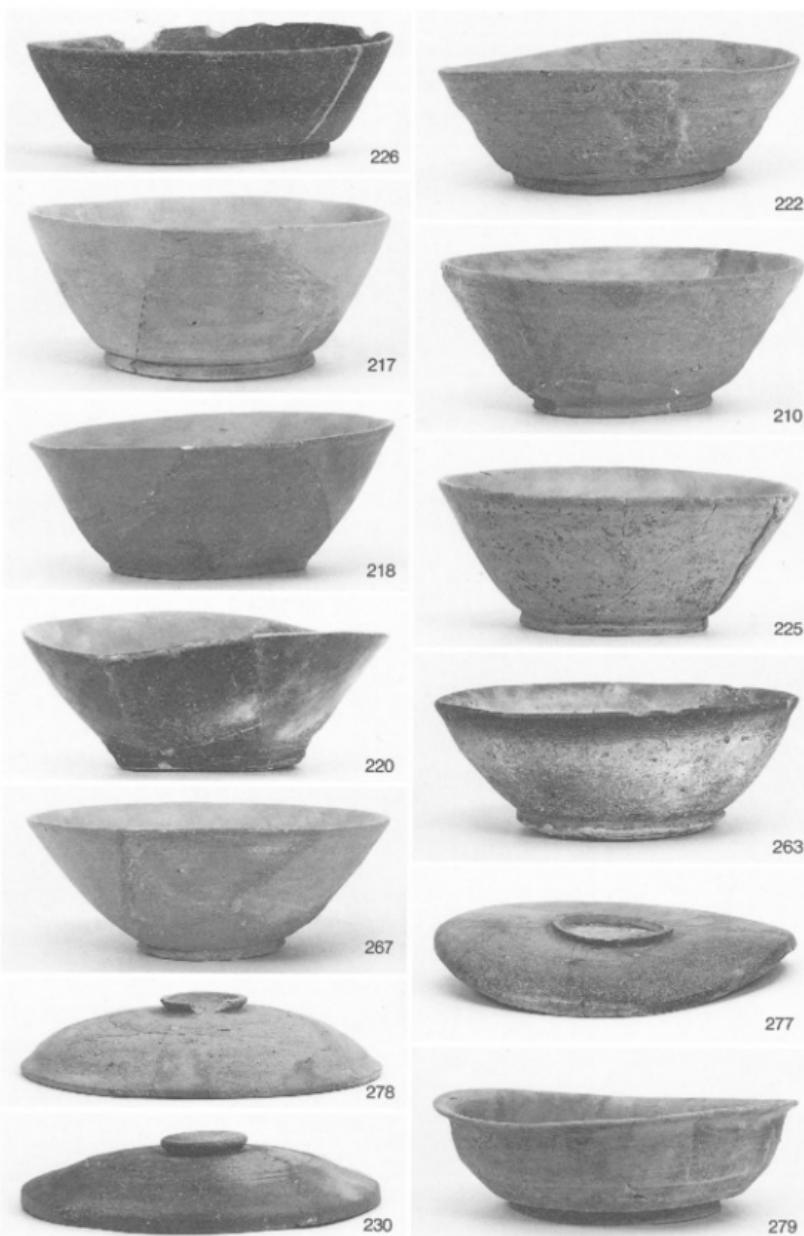
須惠器 杯A



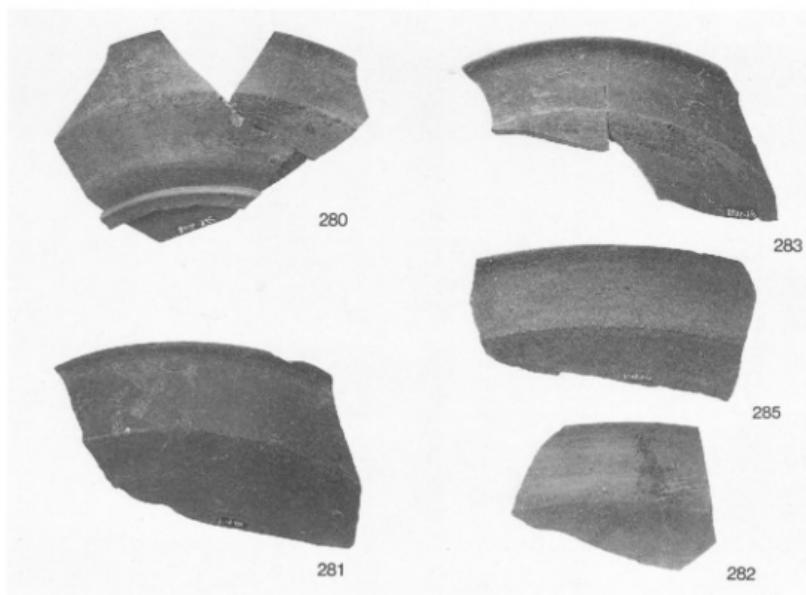
須恵器 杯 A・蓋



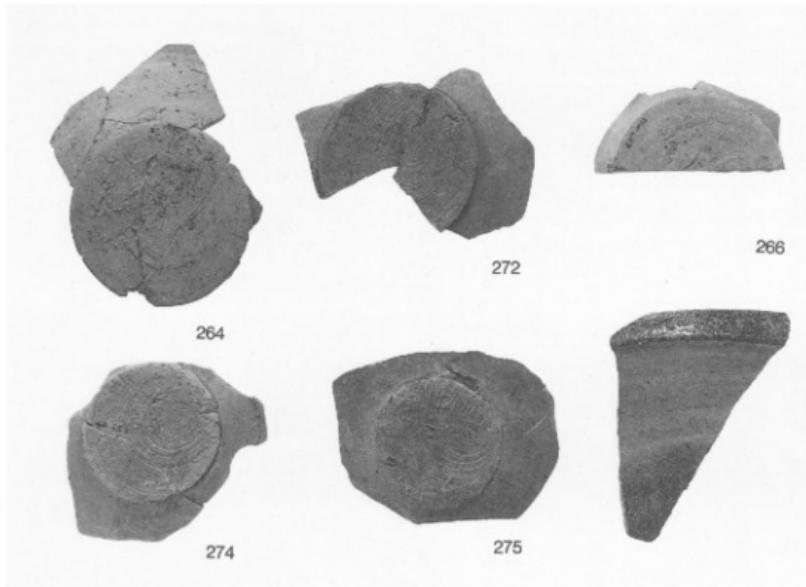
須惠器 杯B



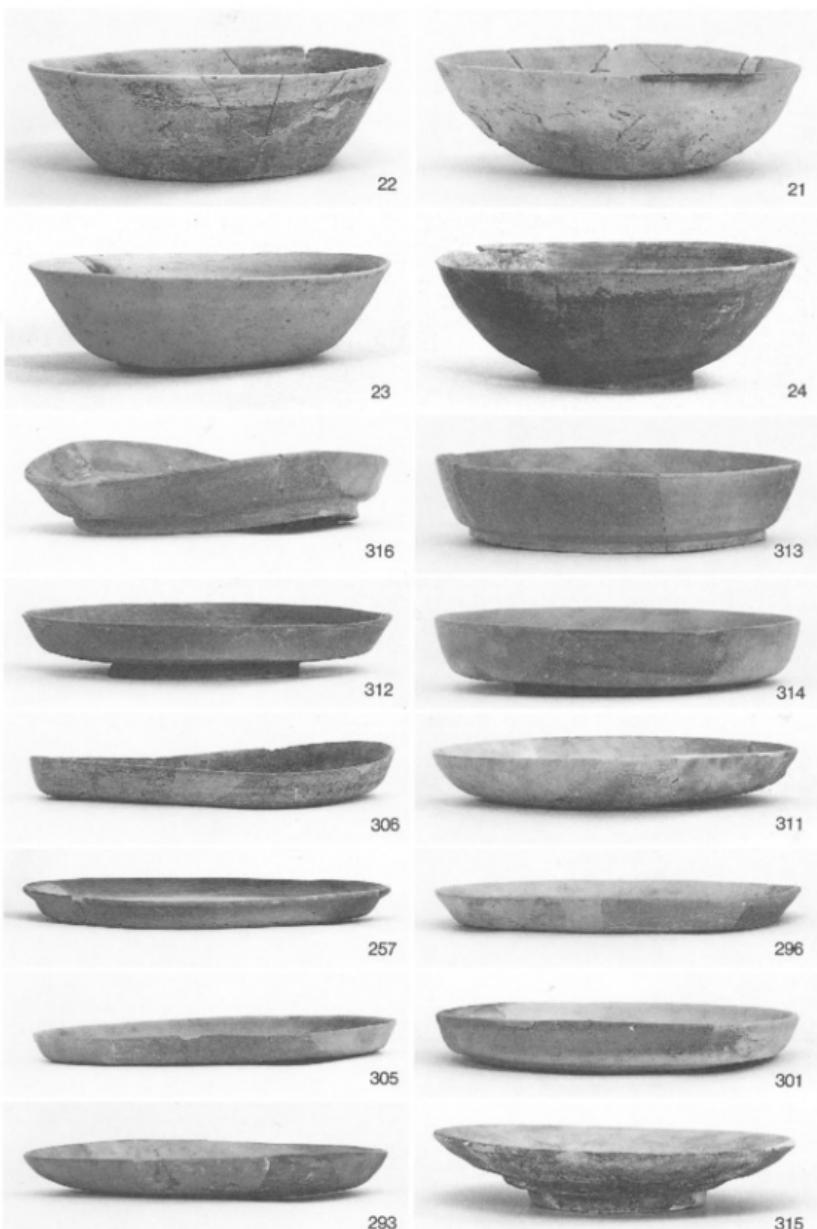
須惠器 杯B・椀・蓋・穰椀



須恵器 稲桙



須恵器 桧・鉢



井戸1出土土器 (21~24)・皿



須恵器 壺・蓋・鉢・高杯・横瓶



333



332

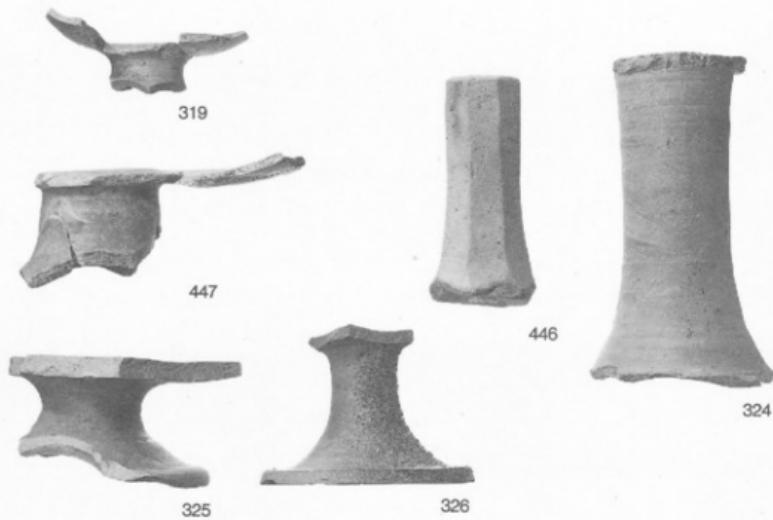


354

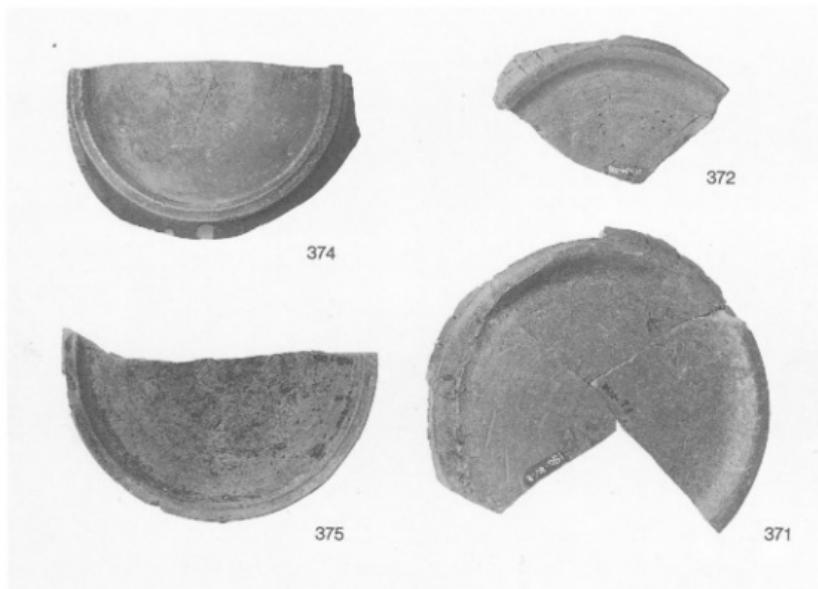


366

須惠器 壺・甕



須恵器 高杯



須恵器 陶硯



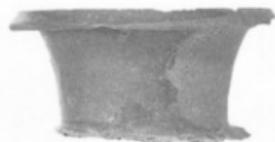
336



337



355



369

須恵器 壺



353



352



356



351

須恵器 壺



339



338

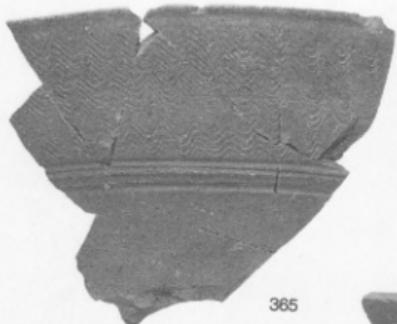


341

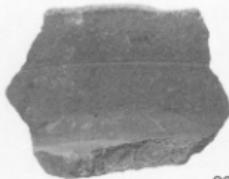


340

須恵器 壺



365



360



362



364

須恵器 壺



401



404



405



414



409



494



421



420



422



423

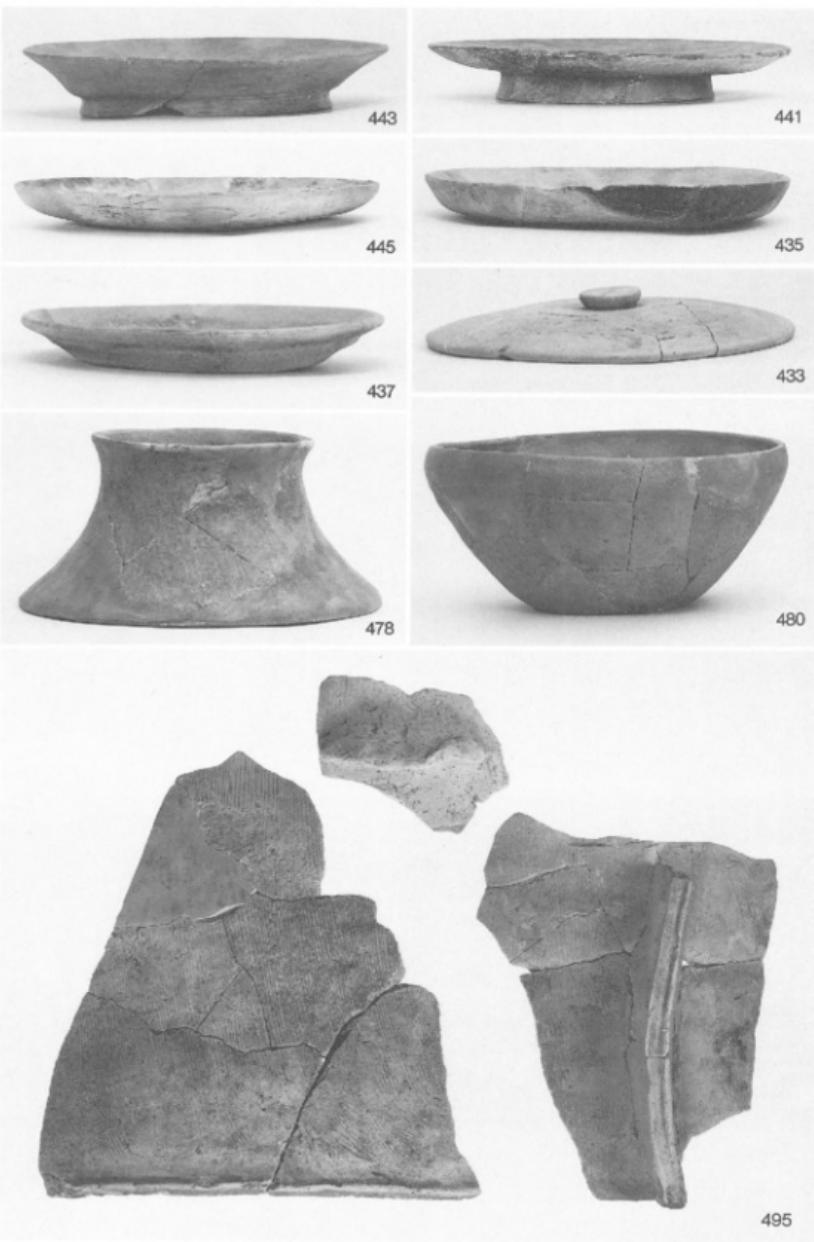


426



407

土師器 杯・椀



土師器 皿・蓋・鍋・鉢・壺



487



479



461



457



460

452

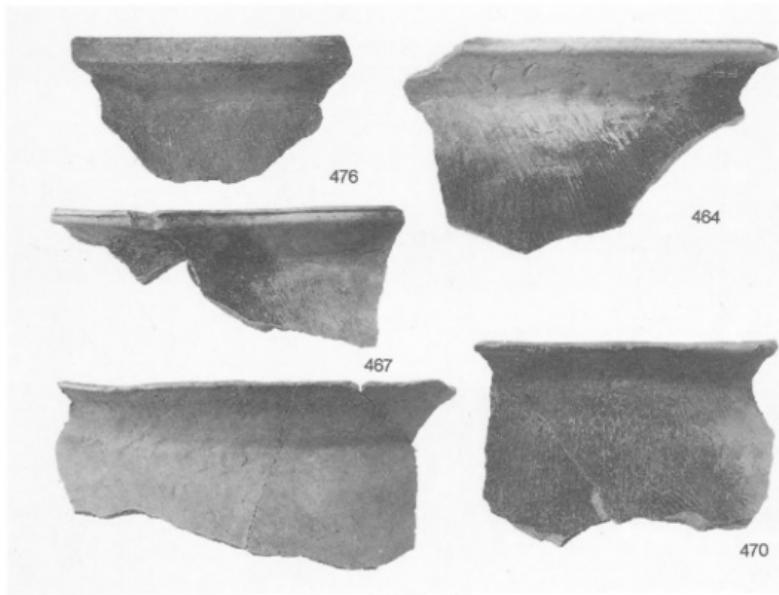


458

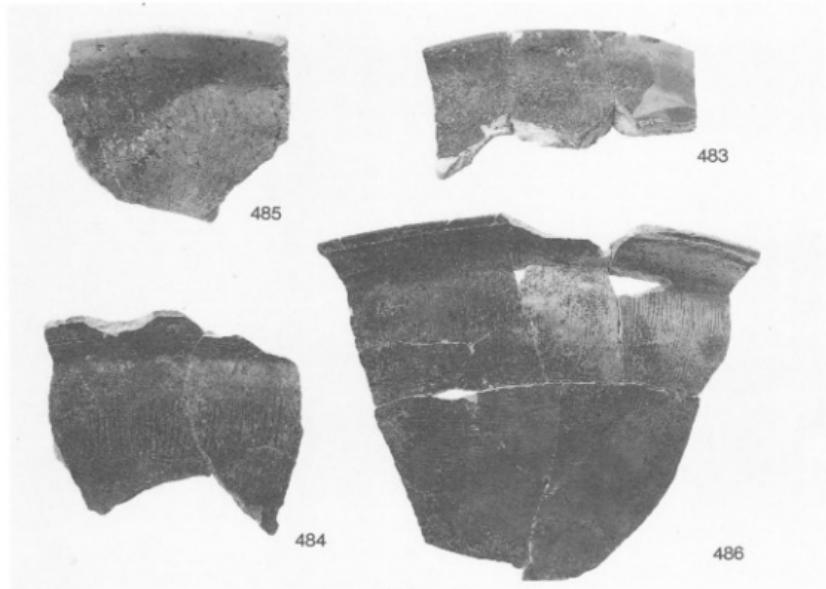
土師器 鍋・壺



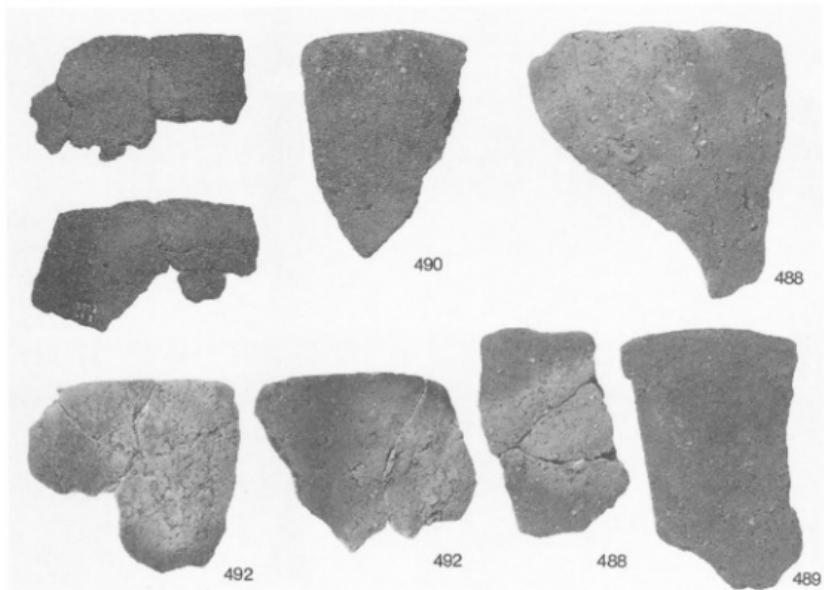
462



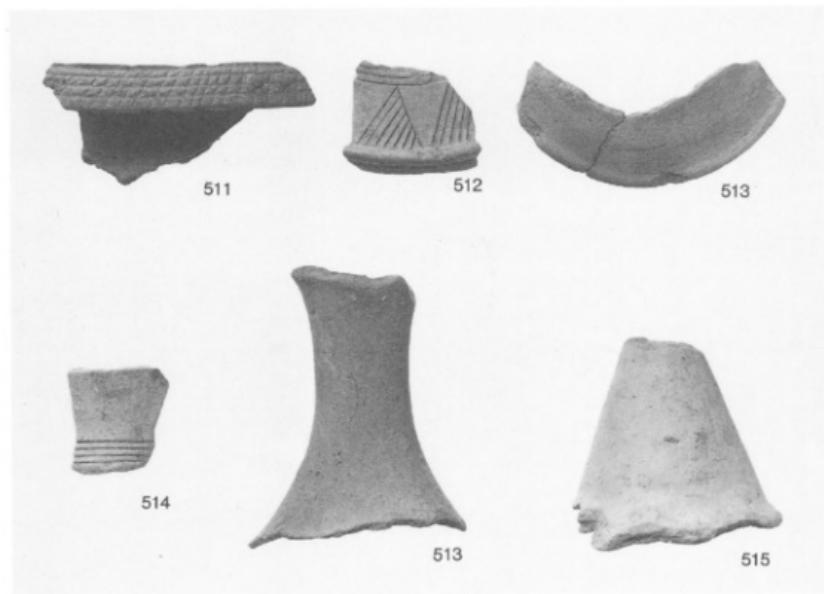
土師器 梗



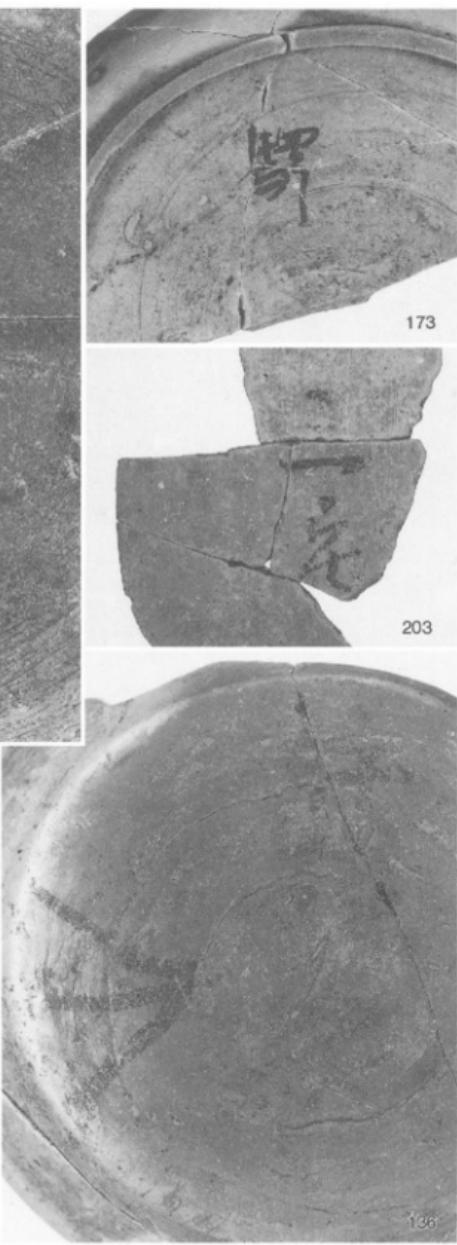
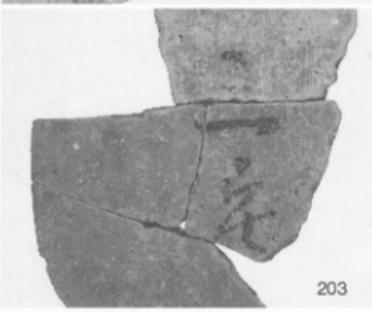
土師器 鍋



製塙土器



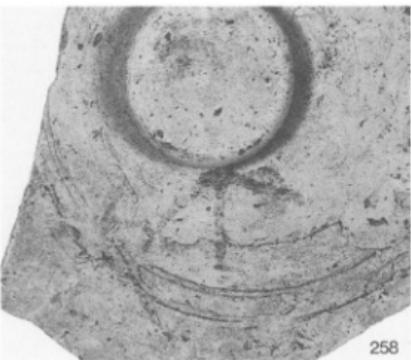
弥生土器・土師器



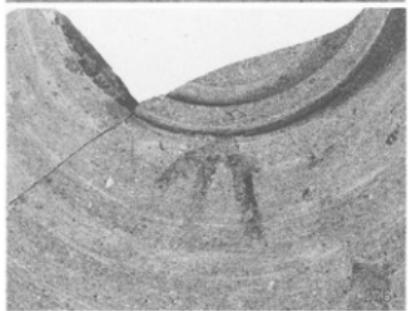
墨書土器 1 (1:1)



237



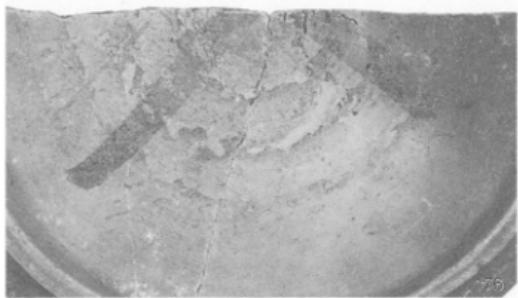
258



259



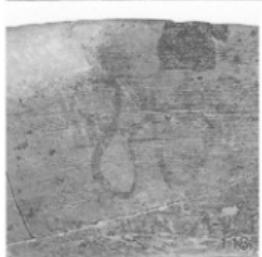
132



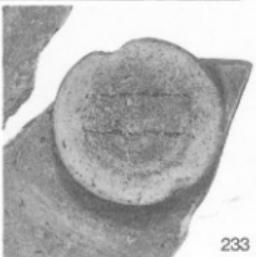
773



109



110



233

墨書土器 2 (1:1)



218



17



380



160



103

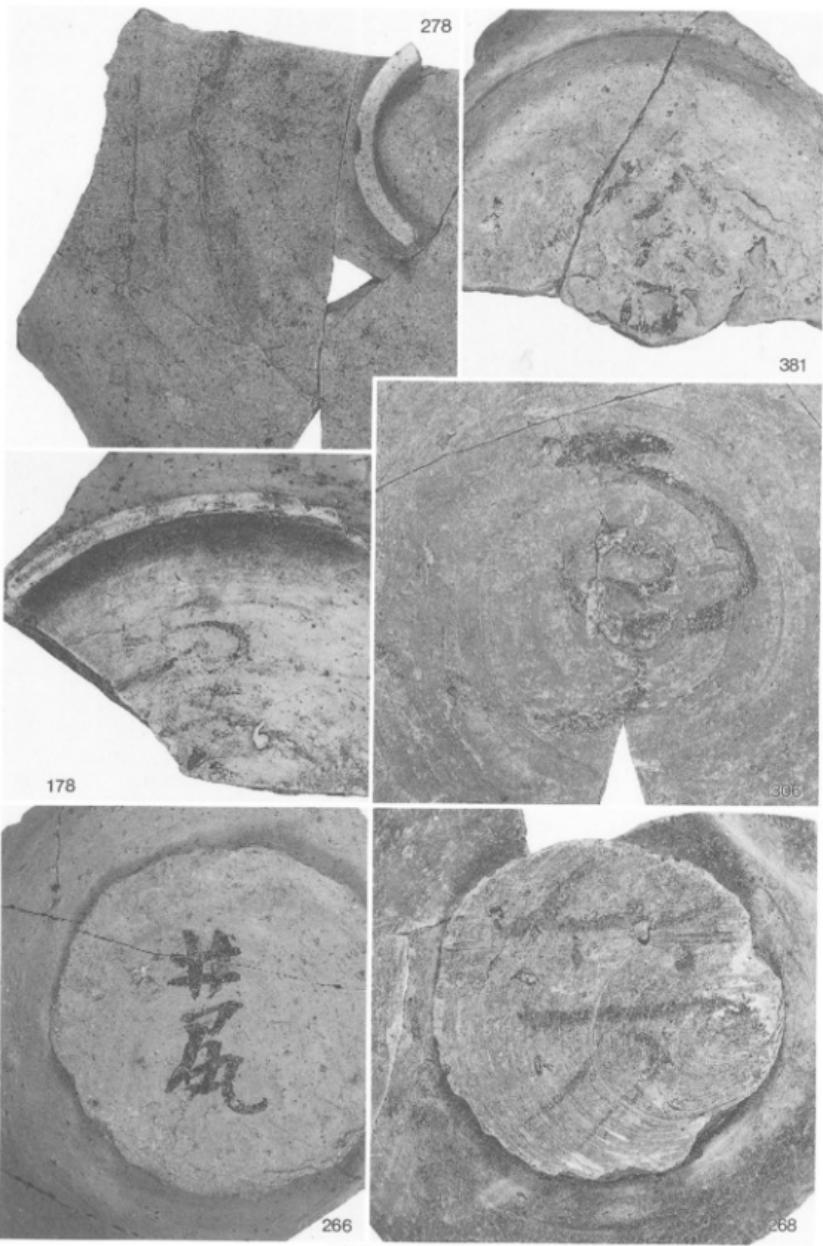


310

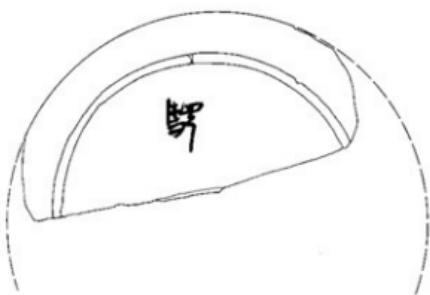


178

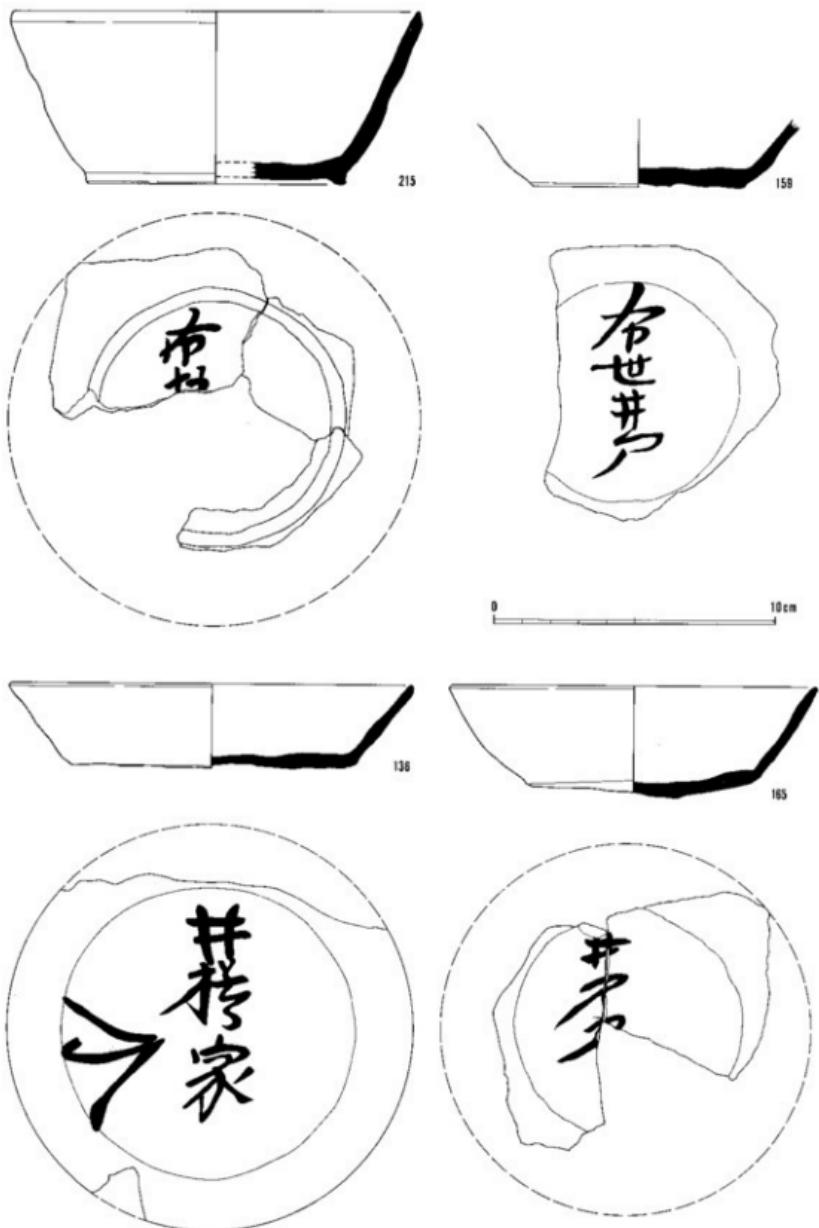
墨書土器 3 (1:1)



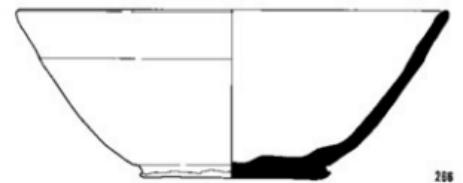
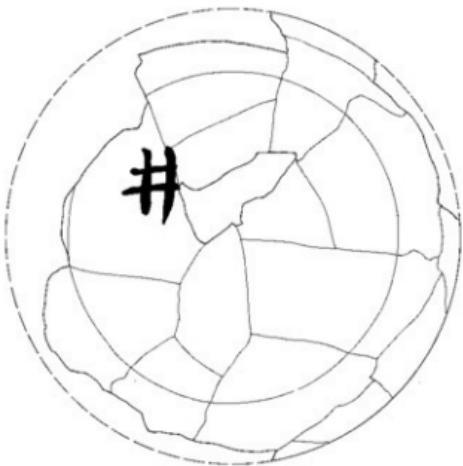
墨書土器 4 (1:1)



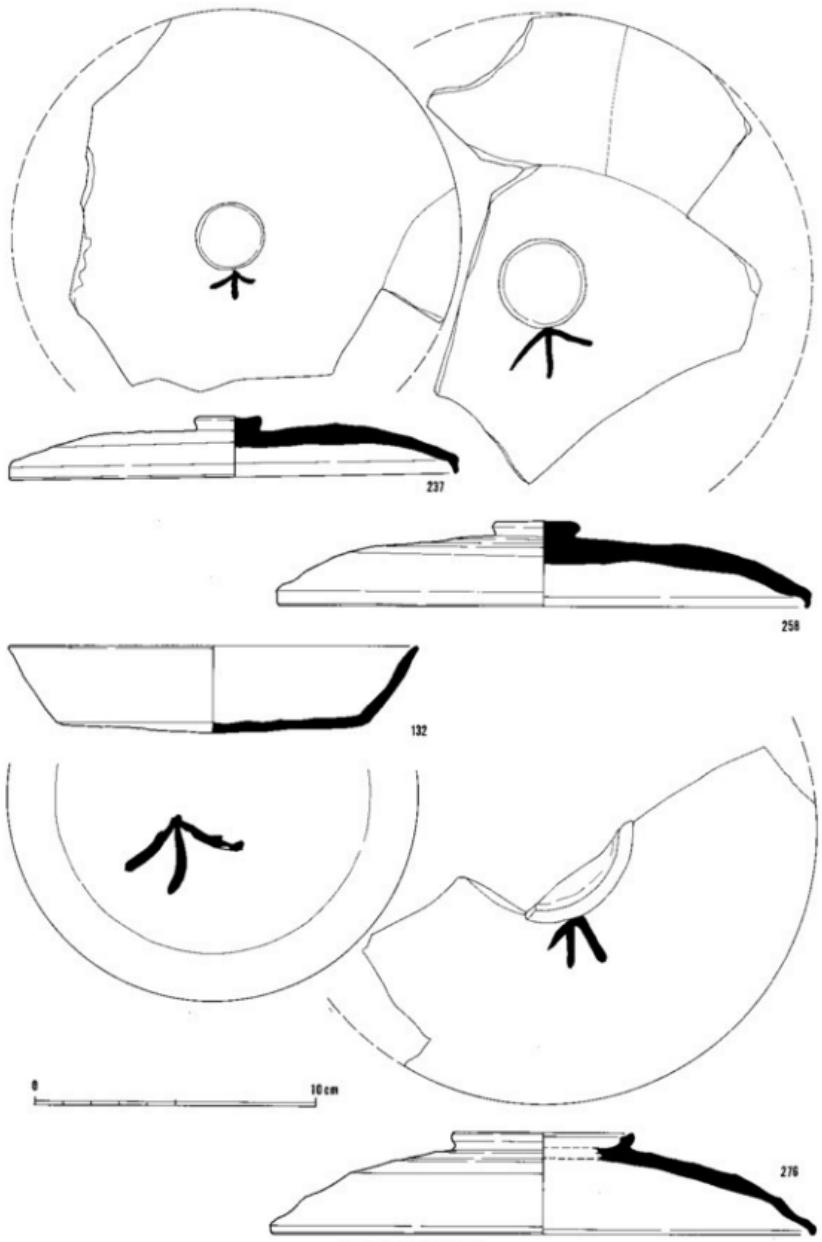
墨書土器実測図 1



墨書き土器実測図 2

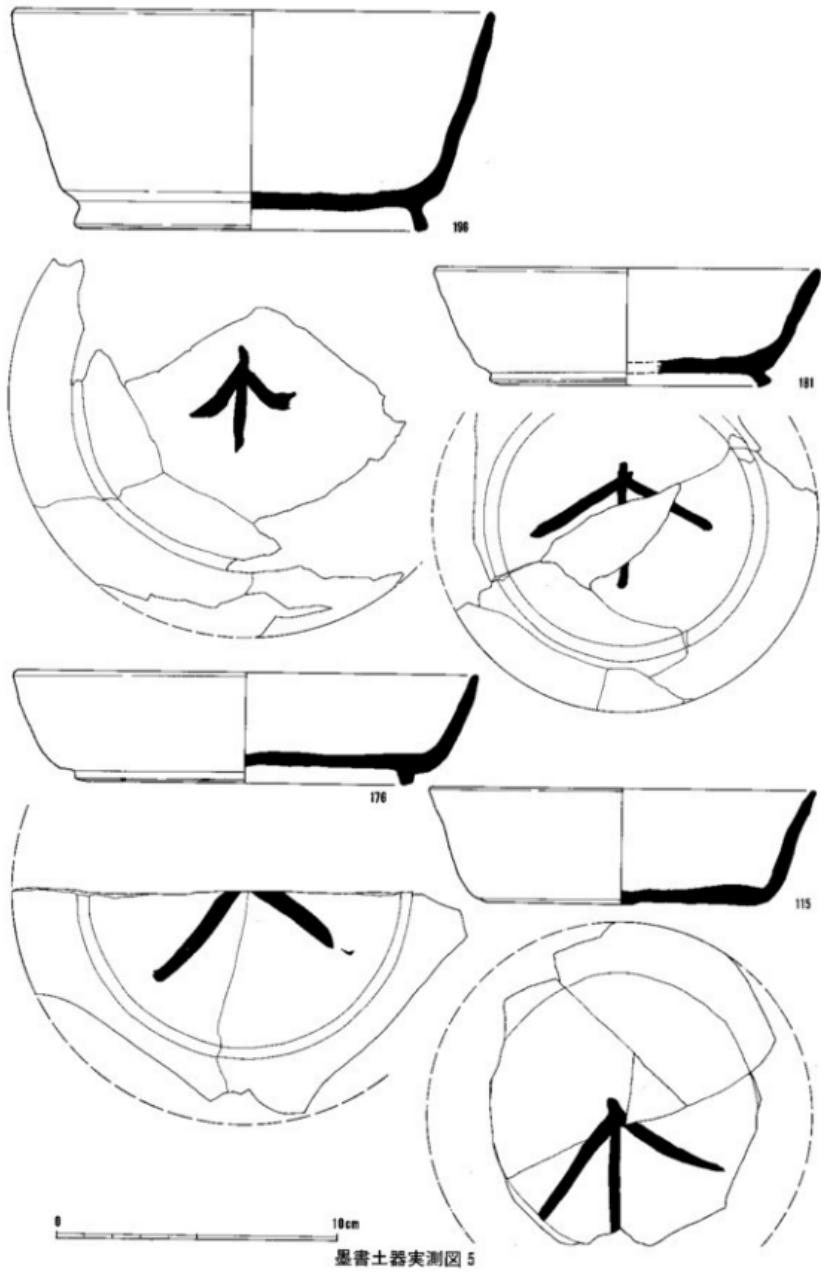


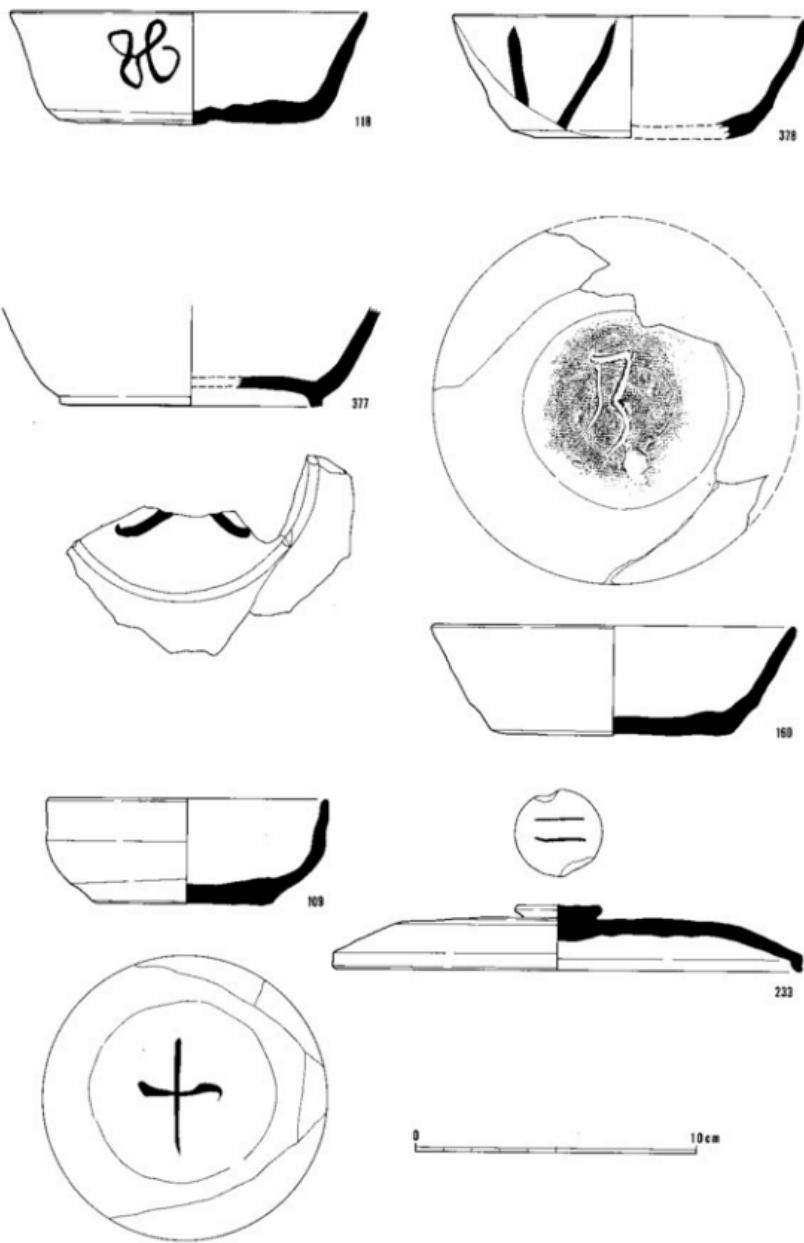
墨書き土器実測図 3



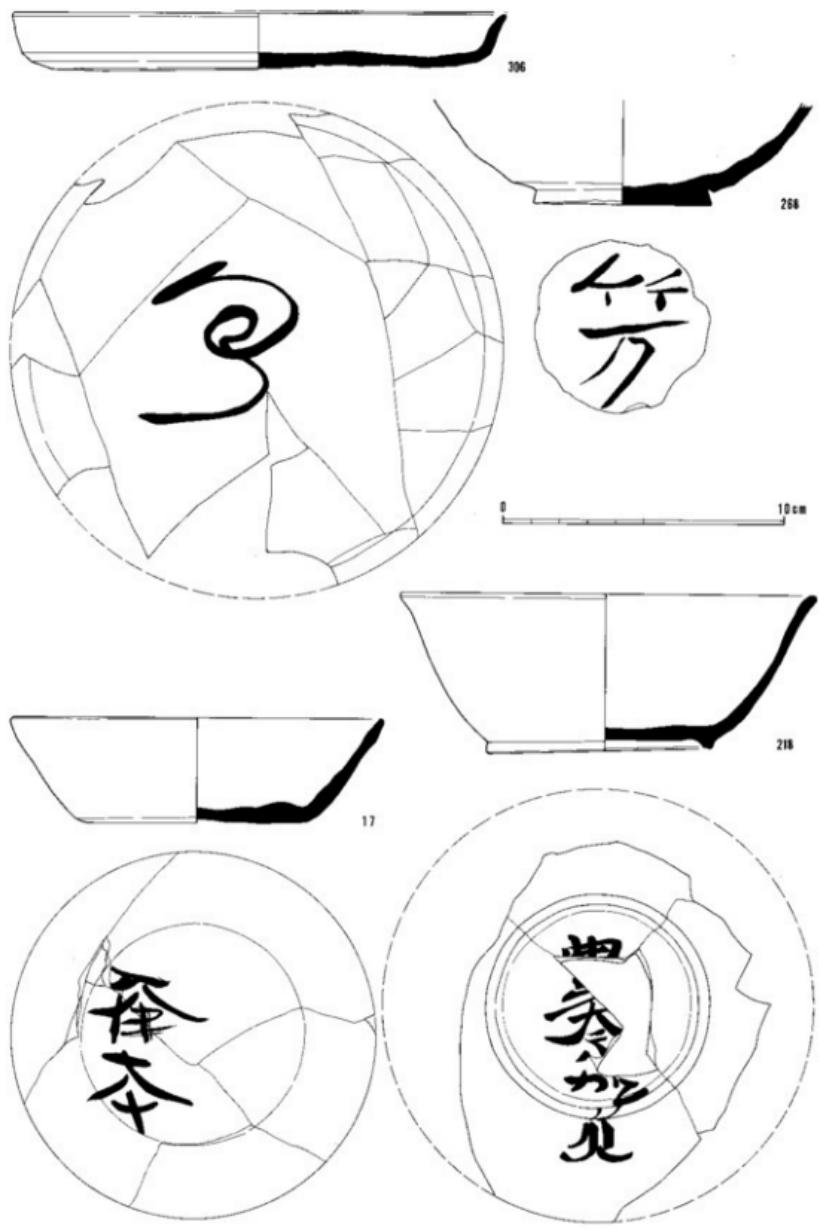
墨書き土器実測図 4

図版三十三 小犬丸遺跡

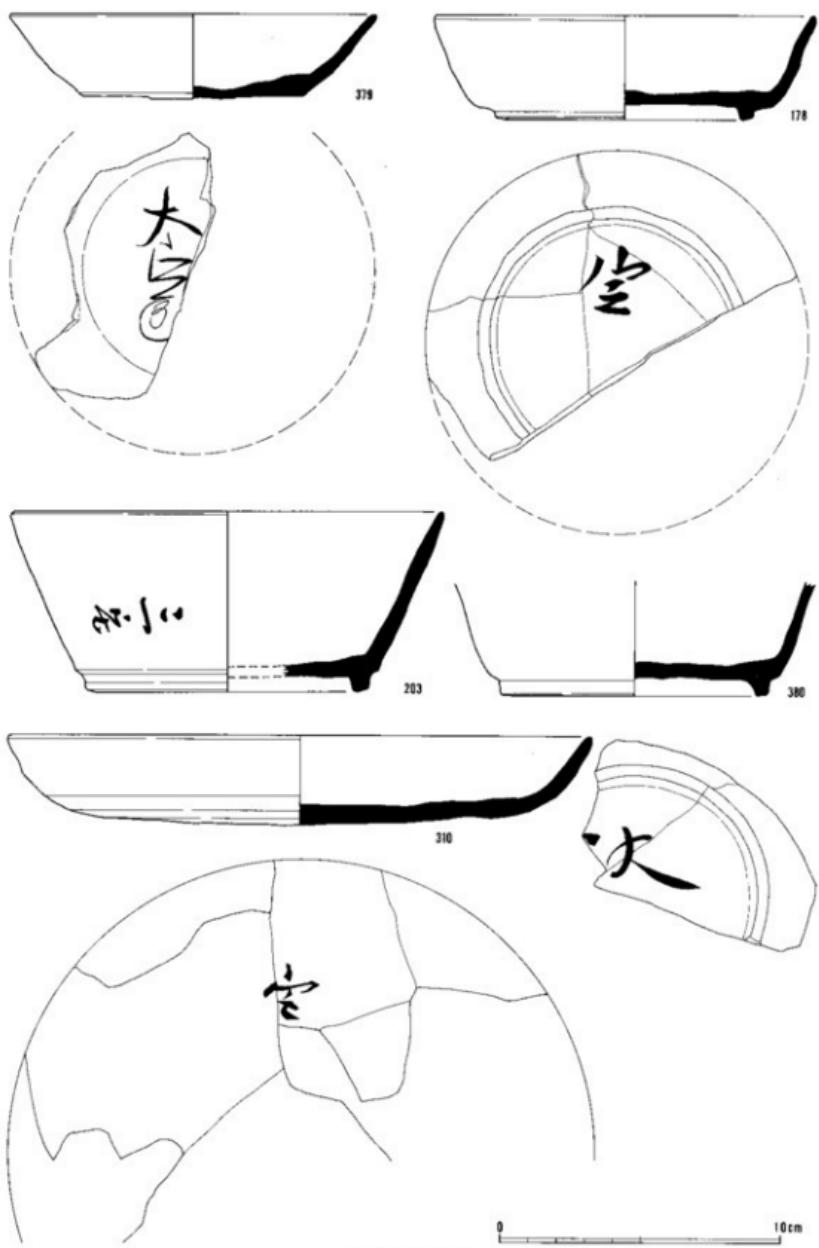




墨書土器実測図 6

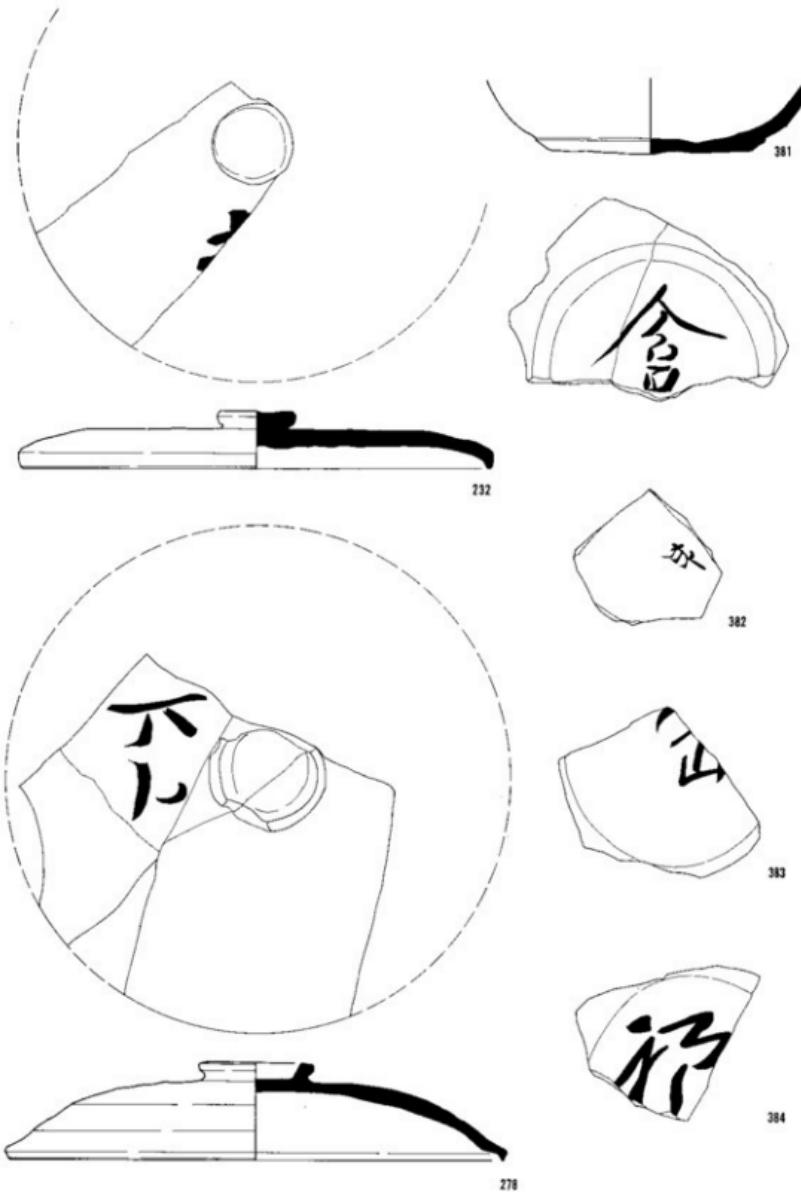


墨書土器実測図 7



墨書土器実測図 8

圖版三十七 小犬丸遺跡



墨書土器実測図 9

0 10cm



601



605



603



602



604



614



615

軒丸瓦・軒平瓦・塙



608

平瓦

606



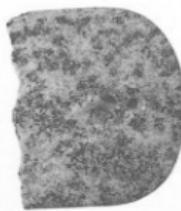
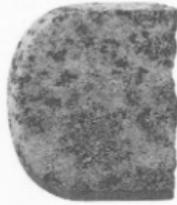
平瓦叩き目各種



613



611



620



630



631



762

丸瓦・石帶・馬の齒・櫛



3



2



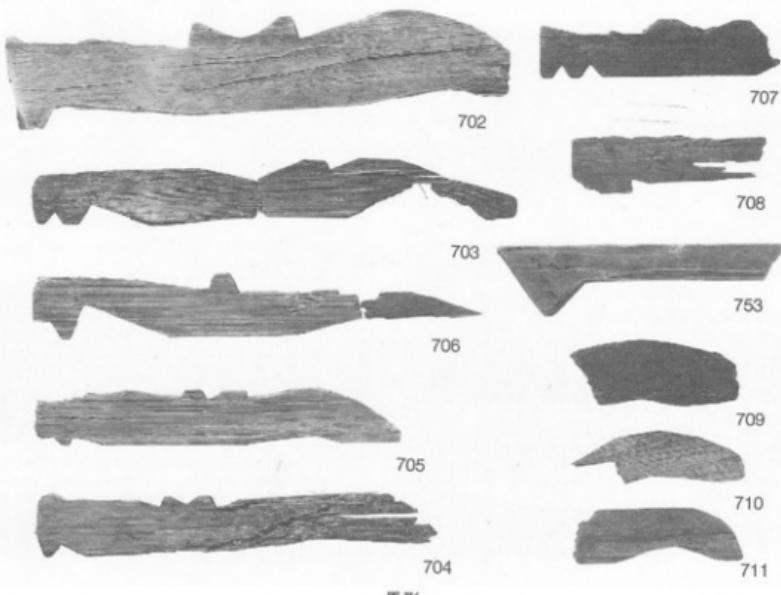
1

木簡

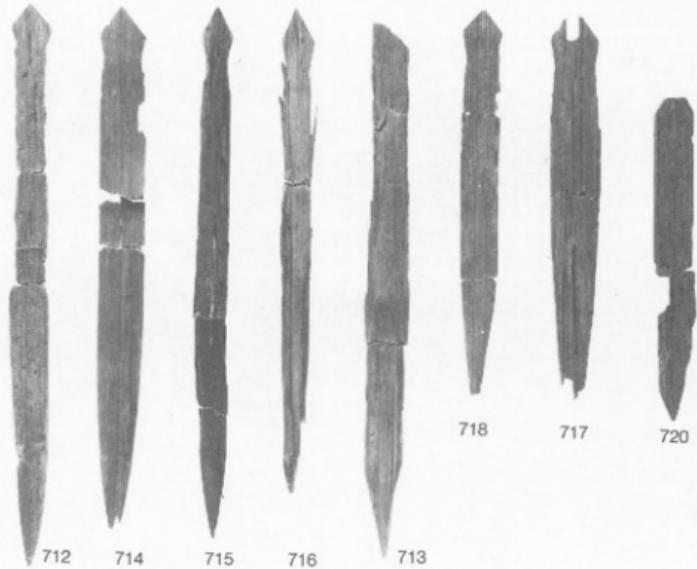
701



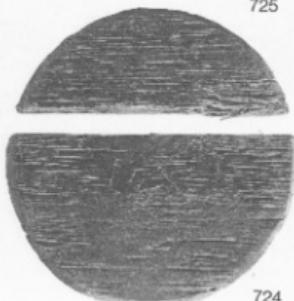
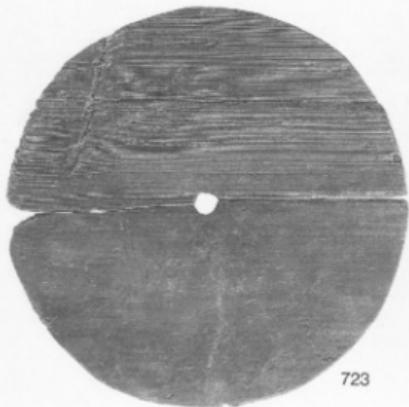
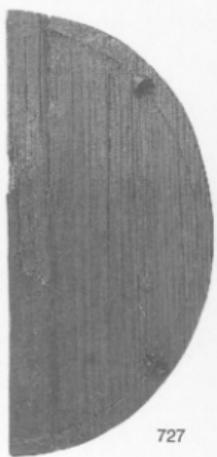
鳥形木製品



馬形



簀串



曲物



731



733



732

三



755

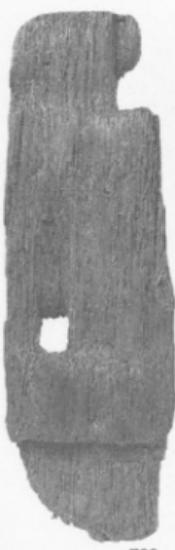


756

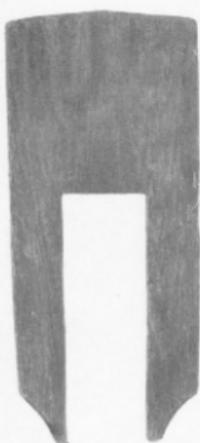


757

田下駄(大足)



736

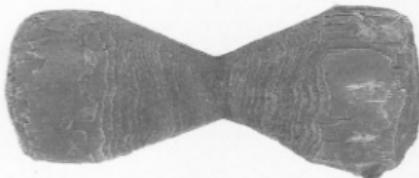


745



746

下駄・不明木製品



747



749



748



750

木鍾



740



739



738



752



741



743



760



758

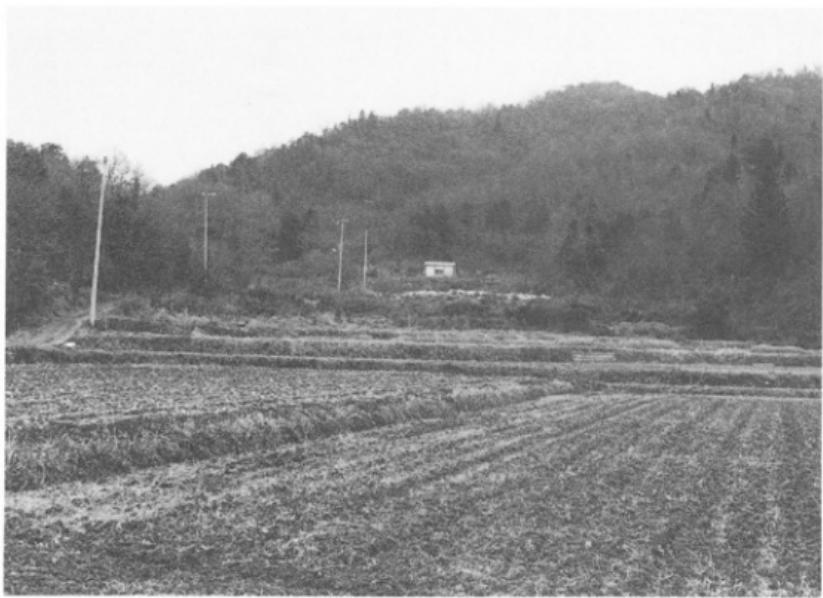


759

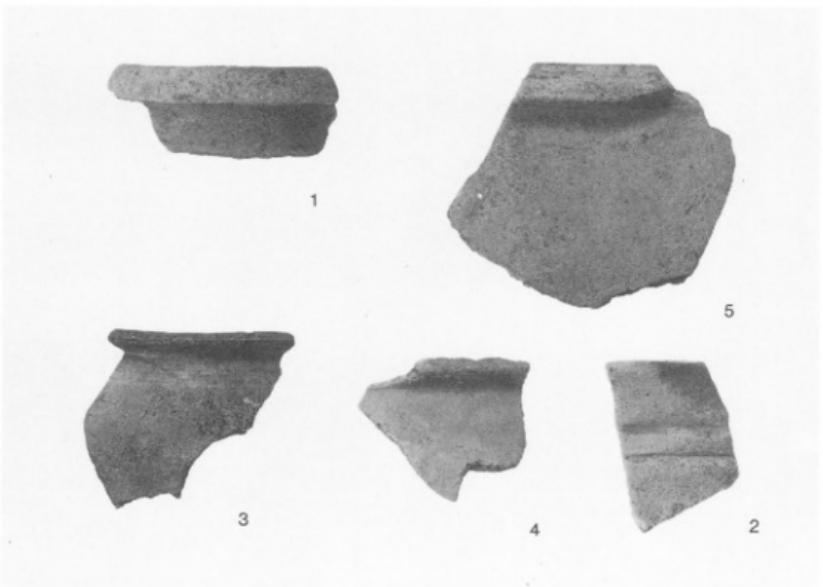


761

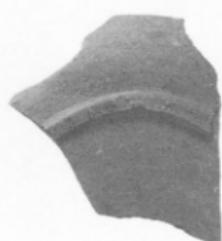
糸巻・刀形・船形・不明木製品



小犬丸遠殿臨散布地全景（西から）



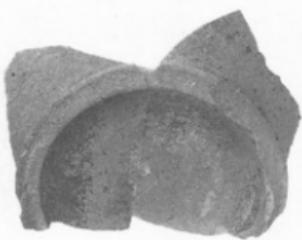
弥生土器



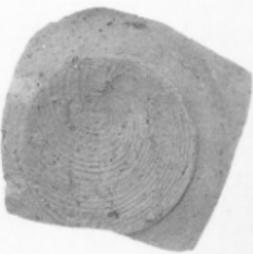
9



7



8



12

須惠器



11



6



13



14

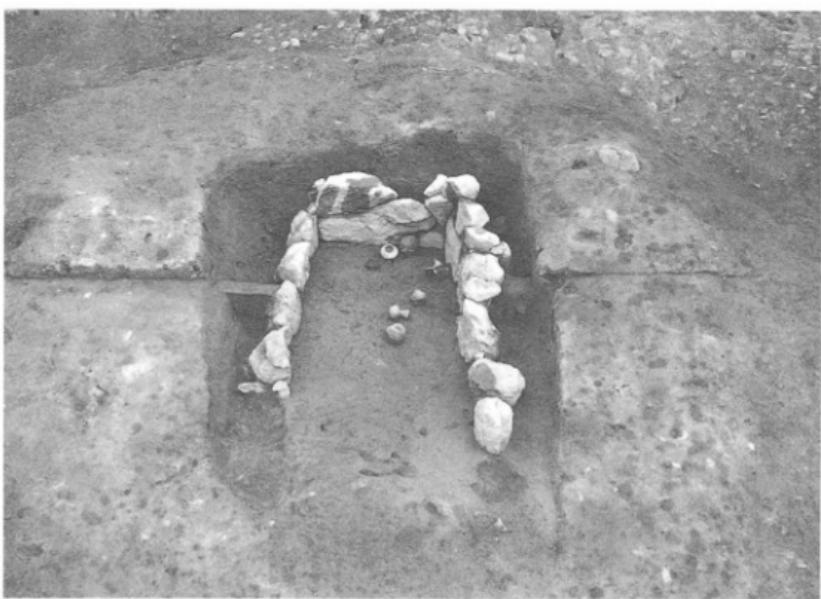
土師器・瓦



墳丘土層断面（東から）



全景（南から）



横穴式石室



中世土器検出状態



802



803



801



804

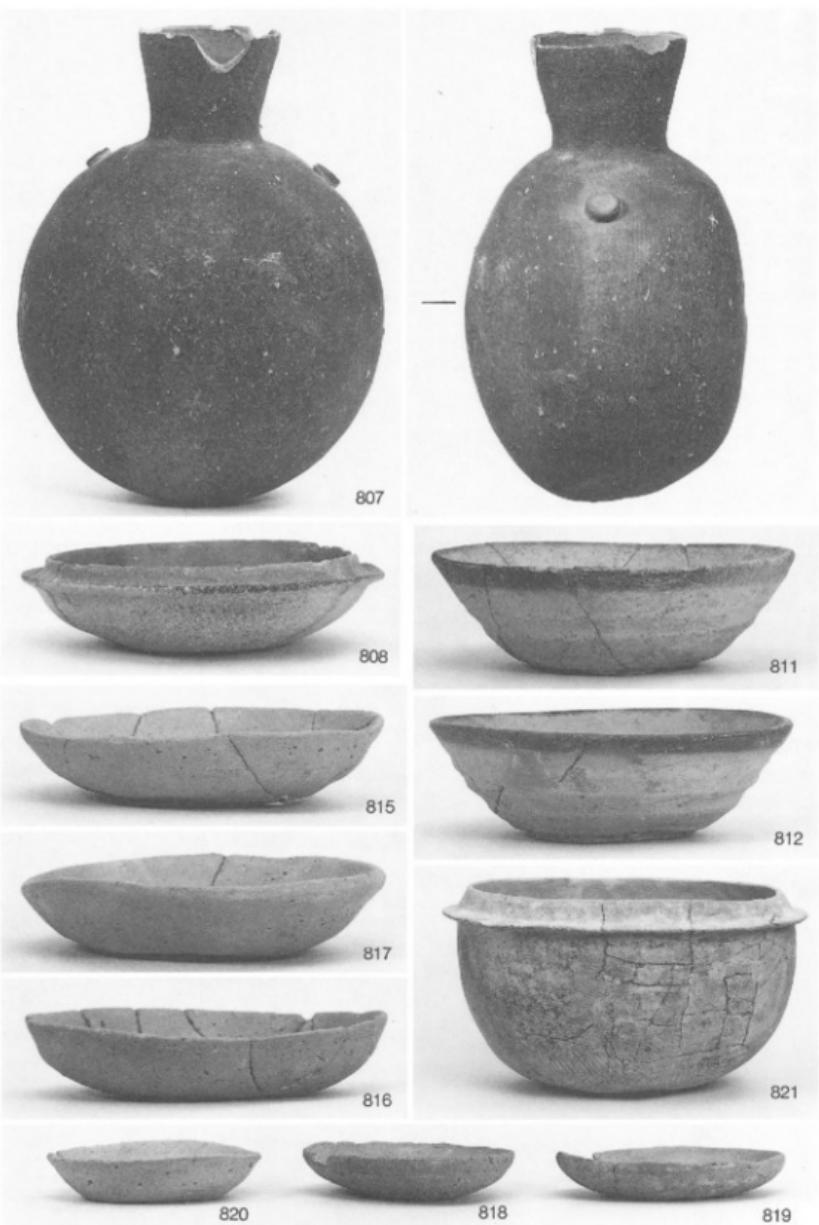


805

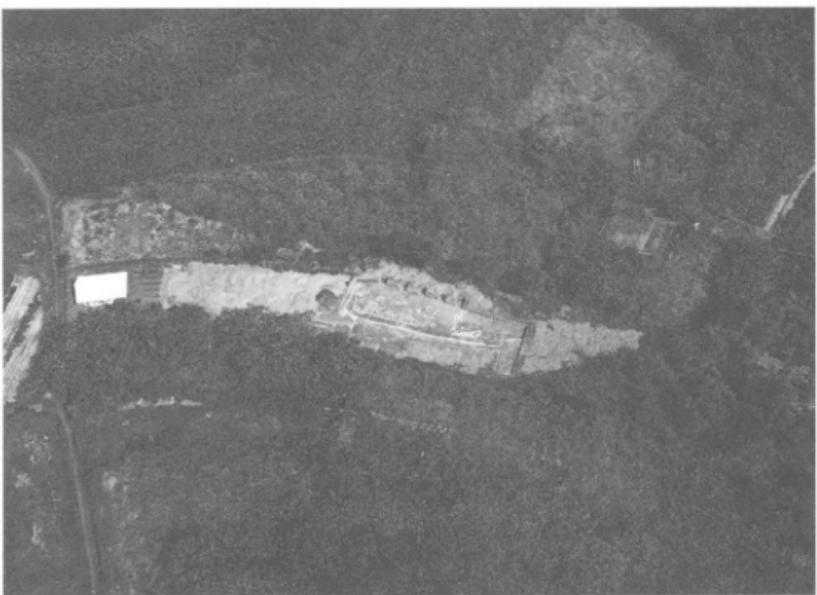


806

出土遺物（須恵器）



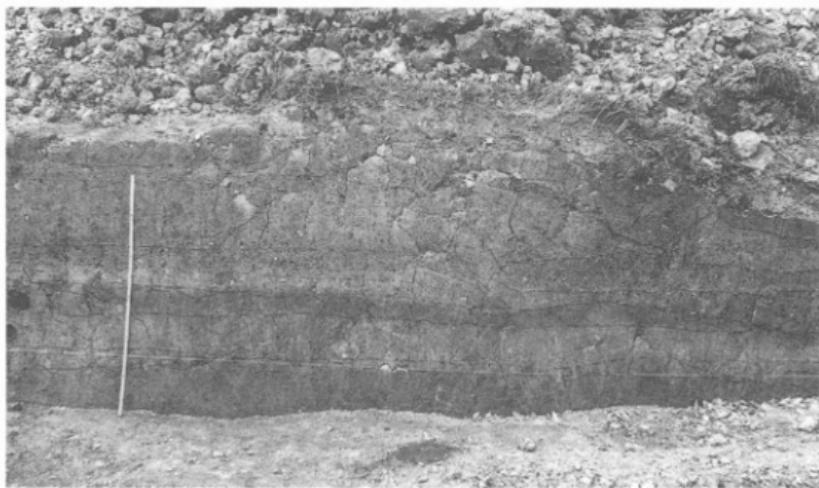
出土遺物（須恵器・中世土器）



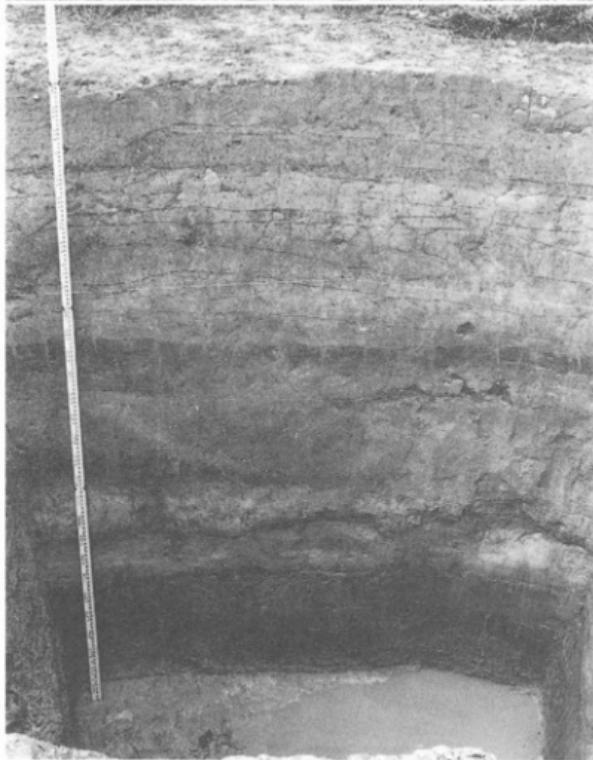
小烟十郎殿谷遺跡（全景）



掘立柱建物跡



No.100条里坪境



No.99 A.T.火山灰檢出狀況

龍野市 兵庫県文化財調査報告 第66号

小犬丸遺跡 II

県道竜野相生線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年3月31日発行

編集発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL(078)341-7711

印刷凸版印刷株式会社
〒553 大阪市福島区海老江3丁目22番61号
TEL(06)454-3111